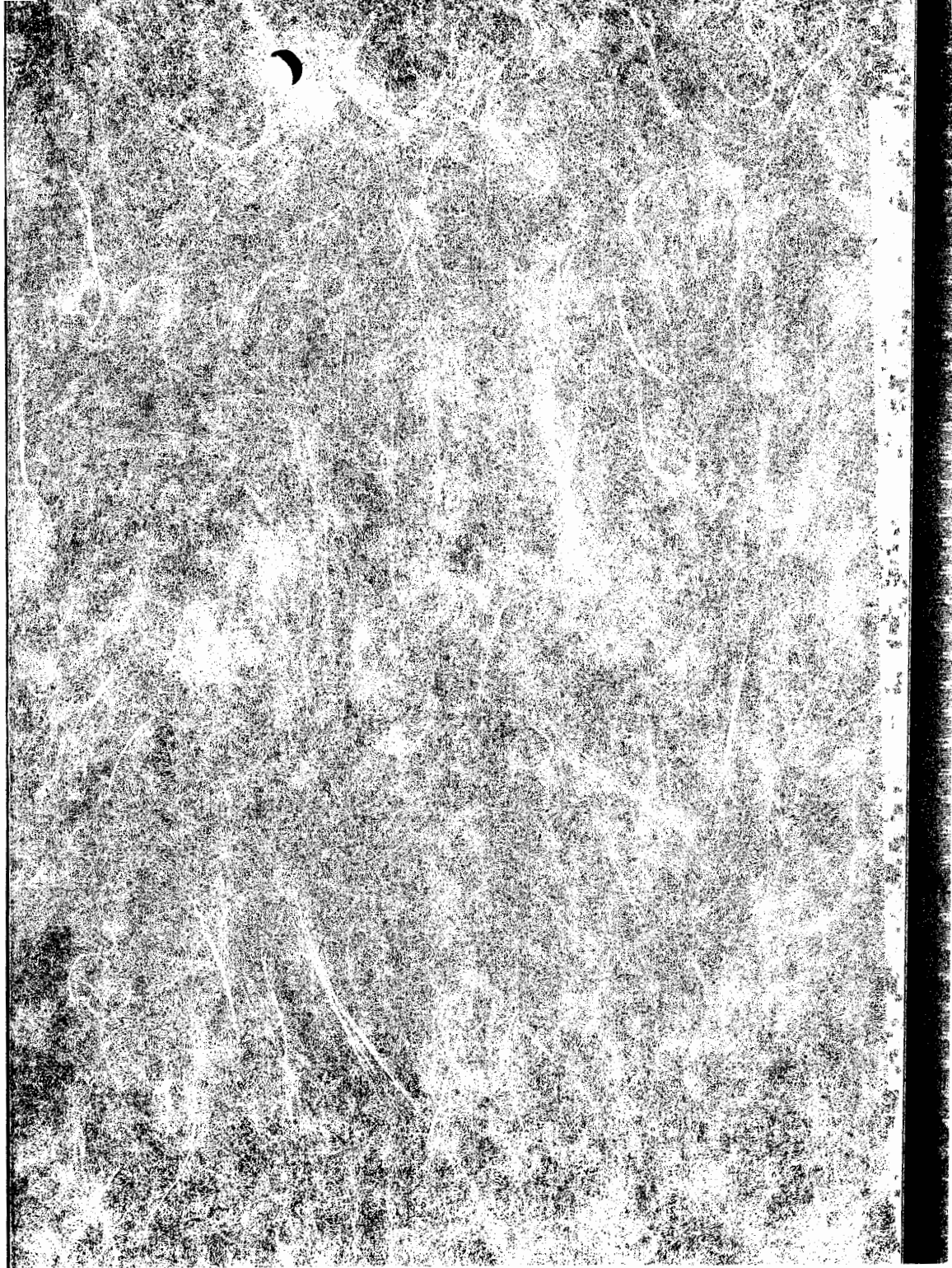


岩瀬村史

第5卷

民俗編



岩瀬村史 民俗編 目次

題字 岩瀬村長 常松 忠勝

口 絵	
発行のことば	岩瀬村長 常松 忠勝
発行にあたって	岩瀬村教育委員会教育長 川西 国男
「民俗編」の監修を終えて	（助）福島県文化センター 歴史資料課長 菅田 宏
例言	

第一章 衣食住

第一節 食とくらし

はじめに

一 はれの日の食べもの	三
(一) 食べるものによる分類	三
餅を食べるとき	三
ダンゴを食べる時	三
赤飯・小豆飯を食べる時	三
(二) 御祝儀の食	七
(三) その他のはれの食べもの	二

二 ふだんの日の食べもの

(一) 主食と副食	三
(二) コジュハンの食べもの	三
(三) 調味料と味付け	三
(四) 保存食	三
凍み餅 漬物 納豆	三
(五) 漬物	四
タクアン	四
バリバリダイコン	四
梅干し	四
ラッキョウ	四
(六) 川魚	四
三 その他の食べもの	五
(一) 水飴づくり	五
(二) 山菜と木の実	五
四 食制	六
五 水とくらし	六
(一) 台所と飲料水	六
(二) 名水・霊水伝説	七
(三) 弘法清水伝説	八

第二節 衣とくらし

はじめに

一 仕事着と普段着

(一) 被りもの

手ぬぐい かさ

(二) 上 衣

ハンコ(ハンチン) ヤマジユバン

(三) 下 衣

(四) 履き物

ウスグツ アンダカ

二 晴 れ 着

麻の葉模様 成人の衣

三 子供の着物

四 髪 型

五 化 粧

六 雨 具

七 夜 具

しびぶとん

第三節 民 家

一 民家調査方法

調査対象民家の抽出と方法 家屋台帳からみた民家 民家に対する近世文書近代文書資料

家の古さとは 近世の民家と家作制限令

二 岩瀬村の民家

岩瀬村の地理的位置 岩瀬村の民家の変遷 屋敷取り オモヤ・ホンヤ 付属屋 ホンヤの規模

大黒柱・恵比寿柱・乞食柱 屋根型 間取り ドマ シタイドコロ ウワイドコロ ナンド

ザシキ 仏壇・神棚 三本溝痕 入口の位置 入口の向き 柱間寸法 家に関する俗言

三 建築 儀 礼

地鎮祭 どうづき(土搦き) たてまえ(上棟式) 聖徳太子像と大工の伝説

四 調 査 民 家

増子範之家 矢部周蔵家 鈴木淳家 常松英雄家 上妻徳栄家 添田正志家 石井栄一郎家

相楽弘巳家 渡辺一夫家 隠居屋解説 本郷主税家

八 お 針

九 草 木 染 め

藍染

第二章 生業生産と生活

はじめに

第一節 稲作とくらし

一 種蒔きの準備

種籾浸し 選別 芽出し 種蒔き

二 田うない

三 苗とり

四 田植え

田植えの時期 手植え ガジ植え 田植えの禁忌 初田植え 定規植え なみき植え 馬鍬洗い サナブリと泥洗い

五 用水と水の管理

番水 畑田村と柱田村の水争い 干ばつ雨乞い伝説

六 田の草とり(除草)

七 稲刈り

八 稲干し

九 脱穀調整

十 籾摺り

十一 種籾の保存

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

十二 肥料

十三 湿田の稲作

第二節 畑のしごと

一 麦と大豆

麦のサクリ切り 麦やぎり 大豆

二 煙草

タバコの苗床 種蒔き 仮植 本畑植え 葉取り 乾燥

第三節 農耕儀礼

第四節 農書の利用

第五節 畜産と暮らし

一 馬

二 牛

第六節 山仕事とくらし

一 炭焼き

炭窯つくり(石窯) 立て込み・火入れ あらしかけ 窯だし 炭つくり・運搬 炭焼きの衣

二 柴切り

第七節 養蚕

三

三

六

六

六

七

七

七

七

三

三

三

六

六

第八節 漁労・狩猟

一 漁 労

マセ 川ざらえ ドウ ジャガオイ ドジョウドウ

二 狩 猟

第三章 諸 職

第一節 こうじ屋

一 浸 し 米

二 蒸 す

三 種こうじとあわせる

四 室(むろ)内の作業

五 室の構造

第二節 醬 油 屋

一 仕込 作業

原料 合わせ

二 熟 成

三 庄 搾(しぼり作業)

四 火 入 れ

四

四

五

七

九

九

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

第三節 桶 屋

第四節 鍛 冶 屋

第五節 花 火 師

第六節 和 紙

第七節 屋 根 葺 き

一 屋根の葺き方

二 グシトリ

三 グシ祭り

四 ヤガリ

五 屋根葺きの主な道具

第八節 木 挽 き

一 伐採前の木の石数の見方

二 伐 採 法

三 木 出 し(運搬)

畜力とマクリオトシ

第四章 社 会 生 活

第一節 岩瀬村の変遷と人口

二

三

第二節 ムラの構造

一 ムラのあり方

ムラの境界 屋敷組(ムラ組) 区と隣組

二 ムラのしくみ

役職 寄り合い 大久保の寄り合い 経費 梅田の経費 共有財産 萱山 梅田財産区 休み日

三 ムラの相互扶助

ムラの仕事 ユイと手伝い 葬式の手伝い

四 ムラの集団

年令集団 大久保の若者組 講集団

第三節 家族と親族

一 家族

家族の人員構成 家と家族 隠居と相続

二 親族

本家と分家 シンルイ

第五章 人の一生

はじめに

第一節 出産と育児

一 出産

妊娠祈願 妊娠の報告 帯祝い 妊娠中の俗信 避妊・墮胎・間引き 安産祈願

出産に関する俗信 嬰兒に関する俗信 出産 ヘソの緒 後産 産婆・トリアゲバサマ

産婦の食事 産湯 胎便 産見舞い 早産 流産・死産 妊産婦の死 双生児

二 育児

乳付けと母乳 夜泣き・疳の虫 ヒトシツチャ・セツチン参り 名付け 産毛剃り

オビヤキ・オビアケ・オビアキ・ヤブルマイ 宮参り 食い初め 初正月 初節供 初誕生日 七五三

出産から成長の過程での祈願先 厄年の子・捨て子・取り子 親クイ歯 しつけ 玩具と遊び 子守り

第二節 婚姻

一 配偶者の選択

男女の交際 ヨバイ 足いれ 結婚の年齢 婚姻圏

二 婚姻

結婚の条件と仲人 見合い・恋愛結婚 茶入れ 結納

三 婚姻の成立

婚礼 ナカバ(仲間)入り お魚はさみ 料理人 ヨメムカエ・見参 嫁入り道具 床入れ

四 婚姻後

あと振舞い 挨拶回り・嫁引き 送り見参 ヒザナオシ 嫁の里帰り 入籍

二六

二三

二四

二六

二七

二九

三三

三五

三六

三六

三五

三〇

三〇

三〇

三〇

三三

五 離 婚	三三
離婚	

六 厄年と年祝い	三四
厄年 年祝い	

第三節 葬制・墓制	三四
-----------	----

一 葬 制	三七
-------	----

(一) 俗信・予兆	三七
-----------	----

死に関する俗信 死の予兆 死と関係する作法

(二) 臨終から納棺	三九
------------	----

魔除と神棚 死の通知 役付け 見舞い 通夜 入棺 死に皮焼き

(三) 葬式から埋葬	三三
------------	----

葬式の日取り 手伝い 六合飯・六合団子・十三仏団子 葬式の道具 穴掘り 葬式・出棺 野辺送り

四十九の餅・引っ張り餅 岩瀬村の一般的な葬列の役付け 葬式の見舞い・香典 半見舞い 香典返し

(四) 葬式後の供養	三三
------------	----

野帰り 灰寄せ・骨接ぎ 初七日・本七日 四十九日 お盆 盆礼 新盆(アラボン)

新盆見舞い 送り盆 彼岸 年忌

(五) 特殊葬法	三五
----------	----

幼児葬法 伝染病や水死による特殊葬法

二 墓 制	三六
-------	----

墓石 個人墓地・共同墓地 後産の捨て場 葬制に関するその他の俗信

第六章 年中行事	三九
----------	----

第一節 年中行事とは	三九
------------	----

第二節 春の訪れ	四二
----------	----

一 春の待つ行事	四二
----------	----

シロウノツイタチ 節分 地蔵様 カゴツルシ 針供養 山の神 涅槃会 三月節供 梅若十五日

二 先祖の供養	四六
---------	----

春の彼岸

第三節 田植えの頃	四六
-----------	----

一 苗代のしめの頃の行事	四六
--------------	----

花祭り

二 五月の節供	四七
---------	----

五月節供

三 田植え終了時の行事	四八
-------------	----

サナブリ ウマツクライ

四 六月一日の行事	四八
-----------	----

第四節 草取り、そして夏

- 一 夏 祭 り 二四九
- 二 丑 の 日 二五〇

第五節 楽しいお盆(胡瓜の忙しさとともに)

- 一 盆を迎える準備 二五〇
- 七 夕 迎え馬 虫送り 墓掃除 タカンドウロウ 二五一
- 二 お 盆 二五一
- 迎え火 墓参り 盆棚 盆礼 送り盆 盆踊り 二五二

第六節 稲刈りの始まる前に

- 一 秋の訪れを告げる行事 二五三
- 八 朔 二十日 トリガリ(鶏狩) 二五三
- 二 月 と 民 俗 二五三
- 豆名月 芋名月 大根名月 二五三
- 三 秋 の 彼 岸 二五三

第七節 収穫と感謝、そして来るべき年の豊作を願って

- 一 秋 祭 り 二五三

第八節 冬を迎える頃

- 二 刈り上げ 二五五
- 三 収 穫 感 謝 二五六
- 山の神講 エビス講 コキアゲ 二五六
- 一 大 師 講 二五五
- 二 油しめ十五日 二五五
- 三 出替わり一日 二六〇
- カゴツルシ ゴンゲン講 二六〇

第九節 新しい年の訪れ

- 一 正月を迎える行事 二六一
- 煤掃き 納豆ねせ 二六一
- 二 冬 至 二六二
- 冬至かぼちゃ 大赦い 餅つき 松迎え 歳暮 二六二
- 三 歳夜の行事 二六三
- 大晦日勘定 晦日そば 二六三
- 四 大 正 月 二六三
- 二年参り 元朝参り 若水汲み 元日の朝の食事 年始 二六三
- 五 仕事始めの行事 二六四

六 小正月と予祝 二五五
仕事始め 初夢 三日トコロ 神社年始・寺院年始 初正月 山申し 七草粥 初寅

農の初め ナリモウス ダンゴさし ドンド焼き 送り正月 留守居正月 厄落し
オトケの正月 ハヨナワモジリ 二十日正月

第十節 休み日と年中行事 二七〇

一 さまざまな休み日 ーカミゴトー 二七〇

サダメカミゴト 臨時カミゴト ならしカミゴト サナブリカミゴト

二 村の一年を決める行事 二七二

第十一節 ま と め 二七三

第七章 神と仏の信仰 二七九

第二節 村の神々と社と信仰 二八二

一 村内の神社の概要 二八二

二 鎮守の社と信仰 二八四

白方神社 白山神社・白山信仰 神明神社・神明信仰 玉の木神社 柱田神社 熊野神社

鹿島神社・鹿島信仰 守屋神社 横宮神社 金刀比羅神社 諏訪神社 石沼八幡神社

三 山仕事・養蚕の神 二九〇

山神信仰・山神講 蚕養神社

四 病気除の神 三〇二

瘡守稲荷神信仰 痘瘡神信仰 八雲神社 根渡神社・二羽神社

五 火防の神 三〇九

愛宕信仰 古峰原信仰

六 信仰の山と参詣 三二〇

妙見山と信仰 白湯山信仰 飯豊山信仰

七 雨 乞 三二五

第二節 家・屋敷の神と信仰 三二六

一 神の祀り場 三二六

二 ウヂガミ 三二八

第三節 寺院・仏堂と仏信仰 三三〇

一 村の寺院と仏堂 三三〇

(一) 寺 院 三三〇

永祿寺 照光寺 長命寺(畑田) 白山寺 長命寺(梅田) 瑞蔵寺 西蔵寺 満願寺

(二) 仏 堂 三三三

二 寺院の年中行事と檀家 三三三

(一) 一月の行事 三三五

(二) 二月の行事 三三五

(三) 三月の行事	三七
瑞巖寺の縁日	
(四) 四月の行事	三七
花まつり 照光寺の地藏様	
永祿寺の薬師(八日)・弘法様(二日)	
(五) 八月の行事	三九
施餓鬼会	
三 村の仏と信仰	三〇
(一) 観音信仰・観音講	三〇
安産・子育てと観音信仰	
東堂山の観音信仰	
馬の供養と馬頭観音	
仙道三十三観音札所と巡り	
四 地藏信仰 地藏講	三九
(一) 六 地藏	三九
(二) 滝の地藏信仰	四〇
(三) 岩瀬二十四番地藏札所と巡り	四三
五 阿弥陀信仰 念仏講	四六
六 薬師信仰	四九
七 毘沙門天信仰	四九
八 弁天信仰	五〇
第四節 神仏信仰と講	五二
一 講について	五二

二 岩瀬村に見られる講	五二
庚申信仰・庚申講	
二十三夜講	
第五節 おしんめ様・御師・淡島様	五四
一 おしんめ様	五四
二 岩瀬を訪れていた御師	五五
三 淡島様	五五
第八章 交通・運搬・通信・交易	五七
第一節 交通	五九
一 岩瀬村の道路	五九
仙道・会津の中継地	
滝新田(滝原)	
田島街道と若松街道	
県道と村道	
二 交通機関	六九
乗合自動車	
第二節 運搬	七三
一 人力による方法	七三
(一) 背負う	七三
背負い縄	
ヤヒ馬	
タンガラ	
背負い籠	
(二) 肩に担ぐ	七五

手カギ 天秤棒 モッコ

(三) 手に持つ

(四) 腰に下げる

二 人力以外による方法

荷鞍 馬車・荷車 リヤカー 一輪車

第三節 通 信

一 音による方法

太鼓 板木 半鐘 花火

二 言葉による方法

口頭 文章

第四節 交 易

一 主な生産物とその販売先

仔馬 繭・葉煙草 木炭 醤油

二 日用品の購入

第九章 民俗 芸能

はじめに

第一節 獅子舞

一 梅田の三匹獅子

獅子講中 獅子舞いの場所、役と演目

二 里守屋の三匹獅子

祭りと祭りの場所 三匹獅子舞の組織 獅子舞の練習 獅子舞の構成と衣装

舞と歌 当日の準備と獅子舞 由来譚

第二節 神 楽

一 祭の神楽

第三節 民 謡

岩瀬村の民謡

A 労作歌

諸職に関するもの(たこつき歌・建て前歌・壁塗り甚句)

交通・運搬に関するもの(追分)

B 祭り歌・祝い歌

大津絵 めでた 松坂 鶴亀 年祝い歌 孫祝い歌 長持ち歌 餅つき歌 麦つき歌

C 踊り歌・舞踊

須賀川甚句 守屋甚句 野郎節 北横田ヨイヤ節 大久保ヨイヤ節

第四節 わらべ歌

一 わらべ歌

三六

三五

三三

三〇

二九

二八

二七

二六

二五

二四

二三

二二

二一

二〇

一九

一八

一七

三九

三五

三〇

二九

二八

二七

二六

二五

二〇

一八

一四

一三

二子守り歌(眠らせ歌・遊ばせ歌)	四二六
三遊び歌	四二七

遊び歌(一)玩具を用いた、個人的な遊びの歌 遊び歌(二)集団による遊びの歌 年中行事の歌(子供が行う年中行事にうたわれる歌)
動物・植物の歌 囃し歌(悪口歌・尻取り歌)

第五節 遊 び

一 遊 び	四二六
バツタ打ち 鉄砲・庄屋 イチカドン めくり 独楽回し 凧上げ 羽根つき ネンガラ打ち たが(輪)回し	
ほこりっこ おしくらまんじゅう 水切り 柿投げ 手っばたき 平手打ち ソリ遊び スケート	
旗書き 戦さごっこ ケン遊び ギッコンバツタン 土地取り 捕虜ごっこ べなぼん 一年二年	
鍋んこんこ 電報ごっこ お手玉(おひとつ又はザク取り) おはじき(きしゃご) 開いた開いた	
かごめかごめ 手の指遊び 花いちもんめ 一烈談判 花火 めっちゃめっちゃ ちよんけ花 小豆っちょ	
つぶや、つぶや 拳遊び その他の遊び	

二 虫捕り遊び

蟬捕り(トリ餅を使った) カブト虫捕り けらけら べいこ虫捕り であろであろ 蛭捕り

三 植物を利用した遊び

水車 噴水 里芋の葉のお面 バッチンコ 風車 竹トンボ 葎笛 毘・いたずら 水鉄砲・紙鉄砲・実鉄砲
独楽回し ネンガラ打ち 柿投げ ソリ遊び 木の実・食べ物取り ふくらがし 首輪・腕輪 目っばじき
髪飾り 笹舟 トンボ釣り 秘つき おはじき(きしゃご) ペロペロ正直 かあらのおばさま

第十章 口承文芸

第一節 昔 話

一 昔話の概要

調査の方法 昔話の語り手・語りの場 昔話の形式

二 岩瀬村の例話

十二支とついたち 猿蟹合戦 カチカチ山 真っ赤ん猿の尻 お釈迦様とネコ 雀と燕 犬の足 鼻は染め物屋だった
殿様になった百姓の話 桃太郎 へその回りに羽根が生えた 花咲爺 舌切り雀 継子いじめ 頭に口のあった女
姥捨て山 東京弁 馬鹿婿 久兵衛の話 和尚さんと小僧 坊さまと小僧 婆は齒なし 天竺からふんどし
面白い話(尾も白い話) 世間話1 狐に化かされた話 世間話2 狐に化かされた話 世間話3 狐に化かされた話
世間話4 狐に化かされた話 世間話5 狐に化かされた話 世間話6 ムジナに化かされた話 狼に食われた話
狼に送られた話 幽霊に急所をギョッとつかまれた話

第二節 伝 説

一 伝説の概要

伝説の概要 岩瀬村の伝説 伝説の分類と例話

二 伝説例話

(一) 木	四九〇
弘法檀森	四九〇

(一)	石・岩	五〇〇
	豆塚 国名石 搏打石	
(三)	水	五〇二
	橋に関わる伝説／大橋の話	
	清水伝説／八幡清水 不動清水 七色清水 白清水 毒清水	
	池の伝説／神蛇池の由来 弁天池の大蛇	
	堰・掘伝説／小豆洗えゴツチャゴチャ 龍ヶ沼 立石の大蛇	
(四)	塚	五〇五
	七色塚	
(五)	坂・峠	五〇五
	山の伝説／八幡岳 鞍掛山 竺ヶ森 雨降山	
(六)	祠堂	五〇七
	大蛇伝説／白方神社の御化神	
	氏神の縁起／熊野神社 新田の毘沙門様	
(七)	行事	五〇七
	山の神の話	
(八)	その他	五〇八
	長者伝説／福籠長者	
	地名伝説／七ツ石 梅の木 成田 下大久保の悪田	

第三節 謎 と 諺

一	謎	五〇九
	謎の特質	
二	諺 と 俗 信	五二二
	諺の種類と機能	
第四節	岩瀬村の方言	五三三
	福島県方言の分布と岩瀬村	
	岩瀬村の方言	
	村史民俗編執筆者一覧	五三七
	村史編纂民俗調査協力者一覧	五三八
	村史編纂関係者名簿	五三七

飼育が古くから行われた。明治初期の馬数統計によると、郡別に白河が五、一三九頭、安積二、九七七頭の所持馬に対し岩瀬郡では五、六八九頭と多く（明治八年十二月四郡馬数一覽表「福島県農業史四」一〇七四ページ）、またせり場は、岩瀬郡では須賀川、長沼、白河郡小田川、金子に置かれた。

明治中期以降になると、富国強兵、殖産興業政策の重視から軍馬育成が奨励されたが、本県は養蚕の普及によって一時衰退するが、大正一三年から昭和一三年にかけての国の馬政計画により、改良増産が計られ、特に軍馬の生産に重点がおかれた。

このような政策の中で、当岩瀬村でも馬は各戸で飼育され、子馬の生産が行われた。農耕用としても利用したが、昭和初期には特に馬耕が行われるようになり、また子馬は貴重な現金収入でもあった。各農家一戸で一頭を家畜として置くのが普通で中には二頭飼育の農家もあった。餌の草刈りは大きな子どもの仕事でもあった。冬季用干し草は山野から刈り取ったが、梅田では割りあて地を決めて字ごと人数を定めた。

二牛

牛は肉用牛と乳牛が飼育されるが、農耕用としても使われ、家畜として古くから飼育された。明治後期には農作業の効率化をはかるために、牛馬耕が奨励された。その後牛馬の飼育が多くなり、食肉として需要を増す昭和三〇年代以降に増加していった。乳牛の生産つまり酪農の発達は、当郡では岩瀬牧場が先駆けとして見逃せない。岩瀬牧場は明治一三年宮内省が近代的欧米様式を取り入れ、岩瀬郡鏡石村に乳牛（ホルスタイン種）をオランダから輸入して理想的な牧場とし、本県酪農の基礎となった。

家畜としての牛の飼育は、馬と同様に一戸に一〜二頭であったが、家の神棚には牛の神様として牛の像を置き、会津の柳津虚空蔵尊をお参りしたとき、新しい座布団を作って重ねて敷いておく。

第六節 山仕事とくらし

山仕事としては炭焼きと柴木刈り、そして木の葉さらいの仕事が多く、秋から冬の仕事であった。秋から一二月まで切りとり、春になって山から運び出す。ひと冬で百駄刈り取り、一駄が六束であるが、一年間の風呂焚きに五・六〇駄必要で、そのほかに馬の湯沸かしに使った。山の木の葉は堆肥に使うために集める。集めた木の葉に藁を入れて馬に踏ませて、六尺四方に組んだ堆肥枠に入れ、粉糠こなを間一尺に入れて積み重ね水か馬水（馬の尿）をかけて良質の堆肥をつくった。

一炭 焼き

岩瀬村でも西部の滝地区では専門に年中炭焼きに従事した人が多く、長沼町滝地区と同様西山での炭焼きを盛んに行った。本滝（長沼町）と国有林の炭材の払い下げである「大分け」「小分け」を共同で行った。この地区では石の炭窯でつくる白炭の生産が中心であった。白炭と黒炭のちがいは、白炭は石の窯を使い焼いた炭を熱いうちに引き出して、灰をかけて冷ますのに対し、黒炭は窯ごと冷やしてから炭をひきだす。そのため黒炭は時間がかかり、家から遠い山中での炭焼きは白炭が多くなる。炭焼きの木は雑木が使われるが、中でも樺けやや檜ひのきの木が良く、栗は良くないという。炭焼きは秋の山分けから始まり、冬から春にかけてが最盛期であるが專業にやる人は、稲の種蒔きを終えると山へ行っていったという。

炭窯つくり（石窯） 窯を築く場所は炭材の木を運搬し集め安い場所を選んだ。石窯の大きさは大きいものでは幅五尺長さ六尺、小さいものでは幅四尺長さ五尺に作る。石を集め平な石で底を作り、周囲に高さ四〜五尺に積み上げ、その上に木を弓型に曲げ屋根の支えにして、柴木を十文字に乗せ組み、その上に石を積んで土を張る。これをハチアゲといい、土はペナといわれ粘土を使う。周囲の壁にもペナを石の間につめて壁をつくり、屋根は一尺位の厚さにする。焚き口は人がかかんで入れる位の大きさに

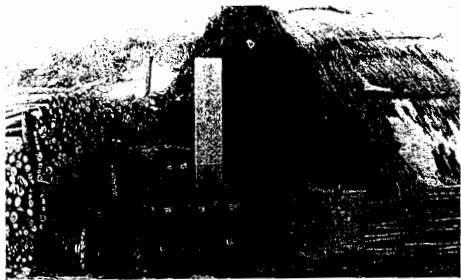


写真5 炭焼き窯
(深渡戸木炭改良製炭場 昭和10年代)

する。奥にはシツドといって煙突をつくるが、この作り加減が難しく、炭の出来具合に影響するという。シツドは平均五寸の直径であるが、窯の大きさによって異なる。最後に火を焚いて天井の木のタガを燃やして落とす。

屋根までの作りが終わるとはちあげ祝いを行う。ぼた餅を食べ煮物や漬物で酒をのんで祝う。

立て込み・火入れ あらかじめ炭材として長さ四尺五寸に伐った木を窯に入れる。奥は人が中に入って縦にぎっしりと倒れないように積むが、二回目は窯が熱いため人は入れずタテマタという道具を使って奥から立てる。

焚き口まで炭材を立てると「火入れ」を行い、手前に枯れ木や生木をおいて火をつける。炭材に火がついたかどうかは煙を見ると分かり、火がつくと「火がくっついた」という。火がつくとクド(焚き口)に蓋をする。石で蓋をして、粘土をまわりに張って密封し、空

気穴を径三センチメートル程度を四つ位あける。

火をつけてから一昼夜翌朝に煙の色や状態や臭いを確かめる。焼けていけば臭いは喉を刺すような強い臭いになる。煙の色は青から白、灰色、黄、青と変わる。この煙の状態を見てシツド(煙突)の蓋の開き具合を調節する。その日の昼頃には炭が出来る。

あらしかけ 炭が焼けたところと判断すると、焚き口を少しずつ開け「あらしかけ」をする。先ず煙突の蓋を全部開け、内部の状態を見ながら入り口を少しずつ開け空気を入れる。急に入り口を開くと中の炭が崩れガサズミ(屑炭)になり、炭の品質がおちる。内部の炭がそっくりしていて崩れていないと良く出来ている。

窯だし あらしかけが終わると、焚き口を開いて炭を窯から出す作業に入る。かんだし棒と呼ばれる道具で、窯から炭を

少しずつ掻き出し、灰(スベイ)をかけて消す。少しずつまとめ順に並べて灰をかけ消す。

窯出しが済むと、すぐ次に焼く立て込みを行う。この時は窯の中が熱いので、タテマタを使って炭材を奥から立てる。

炭つくり・運搬 灰をかけて消して出来た炭を、「炭篩かき籠かご」でふるい萱を編んだ「炭スゴ」という入れものに入れる。一つ一五キログラムにし一俵となる。一回の窯で五〜六俵の炭が出来る。炭スゴは萱を編んで作り、前の晩に夜わり(夜仕事)に作り、女の人の仕事で一晩に五〜六枚つくった。炭スゴの上下には柴木を曲げ輪をつくり繩をかけてつくる。

出来た炭は山の道路のわきなどの出荷場に運んでおき、そこへ炭を買う業者が集めに来る。そこまで背負って運ぶ。一回一人二俵から三俵を背負う。背負い運搬はセナカアテを使って背負う。ヤセウマは坂の多い山道では使わない。

炭焼きの衣 炭焼きのしことは冬季が多いので、綿入れハンコを上に着て下衣はサルッパカマを二枚重ねてはいた。足には藁製のウスグツの中にボロを入れて履いた。ウスグツは濡れると重く冷たいので、代わりを何足か作っておいたという。明日履くウスグツを夜の内につくっておいた。また濡れたウスグツはイロリの上の火棚にさげて乾かした。頭は手ぬぐいでスッポかぶりまたはドモッコという手ぬぐいを三本で縫い合わせたものでかぶると前後に三角に下がるようにかぶれる。雨の日には雨蓑を着た。



写真6 炭の運搬

二 柴 切 り

春の山仕事で部落の入り会い山へ行って切ってくる。滝地区などの山に近い所では、女の人も一人前に柴切りをやった。沖の方(平地)から来た嫁は柴の束ねや背負いに慣れず苦労したという。一人一日一駄を背負ったが一駄は六束で一回に三束ずつ午前二回午後二回背負って運んだ。背負い運搬には背負い蓑(背当て)を使い、ヤセウマは傾斜の急な山では使



写真8 網での魚とり (昭和26年)

一、蚕種購入地及習慣

其一 従来より主に信達地方より蚕種を購入せり、近來郡内に於ても蚕種家大に熟練し之を
購入するもの多きに至れり。

其二 産地に注文し種商は之を各自に配付するもの多く代価は收穫後半額現品受領の際半
額払渡すを常とす。

第八節 漁労・狩猟

一 漁 労

マセ ハヤを捕る漁法で、春先(四月〜五月)に浅瀬の砂利を洗って入れ、両側を高くし
て中の砂を綺麗にしておくと、そこにハヤが卵を生むために集まる。

川ざらえ 夏と秋の年一回川をせき止め水をかき出し、網で魚を捕る。神明川で行った。ハヤ・コイ・ナマズやウナギのほ
かにガバジ(キンギョ)と言われる外見はナマズに似たものが捕れた。

ドウ ナマズやウナギは五〇センチメートルのドウにカマス巻いて、沈めて置くとナマズやウナギが入る。

ジャガオイ 棒に金具をつけて水の中でジャラジャラ音をたて、網の方へ魚を追い込む。

ドジョウドウ 秋に小川をせき止めてその下にドウをかける。ドジョウは水が止まると下流へ下るので、下ってきたドジョウ
をドウに入るようにする。ドジョウはごぼうなどと一緒に汁にして食べる。

二 狩 猟

狩猟には猟銃を用いたが兎の足跡に針金の輪を仕掛ける方法や、狐のボタンといわれるトラバサミなどのほか、イタチを捕
る竹筒の罠わなを使った。

第七章 神と仏の信仰

一 村内の神社の概要

現在、宗教学人名簿に登録されている岩瀬村の神社は、表1の通り一四社である。いずれもその地区・地域を代表する鎮守であり、戦前までは村社であった神社が多い。

表1 宗教学人名簿（平成七年七月現在）

包括団体	名称	代表役員	所在地
神社本庁	石沼八幡神社	警瀬 倫雄	大字滝字石裏山二七ノ一
"	鹿島神社	渡辺 正邦	大字大久保字向四八
"	鹿島神社	渡辺 正邦	大字深渡戸字江持二一
"	熊野神社	大原 晃	大字梅田字岩瀬一
"	金刀比羅神社	渡辺 正邦	大字大久保字竹ノ花二二〇
"	神明神社	吉田 好範	大字柱田字重良内二二一
"	白方神社	西間木 浩美	大字今泉字町内二四五
"	諏訪神社	渡辺 正邦	大字深渡戸字入八〇
"	白山比売神社	吉田 好範	大字畑田字後山一
"	柱田神社	渡辺 正邦	大字柱田字雨降山一
"	三吉稲荷神社	梅津 肇	大字今泉字町内一六四
"	守谷神社	大原 晃	大字守屋字守屋坂四七
"	矢沢神社	渡辺 正邦	大字矢沢字明池一
"	横宮神社	渡辺 正邦	大字北横田字西ノ内一八

第一節 村の神々と社と信仰

これらの多くは、明治の初め頃に現在の社名に改称したが、それ以前は、何々大明神とか、何々大権現等と称していた。取り分け、石沼八幡神社、守屋神社、柱田神社、矢沢神社の四社は、次のように他の神社を合祀して社名改称となった神社である（「社寺明細帳」）。

まず、滝の石沼八幡神社は、旧滝村の鎮守で、明治一二年（一八七九）に村社となった八幡神社と、同じく滝村の石沼神社が合祀されて現在のような社名となった。従ってこの神社は、二社の合祀社である。

守屋の守屋神社は、里守屋上河原の神明社と、町守屋山田入の旧村社白山社が合祀され、明治一〇年（一八七七）に現在の社名になった。従ってこの神社も二社の合祀社である。

矢沢の矢沢神社は、旧白山妙理大権現社が、明治三年（一八七〇）に白山比咩神社と改称し、さらに明治十二年、現在の社名となった神社。この時、境内の末社であった庭渡神社と愛宕神社が合祀されたという。従って矢沢神社は、三社の合祀社ということになる。

柱田の柱田神社も、柱田不動明王大権現と鹿島神社と金毘羅大権現が合祀され、明治八年（一八七五）に現在の社名になったとある。

以上のように、現在見られる神社は、特に明治以後合祀したり、神社名を改称して今日に至っているものである。このように、明治以後に神社名変更や合祀が集中していることには理由がある。

その第一は、慶応四年（一八六八）即ち明治元年の年、明治政府によって神仏分離の令が出されたことによる。それまでは、例えば同一敷地・境内に神社と寺院仏堂が並立し、神社に仏像がまつられ、神社の運営も仏教僧侶が行うというような、いわゆる神仏混淆の状態にあった。明治政府は、このような状態から神と仏を分けさせたのである。特に神社と一体になっている仏教色を取り除くというのが第一の目的でこのため、神社の運営にあたっていた寺（神宮寺）と僧侶（社僧・山伏も含む）の排除や、仏教と結び付いていることを示す権現という名を止めさせ何々神社と改名させたのである。この時大明神の称号も廃止となった。

次は、同じく明治政府の命令により明治九・一〇年に実施された神社・小祠・仏堂それに石碑類の整理である。これにより、矮陋（わいろう）、つまり小さくてみすばらしいような状態の神社・小祠が、他の神社に移転あるいは合祀となった。また、移転されなくても、村社など規模の大きな神社の境内外末社とされたものもあった。先きにみた守屋神社や矢沢神社の場合は、合祀の例で、この整理命令を契機に合祀となった神社であろう。この整理では石碑類も仏教系と神系に分け、仏系は寺院仏堂へ、神系は神社へ移転するよう命令が出された。これによって岩瀬でも元の場所から動かされているものがあるかも知れない。

神社（寺院や仏堂も同様）は以上のような整理統合を経て、明治一一年から一二年にかけてその台帳である、「神社明細帳」ができるのである。従って、こうした整理以前と以後の様子は違うので、この項では、できるだけ岩瀬村における神社整理以前の様子

を伝えたいと思う。それには、合祀以前の神社や末社とされている神社小祠も含めなければ、岩瀬村にどのような神社があったかを知ることはできない。

さて、そこで岩瀬村にどのような神社があったかを「神社明細帳」に記載されている神社で見ると表のごとくになった。

表2 「神社明細帳」に記載されている神社

No.	神社・小祠	数	No.	神社・小祠	数
一	疱瘡	二一八	磯部	二	
二	稲荷	八一九	石沼	一	
三	愛宕	八二〇	横宮	一	
四	山神	七二一	白方	一	
五	豊年	六二二	八坂	一	
六	雷神	六二三	日枝	一	
七	琴平(金刀比羅)	五二四	伊勢	一	
八	菅原	五二五	厳島	一	
九	八幡	四二六	三輪	一	
一〇	熊野	三二七	滑川	一	
一一	神明	三二八	玉木	一	
一二	白山	三二九	地神	一	
一三	鹿島	三三〇	水神	一	
一四	根渡	三三一	祖霊	一	
一五	蚕養	三三二	庚申	一	
一六	諏訪	三三三	事代	一	
一七	八雲	三四	伊勢皇大神	一	

岩瀬村では、表2のごとく三四種の神社名が確認される。これを種別ごとにその数を見ると、疱瘡神社一一社で最も多く、以下稲荷と愛宕が八社、山神七社、豊年と雷神六社、琴平と菅原五社、八幡四社、熊野・神明・白山・鹿島が各三社、根渡・蚕養・諏訪・八雲・磯部が各二社、石沼・横宮・白方・八坂・日枝・伊勢・厳島・三輪・滑川・玉木・地神・水神・祖霊・庚申・事代・伊勢皇大が各一社であった。ところで、神社には、山や岩(岩座)、水源地(清水・川・沼など)などその土地の聖地・靈地に神が意識され祀られるようになったものと、名のある神・神社の分霊を勧請して祀られたものがある。

岩瀬の三四の社のうち、愛宕、琴平(金刀比羅)、菅原、八幡、熊野、神明、白山、鹿島、諏訪、八坂、日枝、伊勢、厳島、三輪などは後者の勧請神である。すなわち、愛宕は京都愛宕山の愛宕神社(愛宕権現)、琴平は、四国香川県の金刀比羅宮、熊野は、和歌山の熊野(本宮、新宮、那智の三社あり)、白山は、加賀の白山、鹿島は茨城の鹿島、諏訪は長野の諏訪大社、日枝は、滋賀県の日吉(日枝)神社、神明・伊勢は三重県の伊勢神宮、厳島は、広島県の厳島神社の分霊を勧請したものである

う。この他稲荷の中には、京都の伏見稲荷や、その他の稲荷を勧請したものがあつても知れない。蚕養の場合も、若松の蚕養神社から分霊したことも考えられる。また、磯部神社は豊受姫神を祭神としているが、豊受神社は伊勢外宮の社である。豊年神社や、伊勢皇大神々社も豊受姫神を祭神とするがこれらは、伊勢系の神の勧請社と考えられる。三輪社は奈良三輪神社の分霊社であろうか。

一方、その土地の聖地・靈地に祀られたものとしては、白方神社、石沼神社や横宮神社などはそれにあたるかと思う。石沼神社は、水神、水波女神をまつるがおそらく水源近くにまつられ、農耕の神として信仰されて来たのであろう。もと石沼というところにあつたという。また横宮神社も、もとは北之内の水辺に祀られていたというから、やはり農業に最も大事な水源に祀られたものと思う。また、白方神社は、本殿の後ろにある大岩が神の鎮座する岩座(いわくら)即ち神体で、白方神社はこれを祀った社であらう。滑川神社や、玉木神社も、この土地発生の社のように思われるがよくわからない。なお個々の神社については次項で述べる。

二 鎮守の社と信仰

白方神社

今泉字町内の通称磐座山に鎮座する神社。『白方神社明細帳』によると、祭神は天照大神、天津彦根命、建弥依米命の三神。国造としてこの地方を賜わった建弥依米命(天津彦根命十三世の後裔建許呂命の子という)が、磐山(磐座山)の靈石(石背石といふ、国名起因の石という。くぐり石ともいふ)を楯に仮住まいして国を平定、その靈石の地に建てたのが本社という。祭神には、神武天皇が東征の折、河内国青雲白肩津草香村に到り神楯を立てて祀ったという平岡神社の第四神を勧請、「白方神社」の社名は、この「青雲白肩」にちなむという。

また、建弥依米命は、平定後開かせた田に八重の白梅を植えて梅田と名付け、以後成田、柱田、畠田、母衣田、品田の五田を

開発、その後石背国造は世々此の地に住み、祭政を兼ね行ったとある。以上「明細帳」の由緒書は、白方神社が、この地方の開発者によって建立された神社であるということを示しているのであろう。

神社の建立地については、磐座山と靈石の存在が強調されているが、白方神社のうしろは岩山であり、岩山の露出した一部に倒れかかる形で大岩がある。この大岩が靈石で、この靈石を中心とする岩山が全体として磐座と考えられる。

古来、磐座は神の鎮座所とされる。白方神社は、他からの勧請神を祀ったという面もあるが、それより先き、当地の人々が寄せる代表的な信仰地ではなかつたかと思う。「由緒書」は、建弥依米命をはじめ、坂上田村麻呂、下つてこの地方を治めたという二階堂氏、江戸時代の三枝氏等、この地を治めた領主達の祈誓を受けたことを伝える。これは、この神社が、この地方を代表する鎮守であつたことを示すものであろう。

ところで、「白方社神主由緒書」に

奥州岩瀬郡白方郷今泉村白方大明神之祠官
吉田左近大夫之豊恒例之神事参勤之時可着
風折烏帽子狩衣者 神道裁許之状如件

元和六年正月七日

神道管領長上下部朝臣兼英(花押)

という神道裁許状が記録されている。これは白方神社の神主吉田左近大夫之豊が、元和六年(一一二〇)の一月七日付で、卜部兼英から免許状をもらったことを示すものである。卜部家は、京都にありその名の通り卜占うらなひの事



写真1 白方神社(今泉)



写真2 くぐり石
(今泉 白方神社)

を司った家筋である。室町中期に兼俱という者が吉田神社祠官となり全国の神職支配に乗り出すが、東北の福島県域に及ぶのは慶長と元和年間である。特に元和五年（一六一九）、仙道域の社家が吉田家（卜部家）の裁許状を求めたため、兼英の名代吉田権少副兼之という者が許状を持って奥州の仙道域に下向することとなった。その時、仙道域の社家の中には、裁許状をもらい、吉田家（卜部家）の配下になる者があった。岩瀬郡下では、天栄村若宮八幡の祠官が、元和六年一月一日付で裁許状をもらっている（『天栄村史』）が、白方神社祠官は、これより一週間早く一月七日付で許状をもらったのである。吉田家下向の時、その支配を受けるようになった社家は、由緒ある神社に属し由緒ある由来を持つ者が多かったが、白方神社祠官の場合も同様であろう。

白方神社は、右のような由緒を背景に、明治五年（一八七二）郷社となったが、同八年（一八七五）以降村社となった。

「神社明細帳」によると境内には、大雷神宮、小智柄稲荷宮、滑川宮、稲荷宮、菅原宮、熊野宮、神明宮、三輪宮、日枝宮、愛宕宮、事代宮、疱瘡宮等一二の宮の末社（石宮）を記録する。現在も一三の石宮があり、このうち、一番大きな石宮前の燈籠には、「献燈／須賀川中山喜八郎景福／當所深沢孝感盛隣／天保十二辛丑四月吉日」の銘がある。また、「日枝神社」「事代主」と記す板札を納める石宮には、「施主川田弥左エ門／現住泰翁代／弘化二年十月日謹造立」と刻まれている。さらに、「伊弉冉尊」と祭神名のある石宮には、「文化十四年石崎□□建立」とあった。

白方神社の祭礼は、春、夏、秋の三回である。春は四月一日で、氏子総代、区長、各組長等を主に行われる。この日五穀豊穡の札を出す、夏祭りは、神社後ろの山上にある雷神の祭り、七月一日に行われる。神社の境内から山斜面を鎖伝い上がったところに雷神の石宮がある。この日月中、草相撲（はな相撲という）が行われ、晩は踊りが行われたという。秋祭りは一〇月一日（旧でいうと九月一九日）現在は一〇月一日で、青年会や各組長等を主に盛大に行われる。この日青年達の担ぐ御輿が村中を回るが、これに「サゴビツ」も一緒に回り、氏子達は、新米（早稲）と新米で搗いた餅、それに五銭か十銭位を包んだおひねりを奉納する。米は村中で一俵位になったという。晩は踊りである。陣屋跡にお仮屋が設けられ、そのお仮屋の柱にくくり付けくわえた太鼓を叩き、「ヤロ節」に合わせ踊ったという。

白山神社・白山信仰

白山（石川県・福井県・岐阜県にまたがる山）に対する信仰に始まるのが白山信仰。祭神は白山比咩で、この神を祀る神社は全国に多い。宗教学法認証の名簿によると、長沼町、鏡石町、天栄村にこの神社名は見あたらないが、岩瀬村には二社ある。一社は畑田の白山比売神社、一社は矢沢の矢沢神社である。

須賀川の袋田にも白山比咩神社があるが、これら三社の神は姉妹神で、畑田の神が上の姉神、矢沢の神が中の妹神、袋田の神は末の妹という伝承があるという（『広報いわせ』第26号）。

矢沢神社は、旧号を白山妙理権現といい、明治三年（一八七〇）白山比咩神社と改称、さらに明治一二年、庭渡と愛宕の両社を合祀して現在の社名を称するようになった。

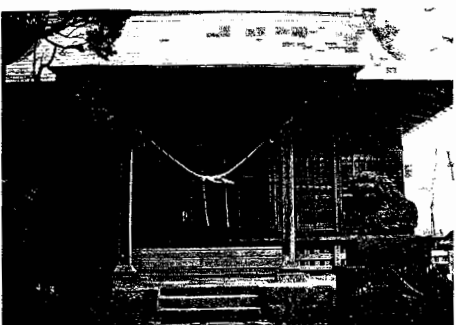


写真3 矢沢神社（矢沢字明池）

矢沢神社、すなわち、旧白山妙理大権現社には、白山寺という別当寺があり、この別当白山寺によって守られて来た。康治元年（一一四二）の縁起を白山寺鏡俊が、宝曆一二年（一七六二）に写したという「奥羽岩瀬郡矢沢村白山大権現縁起」によると、源義家が、勅命による朝敵退治で敗退の折、矢沢、旗（畑）田等岩瀬村の地で軍勢を整えて勝利したため、当社に参宮、別当寺を建立して義家帰依の長楽寺（長沼町）満月上人を住職にしたとある。

白山妙理大権現社、すなわち矢沢神社は、旧村社で、矢沢村の鎮守であった。現在例祭は一〇月一日。一月の元日祭（歳旦祭）には「矢澤神社大麻」の札、例祭には「矢澤神社祭典璽」の札が、深渡戸渡辺神主家より出されている。

神社には、元禄一四年（一七〇二）の鳥居（明治三年再建）、享保三年（一七二八）の花表（銘文「白山大権現」）があり当社の歴史を物語る。境内には、従軍凱旋記念による献燈

元旦祭 白山比賣神社

写真4 白山比賣神社
元旦祭御札

の燈籠(明治二七・八年)、従軍者一七名による「征露凱旋記念」の燈籠(明治三九年一〇月)、氏子惣代願主四名による「大東亜戦捷祈願」の獅子等があり、戦争時、当社に村と村人が寄せた信仰の様子がうかがえる。

神社には八つの小祠があり、それぞれ、「上谷沢村

／元禄十年九月五日」、「奉納山神宮／天保九戊戌閏四月吉日」、「願主矢澤村氏子中／文化十一年甲戌八月十日」、「宝曆十二壬子天六月六日造立村中」、「天明甲辰年九月吉日」、「享保二十酉九月吉日」、「安政五年二月十七日／疱瘡神」、「寛政八年四月十五日」等の銘文がある。『社等明細帳』によると、矢沢神社には、大雷社、山神社、稲荷、八幡、菅原、豊受姫神、伊勢、疱瘡、蔽島、金刀比羅等の小祠がある、と記録されている。右の石宮は、大方明細帳の小社と一致するのであろう。他に「奉寄進石鳥居、願主惣氏子／享保十二年末十一月吉日」とある鳥居があり、この鳥居の額には「根渡大権現」とある。矢沢神社は、明治十二年(一八七九)に根渡と愛宕社を合祀したというから、この時合祀された根渡神社の鳥居であらう。

畑田の白山比賣神社の由来はよくわからない。旧称は白山大権現で、明治三年(一八七〇)に現在の社名となった。『石背風土記』畑田村に「鎮守白山大権現」とある。旧村社で、畑田を代表する神社である。例祭は一〇月一日(もとは一五日)で、一重持寄で集まり、夜籠りをしたという。神社からは、「白山比賣神社」、「白山比賣神社御祈禱太麻／五穀豊穰」等という札が、正月には、「元旦祭／白山比賣神社」の札が出されている。

境内に「奉寄進石燈籠両基／享保二十乙卯年九月吉日／施主當所住小針氏秀延／享保二十乙卯年九月吉日」とある燈籠、「奉寄進左燈籠二世安樂攸／白山御奉前／施主五十嵐安兵衛／皆天保十五壬午天八月吉日」とある燈籠がある。

また、境内に蚕神社と六つの小祠があり、蚕神社には、明治三年(一八九八)の棟札がある。「奉百社祈願／武運長久、身体

健吾(堅固)」等と書かれた出征兵による百社祈願札が三枚程みられた。

石の小祠にはそれぞれ「文化十二年亥三月廿八日／畑田村中」、「弘化二乙巳年二月吉日／若木大権現惣村中」、「奉健立金毘羅大権現／園元甲子九月吉日／沙門勝智敬白」、「疱瘡神宮／元治三天十月十七日」、「畑田村施主渡辺九左エ門」、「當村安全攸／願主渡部仁左エ門／寛延四辛未年九月吉祥日」等の銘々がある。金毘羅権現の小祠を建てた沙門勝智は、岩瀬二十四番地藏札所を開設した畑田長命寺の僧勝智と同人であらう。

神明神社・神明信仰

天照大神を祀る伊勢大神宮の分霊を勧請したのが神明宮・神明神社である。岩瀬村では、柱田字重良内にこの社がある。祭神は大日靈貴尊即ち天照大神である。伝承によると、石背国造として当地に任命された建美依米命が、柱田、袋田、畑田、仁井田、

梅田(今泉字梅田のこと)の五田を拓き、土地を耕し食物を作することを教え、天照大神を勧請して柱田大神宮と称したという。旧社地は、字梅木地内という。この地は右国造の開田伝承に梅木を植えて開花結実した場所らしく、その梅の木地に宮柱を建てたという。その後、天文二年(一五三三)柱田の柱田重良が大柱のある地に遷し、神明宮と称することになったという。寛文九年(一六六九)の棟札には「大神宮」とあり、正徳五年(一七一五)の棟札には「神明宮」とある。この棟札に「奥州白方郷下柱田村之鎮守也」とあるように、村とその氏子の安全、繁昌を守る鎮守であった。

境内に天明王命を祀る玉木神社、豊受姫を祀る磯部神祠他、熊野、愛宕、大雷、山神の祠がある。なお、当社宮司吉田家には、



写真5 神明神社(柱田字重良内)

奥州岩瀬郡下柱田村神明之
瀬宜攝津守吉定恒例之神事

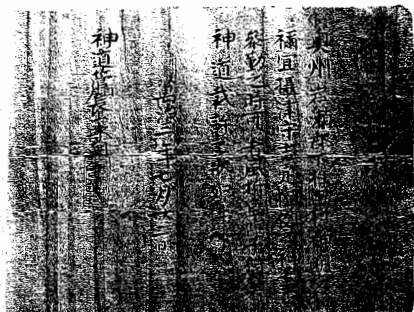


写真6 神道裁許状(万治3年)神明神社

参勤之時可着風折烏帽子狩衣者
神道裁許之状如件
萬治三庚子年七月廿二日
神道管領長上卜部朝臣兼連

とある神道裁許状がある。柱田村神明の福宜攝津守にこの許状を与えた卜部兼連は、吉田兼連に同じ。卜部は吉田の本姓。明治以前、京都吉田家は、全国の神職を支配したが、この裁許状により神明社の祐宜は、万治三年(一六六〇)、はじめてこの吉田家の支配を受けるようになったことがわかる。ちなみに、吉田家の支配が、福島県域に及ぶのは、慶長期で、元和五年(一六一九)には、多くの神職が吉田家配下となった。この他の神明では、「神明明細帳」によると、今泉白方神社境内に大日靈貴命を祀る小祠を、また矢沢神社境内にも、同神を祀る伊勢の小祠を記録している。

以上、大日靈貴尊を祀る神明の神社、小祠の存在は、当地方における伊勢信仰の浸透を物語るものである。

一方、神明信仰は伊勢信仰におきかえられるが、その信仰は、分霊を祀るこれらの神社・小祠のみでなく、一般的には、いわゆる伊勢参りにみられる。岩瀬村域の人々は、恐らく相当数、お伊勢参りに出かけて行ったと思われるが、事実、大久保には伊勢講があり、積みたてをしたお金で毎年代参が行われ、お札を受けて来たという。今泉の白方神社には、

永代太々神楽奉奏資金奉納

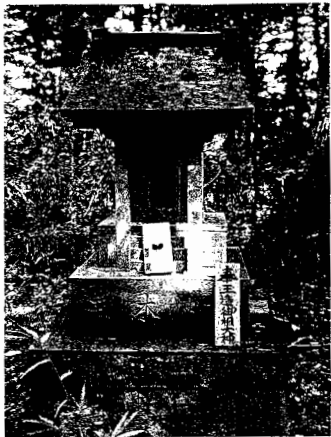


写真7 玉の木神社(柱田神明神社内)

参宮金貳拾貳圓五拾錢 願主(氏名省略)記念 大正元年十一月三日

とあり、また、矢沢字栗ノ内の柳沼家には、文政元年(一八一八)の伊勢参宮銭別帳があり、参宮が行われて来たことの一端を示すものである。

玉の木神社

柱田神明神社境内にある社。石造の祠で昭和元年(一九二〇)、社殿を修復した時に納めた板札によると玉造を業とする玉の木一族の祖神、天明王命を祀ると記されている。この神社の造営修覆に関する棟札が数枚あるが、紀年のわかるものでは、「奉造建玉木大明神社惣村大小氏子繁昌所」とある享保一六年(一七三二)の棟札が最も古い。しかし、紀年の磨滅しているさらに古い棟札があり、これには「奉建立玉貫大明神社ノ神主吉田傳四郎ノ霜月十□ノ下柱田村」等とある。古くは「玉貫」でこれが「玉木」に変わった可能性がある。現在は、神明神社の境内にあるが、棟札銘文によると、かつては下柱田村の鎮守で、しかも古社であったと思われる。

柱田神社

柱田の柱田神社は、字雨降山に鎮座する。

明治一年の「神明明細帳」には、

柱田不動明王大権現、鹿島大明神、金毘羅大権現三社合祭、明治八年八月三日改称柱田神社

とある。

柱田神社は、不動と鹿島と金毘羅を合祭して成立した神社で、成立年は明治



写真8 柱田神社



写真9 不動様の石笈(柱田神社裏)



写真 10 柱田神社難除け御守札

の『岩代国岩瀬郡社寺境内実測図』には、柱田村に鹿島神社と不動堂が記録されている。

その鹿島神社であるが、「神社取調録」によれば、鎮座地は柱田村川萩で、祭神は武甕槌命、由緒として「従来下柱田村修験三國院別当之處、御一新後、同人梓佐藤義雄復飾神勅仕候」とある。境内末社は八雲神社、金刀毘羅神社、疱瘡神社、社外末社として愛宕神社があった。

鹿島神社は、修験三國院持で、もとは川萩というところにあった神社であった。明治八年、一緒に合祭された金刀毘羅神社は、恐らく末社の金刀毘羅社であろう。

一方、不動堂については、前掲の「社寺境内実測図」によると、不動堂境内地と竈堂地が別で、これを四十一間の道がつなぐ形になっており、現在の柱田神社地、即ち雨降山の地にあたるのであろう。不動堂境内と竈堂地は南北に離れているが、南山際の方が竈堂のあったところで、現在の柱田神社のある場所がその地と思われる。神社裏は岩山で、ここから水が流れていて音が聞える。ここに石製の厨子が安置され、中に石造の不動明王立像がある。この清水を不動清水と称しているゆえんである。水源地に不動のまつられる例は各地に多く見られるところである。石製厨子には「宝永三戌六月」の紀年があり、少なくとも、宝永三年（一七〇六）には、この水源地に不動がまつられていたことがわかる。雨降山という地名は、この山が水源になっていることと関係しているものと思われ、恐らく、ここで雨乞が行われたのであろう。雨降山にまつわる雨乞の伝承もある（ふるさと昔話）。

また、この清水は眼病に効くというが、これも清水と不動信仰が一緒になったところによくある話である。

こうしてみると、雨降山のこの地には、村人の水源に不動の結び付いた信仰が先きにあり、これに上柱田の鎮守が加えられたのであろう。

柱田神社拝殿格子扉には、白と青の布が十数本結び付けられており、これに「奉納柱田不動明王 家内安全 身体健全祈願」「奉納柱田神社何々家家内安全祈願」「奉納不動明王願人某 何々家のかけた願一切終」「奉納柱田不動明王 願人某 終り人某」等と記されている。いずれも昭和六〇年代から平成のもので、この神社に寄せられる信仰が現在もさかんであることが窺える。それも、不動明王とあるように、柱田神社となっても、なおそれ以前からの不動に信仰が寄せられている。

神社の左後に五基の石製小祠があり、それぞれ次のような銘文がある。①「稲荷神社／昭和十四年四月十日改築／氏子中」、②「安政六己未歳四月吉祥日」、③「疱瘡神社／昭和十四年四月十日改築／氏子中」、④「文政三己卯天六月吉日」、⑤「大世話小山三良兵衛、左平、定右エ門／青銅二拾疋五右エ門、同拾疋彦吉／（他八名省略）」。

一〇月一日（旧一〇月二四日）の例祭には「雨降山鎮座柱田神社祈禱御符」の札、正月には「柱田神社大麻」の札が出されている。大久保安藤家には「雨降山柱田神社^{病難}除御守」の札があるが、病気、火災除の守札も出されている。

熊野神社

熊野信仰の発祥は紀州の熊野。本宮、新宮、那智の三社あり、これらの分霊社は全国に多い。岩瀬では梅田に熊野神社がある他、守屋字竹城内、大久保字尼ヶ作、それに、白方神社、神明神社の境内末社に熊野の小祠がある。

梅田の熊野は字岩瀬に鎮座。同社には、国造がこの地を開拓のため下降するにあたり、紀伊国より伊弉冉命、速玉男命、事解男命の三神を背負い来り、梅田に祀ったという話がある。

熊野三社大権現と称していたが、明治三年現在の社名に改称。例祭は一〇月一日である。

同社境内には、八雲神社（天王さま）、二羽神社の他、大山祇、大国玉、梅田、愛宕、恵比須、疱瘡、鹿島、諏訪、倉稲玉（稲

八年（一八七五）であろう。というのは、明治七年八月の上柱田村、および下柱田村の「神社取調録」には、まだ柱田神社が記入されておらず、鹿島神社が上柱田村の村社となっているからである。また、明治八年調査



写真 11 熊野神社 (梅田字岩瀬)

荷、大黒、稲荷他の小祠がある。このうち、大黒の小祠には「享和二戊ノ十一月吉日」、梅田社の小祠には「寛保二壬戌正月」、稲荷の小祠には「昭和二十六年二月吉日」とある。また祠名の不明なものうち一祠に「明和十天巳(安永二年にあたる)正月十日」、一祠に「明治八乙亥年九月九日」の紀年があった。

また、境内の鳥居に「元禄十二己卯歳五月吉日、山本伍□門、□□、山本藤左エ門、同名治兵衛」の銘がある。石燈籠も古く、一基に「奉納御宝前為二世安楽／元禄七甲戌年七月三日／山本藤左右門／施主敬日」、一基に「丸奉造立御宝前二世安楽祈所／元禄十四年四月一日／小川三□右門」等であった。「二世安楽」は仏教信仰で良く使われる言葉。「二世」はいうまでもなく、あの世とこの世。現世と来世の安楽を願ってこの燈籠が寄進されることになる。八雲神社と二羽神社については別記する。

が、「社寺明細帳」には寛政九年九月九日の勧請という。しかし、神社のすぐ前両側に立つ二本の大杉の存在は、この社の古さを物語るようである。現在関根マケの氏神である。例祭は九月九日で、その日、氏子が集まり道掃除、旗立等準備し、酒や海山のものを供えて拝み、その後直会をする。戦前旧五月節供には、この地区の女の子(七、八才位)がカスリの着物を着、柏餅を持って神社に集まり、遊ぶ風習があったという。なお、このとき「のったついた月山羽山羽黒の権現ならば稲荷の大明神」とはやして遊ぶ。

鹿島神社 鹿島信仰

鹿島信仰の始まりは、常陸(茨城県)の鹿島である。この分社も全国に多い。「石背風土記」は、岩瀬郡之内社数として「鹿島社十六社」と記録し、二位九社の八幡を大きく上回っている。鹿島信仰の多さを物語るものであろう。岩瀬村では、大久保、深

渡戸、柱田等に鹿島神社が見られる。このうち、柱田の鹿島は、柱田神社に合祀されており、ここでは取り上げない。

大久保の鹿島神社は、旧大久保村の鎮守で、鹿島大明神と称していたが、明治四年現在の社名となった。旧村社であった。「石背風土記」には「大久保村、鎮守鹿島神社」とある。

安藤家文書に

奥州岩瀬郡大久保村鹿島大明神之祠官、安藤安幸守述時、恒例之神事參勤之時可着風折烏帽子狩衣者
神道裁許之状如件

元禄十二己卯年二月廿一日

神祇管領長上正三位侍従卜部朝臣兼敬



写真 12 鹿島神社 (大久保志向)

という裁許状がある。この許状は、鹿島神社祠官安藤氏が、元禄一二年に京都吉田家の支配下に入ったことを示すものであるが、この神社には、元禄時代既に祠官が居るほどの神社であったことを物語る。

「神社明細帳」によると、境内末社として八雲、稲荷、八幡、疱瘡、伊勢皇大神々社等がある。

次に、深渡戸の鹿島であるが、やはり旧村社で、「神社明細帳」によると文安年中(一四四四〜一四四八)の勧請とある。「石背風土記」では、諏訪とこの鹿島が深渡戸村の鎮守とある。

例祭は一〇月一五日で「鹿島神社祭典暨」の札が、一月の元旦祭には「鹿島神社大麻」の札が出される。

同社の鳥居には、「奉寄進石鳥居／施主小山□兵衛尉重信／千時元禄十五龍集壬午曆季夏稟吉辰」とある。

守屋神社

明治一〇年、町守屋の村社白山媛神社と、里守屋の村社神明神社を合祀し、守屋神社と改称したのが本社。「神社明細帳」は、守屋(物部)の遺族が当地に移り祀った往古の守屋神社に復したという意味の由緒を伝えるが、明治の合祀前に同名の神社があったかどうかは不明。

明治七年の「神社取調録」によると白山媛神社の祭神は伊邪那美久々理姫命、稻荷神社、諏訪神社、大山祇神社を末社と記す。例祭は一〇月一〇日とある。一方、神明神社については、祭神が天照大御神、愛宕神社、養蚕神社、雷神社、金刀毘羅神社、山神社が末社と記す。例祭は一〇月一八日とある。

合祀後の守屋神社を「神社明細帳」から見ると、祭神は、天照大御神、菊理媛神、大連守屋霊の二神一霊、稻荷神社、八坂神社、豊年神社、大雷神社、大山祇神社、愛宕神社、蚕養神社、琴平神社、疱瘡神社、地神社、水神を境内末社とし、諏訪神社(字追分峠鎮座)と熊野神社(字竹城内神社)を境外末社と記す。祭日は一〇月一〇日とある。

現在、境内の小祠には、次のような銘文と板札銘文が見られる。「明治二十亥四月」、「嘉



写真13 守屋神社(守屋字守屋坂)



写真14 守屋神社祈禱神璽

永六歳 村内、「蚕養神社、祭神稚産霊(小祠内の板札銘)」、「享保二十年乙卯十月四日/日向屋敷ノ八人仲間」、「同小祠内板札に「水主神社」とある。「社寄進熊田清蔵、同金左エ門」、同小祠板札に「火防難除/大雷神社/大雷神大山祇、祭六月十四日」とある。「明治四十年九月吉日」、同

小祠に二枚板札があり、一枚には、「八坂神社/悪病除、災難除の神」、もう一枚に「稻荷神社」とある。

横宮神社

横宮神社は北横田に鎮座する。横宮大明神、横宮大権現などと称していたが、明治三年現在の名称となる。旧村社。明治七年の「神社書上」によると、天正年中に南横田から遷座したと記されている。即ち

「文安年中横田二階堂左京大進、横田□□エ勸請ス、今ニ字横宮畑ト号スル処アリ、後チ天正年□ニ至リテ北横田村エ遷座スト云々(以下略)

とある。祭神は稚産霊命である。旧例祭は四月三一日と一〇月一八日。現在は、一〇月一日で「横宮神社祭典璽」の札が出される。正月には「横宮神社大麻」の札が出される。

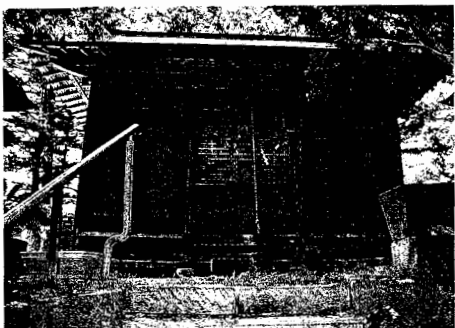


写真15 横宮神社(北横田字西ノ内)

神社の鳥居に「寛延二己巳天十月吉日」、燈籠に「嘉永元年戊申九月初九日」の銘がある。拜殿外側に、鉄製の草鞋を取り付けた絵馬が打付けてある。

境内に五つの小祠があり、そのうちの二祠に「稻荷神社正遷宮祝言村内安全攸/明治十八年乙酉六月三日」と記して板札が納められている。

明治七年の「神社書上」に境内外の末社は記されていないが、明治二四年の『社寺明細簿』には、境内末社として、磯部神社、疱瘡神社、庚申神社を記している。

金刀比羅神社

金毘羅信仰は、香川県仲多度郡琴平町の金刀比羅神社とその分霊社に対する信仰である。岩瀬村では、大久保に金刀比羅神社があり、守屋神社、石沼八幡神社、矢沢神社、梅田神社の末社(小祠)にも見られる。

大久保の神社は、字竹ノ花に鎮座。明治二四年の『社寺明細簿』によると、祭神は大

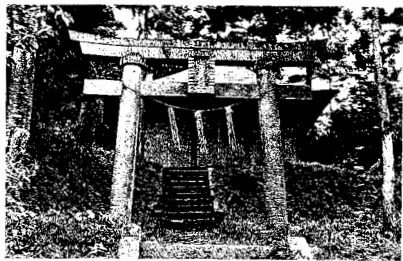


写真 16 金刀比羅神社 (大久保字竹ノ花)

物主神、もと金比羅大権現と称したが、明治四年九月一五日、現在の社名に改称した。末社は記録されていない。しかし、現在は、八つの小祠があり、このうちの二祠に銘文があった。その一には、「文政六年末九月吉日」、もう一には「愛宕大権現ノ二世安楽所ノ敬白」とある。なお、石製の花表があり、これに「愛宕山大権現ノ天保二年六月四日」とあった。

金刀比羅神社拜殿には、「象頭山」の山額が掲げられているが、象頭山は、琴平町にある山名。この山の斜面に金刀比羅神社の奥社がある。

例祭は一〇月二日で、「金刀比羅神社壘」の札が出される。

諏訪神社

諏訪信仰の発祥地は、長野県の諏訪。上社(諏訪市)と下社(諏訪町)があり、この分霊社は全国に多い。岩瀬村では、深渡戸と守屋に諏訪神社がある。

深渡戸の諏訪については、『岩背風土記』に「鎮守、諏訪鹿島の両社」とあり、鹿島神社とともに深渡戸の鎮守であった。しかし、大正一五年に鹿島神社が村社となり、諏訪神社は境外の末社になったという(『広報いわせ』27号)。祭日は七月二十七日で、「諏訪神社祈禱御符」の札が出される。神社の裏に小祠が四つほどあり、「嘉永五千子三月二日」の紀年を同じくする小祠が二つある。このうち一祠にはキツネの浮彫があり、「村や安全」と刻まれている。稲荷の祠であろう。

守屋の諏訪は、字追分峠にあると『社寺明細帳』にある。守屋神社の境外末社である。

石沼八幡神社

滝の字石妻山の石沼八幡神社は、石沼神と八幡神社の合祀された神社である。



写真 17 諏訪神社 (深渡戸字入)

明治七年の「神社書上」によると、石沼神社は村社でその鎮座地は、「龍村八百山麓」である。祭神は弥豆波能売命。神社の由緒については、

里老ノ口碑ニ、白方郷名當社ノ八丁東ニ白濁トモ石沼トモ云ヘシ沼アリ、今ハ耕田トナリ、郷名是ヨリ起リ、故ニ其所ヲ元社地ト云ヘ、夫ヨリ三丁西ノ八百山麓ニ中ノ社ト云字アリ、當社ヲ今社ト云、別當眞言宗清瀧寺ノ所、戊辰ノ版正以來磐瀬重喬兼務

とある。この由緒書によれば、もと石沼という沼の所にあつたらしい。祭神が水の神の弥豆波能売命でありながら、現在の石沼八幡社地には清水も川も、池・沼も見あたらないので不思議に思われたが、この由緒で疑問が解ける。石沼の社地を元社地と称しているが、あるいは、沼そのものが神体であつたかも知れない。また元社地より三丁西の「八百山麓」を中ノ社といい、現在(明治七年)の社を今社と称している。これは、社地が動いたことを物語るのであろう。

末社は、疱瘡守護神社、豊年神社、大山祇神社、愛宕神社、金刀比羅神社の五社である。例祭日は一月八日とある。現在は一〇月一日である。

一方、八幡神社については、同じく「神社書上」に「小祠八幡神社」とあり、勧請の由来について次のように記す。

里老ノ口碑ニ八幡太郎義家叛賊征伐ノ命ヲ蒙リ、當国ニ下向ノ時、岩根山ニ登リ八幡大神ヲ折テ靈験アリ、為ニ祠ヲ宮ニ神供ヲ奉ル也、夫ヨリ岩根山ヲ俗ニ称シテ八幡嶽ト云フ(略)然後白川城主神原式部大輔コレヲ領スルニ及テ家臣鷹見某鈴木某ヲシテ當社故由ヲ尋テ、正保二年四月當山ノ東麓ニ移シ奉リ祠ヲ建一村ノ鎮守神ト崇敬シ奉ル也

とあり、また別当については、「當村眞言宗八幡寺別當之所、戊辰の版正以來磐瀬重喬兼務」とある。ほぼ同内容の縁起は「寺院明細帳」にもあり、拜殿が文久元年(一八六一)八月に再建されたことを加えている。

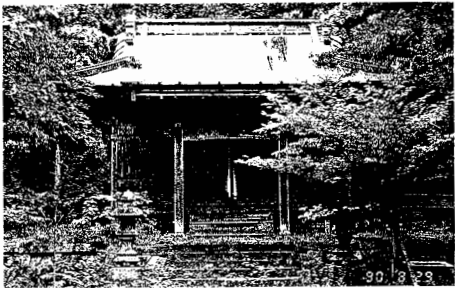


写真 18 石沼八幡神社 (滝字石妻山)

祭神はいうまでもなく菅田別命である。末社は、大山祇神社、疱瘡守護神社、菅原天神社、雷神社、愛宕神社とある。しかし、「寺院明細帳」では、大山祇、疱瘡、菅原の各社を一社ずつ記す他、稲荷、豊年の二社、それに「氏神社」として五社を記している。殆んど一尺前後の石の小祠である。

両社が合祀されたのは明治四〇年で、さらに四一年六月旧八幡神社境内の末社（大山祇二、疱瘡二、菅原二、大雷、稲荷、豊年、愛宕の社各二）の合祀願が出された。石沼八幡神社の末社（小祠）は四二年六月以降遷されて行ったらしい。現在神社の小祠は七基確認され、そのうちの二基に「嘉永六癸丑年六月二十有五日」とある。他に石燈籠が三種あり、それぞれ、「奉納石燈籠／元禄九年丙子四月吉日」、「奉納燈／享和元年酉八月吉日」、「燈籠／弘化四末年八月十五日」、「日支事変記念二〇人、世話人三人」とある。

三 山仕事・養蚕の神

山神信仰・山神講

山神には、これを祀ることが、特定の神社・小祠とその氏子・信者という関係で祀られるものと、広く各家の年中行事の中で祀られるものがある。前者の場合、さらに漠然と、山に居る神という事で、それを小祠等に祀るものと、著名になった神社の祭神を勧請したものがある。

岩瀬村でみられる勧請神の一つは滝にある。戦後まであったという元石切場の手前、岩上にある石の小祠がそれである。大岩の上には二本の大きな樅が双方から岩を抱くようにして立っており、一方の根方に小祠が置かれている。岩上には一本の鎖で上がるようになっていいる。

小祠の中に板札があり、これには次のように記されている。

「河沼郡野澤坐／大山祇大神鎮坐祭大麻／大正拾参年六月拾五日／岩瀬郡白方村瀧原区願主一同謹記之」また、小祠には、「大正十三年旧

六月一日甲子創立／白方村瀧原部落一同／石工二瓶熊五郎／世話人善方文吉、渡辺幸松、泉田戈一、善方金造、全留五郎」と刻まれている。

この銘文によると、大正一三年六月一三日、河沼郡野沢村（現西会津町野沢）の大山祇を勧請したらしい。野沢の山神は、六月一日から三〇日までが春の大祭であり、この間に分霊を受けて来たことになる。石祠の方は、六月一日に出来ていたらしい。

この大山祇神を祀る小祠の近くに、今は使われていない炭窯が二・三みられる。恐らく、この大山祇神は、炭焼きの人達によって祀られたのである。瀧原ではないが、隣接する守屋では、炭焼きの人達が野沢の山神を信仰し、代参人が参詣してお札を受け、各家で分けて神棚に祀ったという。かつてこの地方の農家では、秋の収穫が終わるとすぐ山に行き、炭窯を造って炭を焼く家が多かったという。

各家の年中行事の中で祀られる山神は、二月一〇日と一〇月一〇日の年二回、男女別々に山神講として行われるが、詳細については年中行事の章を見ていただきたい。

なお、山神・大山祇を祀る小祠は、柱田神明神社、石沼八幡神社、守屋神社、矢沢神社等の末社にみられる。

蚕養神 社

かつて養蚕の盛んなころに信仰されたものと思われる蚕養神社（小祠）が守屋字一ノ堰、同字二本木の他、畑田の白山比売神社、守屋神社、梅田神社等の末



写真19 大山祇神社



写真20 大山祇神社板札

社に見られる。いずれも稚産命を祭神とする。このうち、守屋神社の小祠には「蚕養神社祭神稚産靈」と記した板札があった。守屋では養蚕農家が多かったというが、同地の西蔵寺では「虫供養蚕安全の札」他蚕の安全を祈る札が出されていた。

四 病気除の神

瘡守稲荷神信仰

稲荷は、白方神社、守屋神社、柱田神社、八幡神社、矢沢神社、八雲神社の末社に見られるが、いずれも小祠である。岩瀬で有名な稲荷であったのは、矢沢字栗ノ内の瘡守稲荷である。社名を「笠森」と書くものもある。

この神社の御利益は、社名の「瘡守」でもわかるように、皮膚病及び梅毒に効き目があるとされたらしい。花柳界の女性が遠方からも来たという。しかし、皮膚病や梅毒の人のみがお参りに来たのではなく、病気の者は、「瘡」でなくても「瘡」といって拝みに来たという。それだけ効き目のある神様と信じられたのであろう。また奉納の旗の中には「家内安全」と書かれたものもある。

神社には四〇本を越す奉納の布旗、鉄製の鳥居(二三)、剣(四)、絵馬や額(四面)、石や陶製の狐他があり、その奉納者を見るとかつては、相当広範囲の人々から信仰されていたことがわかった。昔は、赤く塗った木の鳥居が沢山並んでいたといい、参道を挟んだ両側には、籠堂・休屋があったという(田村敬喜)。このうち、奉納旗の銘文は表裏に示した通りである。この他絵馬では、曳馬図、加藤清正の虎退治図、女性と女兒(母子か)の参拜図、鳥居図のものがあ、曳馬図には、「奉納/天保五年甲申二月吉日/畑田村大賀姓萬吉/文豊筆」、虎退治図には、「奉納/明治十五年三月廿日/安積郡鍋山村/星貞栄」、参拜図には、「奉納/明治廿八年/徳島県板野郡撫養町大字立岩村/三原善太郎卯之年女」とあった。剣には、「奉納笠森稲荷大明神 岩吉」の銘文を刻むものがあった。鉄鎖の銘札には「石川郡□□村願主」他の銘があった。

これらの銘文によれば、参拝者は、岩瀬村(矢沢、大久保、畑田等)、長沼町(江花)、須賀川市(須賀川、浜尾、牛袋、仁井田等)、鏡石町(久米石)、天栄村(高林)、矢吹町(三城目)、郡山市(谷田川、安積、片平等)、常葉町(常葉)、古殿町(竹貫)、石川郡、常陸の水戸大田、野州の大田原等に及んでいる。高知県人の奉納絵馬もあった。

これら参拝者には、札が出されたらしく、「瘡守稲荷神社御札/岩瀬郡矢澤村/柳沼氏敬白」と彫られた版木がある。但しこの版木の年代はわからず、いつ頃出されていたのか不明である。

ところで、神社には、虫喰のひどいような許状があった。



写真 21 瘡守稲荷神社
(矢沢字栗ノ内)

今般依懇願、奥州岩瀬郡矢沢村
柳沼□□
奉勸遷
在之瘡守稲荷大明神

正一位稲荷大明神之神璽高□□
「□」者也神璽到日宜抜除其

□□永正奉安鎮之祀無□□
於被盡尊信□祈者五穀豊饒
「□」可有守護者□□

神祇官統領神祇伯王殿

文化四丁卯年九月 雜□印奉

奥州岩瀬郡矢沢村

沼八郎次殿

同国同 郡仁井田村

渡辺政右工門殿

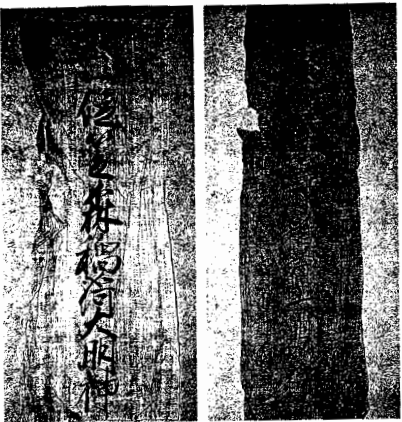


写真 22 奉納旗 (矢沢瘡守稲荷)



写真 23 瘡守稲荷絵馬

表3 奉納布旗銘一覽

一	寛政七歲 奉納稻荷大明神 □□月大吉日	白川□區目區 常寶院	一〇 弘化三丙午年 正一位稻荷 孟夏	谷田川村 願主 橋本氏
二	文政二年 奉納稻荷大明神 己卯閏四月	岩瀬郡小川村 □藤元吉 兩人	一 嘉□二年 奉納正一位稻荷大明神	願主 二瓶藤工門
三	天保二年 正一位笠森稻荷大明神 卯五月□□	須賀川 井上氏	二 嘉永二年 正一位稻荷大明神	畑田村 小針氏
四	天保十一庚子歲 奉納正一位笠森稻荷大明神 三月四日	滿ん	一三 嘉永五年 奉納正一位稻荷大明神	竹貫村 願主 孝童
五	天保十二丑歲 奉納正一位稻荷大明神 八月吉日	當所 本田伊之八	一四 嘉永五年 奉納正一位稻荷大明神	野州大田原荒町森田氏
六	天保拾三年 奉納稻荷大明神 壬寅二月三日	江花村 願主 柳沼氏	一五 嘉永五年 奉納正一位稻荷大明神	當所 鈴木氏
七	弘化二乙巳二月 正一位稻荷大明神御宝前鈴尾 安藤友八	願主 柳沼氏 願主 大久保息	一六 嘉永五年 奉納笠森稻荷大明神	牛袋村 安藤氏
八	弘化三年 奉納稻荷大明神 三月吉日	濱尾村 願主 敬白	一七 嘉永六癸丑六月吉日 正一位稻荷大明神	辰之年男
九	嘉永七年 奉納正一位笠守稻荷大明神 寅六月吉日	須賀川 遠藤政助	一八 嘉永七年 奉納笠森稻荷大明神	永田氏

一九	嘉永七甲寅年 正一位稻荷大明神 五月十日	願主 浅香 駒屋村 徳次郎	三〇 明治十八年乙酉年神無月敷辰 奉納正一位稻荷大明神	岩瀬郡仁井田村 根本氏
二〇	嘉永七年 奉納正一位笠守稻荷大明神 寅六月吉日	大山莊 柳沼孝吉	三一 明治二十年 奉納稻荷大明神	願主 鈴木リハ
二一	安政二年 奉納正一位稻荷大明神 卯二月初午日	仁井田村 願主 サタ	三二 奉納稻荷大明神 七月朔日	願主 齊藤□□
二二	安政二卯二月吉日 奉納正一位笠森稻荷大明神	願主 片平村與曾右エ門	三三 奉納稻荷大明神 明治二十年旧十月六日	願主 和田恒五郎 妻キン女
二三	安政二乙卯歲 笠森稻荷大明神 四月十二日	畑田村 ヲエノ	三四 明治二十八年八月二十八日 奉納稻荷大明神	願主 田村郡常葉村 小沼ハル
二四	安政四巳年六月吉日 正一位稻荷大明神 須賀川道場町 相楽氏		三五 大正十五年十一月 奉納正一位稻荷大明神	願主 佐藤イノ
二五	萬延二辛酉國國圍圍警前郡 奉納正一位稻荷大明神 二月吉日	水戸大田米屋徳兵衛 か志むらやきん	三六 昭和式年九月式拾式日 奉納稻荷神社	増子保一・増子浅一
二六	奉納正一位稻荷大明神		三七 昭和五年旧五月十日 奉納笠森稻荷	願主 道山サキ
二七	奉納正一位稻荷大明神 □□四□□		三八 昭和六年二月初午 奉納稻荷大明神	願主 柳沼スミ
二八	奉納正一位稻荷大明神 明治十八年	柳沼伴蔵 家内安全	三九 昭和七年新十 奉納稻荷大明神	岩瀬郡仁井田村滑川
二九	奉納正一位稻荷大明神御祭礼 二月初午	願主 濱尾村 有賀嘉市・有賀シノ		

昭和三十三年三月
四〇 奉納笠守稲荷大明神

鏡石村久来石 橋本アキ

これは、虫喰で不明なところもあるが、懇願によって、正一位稲荷大明神の神璽を許し与えるというものであろう。これを出したのは「神祇官統領神祇伯王」である。神祇伯とは神祇官の長官のことで京都の白川家が代々これに当って来た。「糶□」は、恐らく糶掌で、白川家の役人の事であろう。懇願の主は、矢沢村の柳沼八郎次と仁井田の渡辺政右エ門である。柳沼氏と渡辺氏は白川家に正一位の神階を願っていて、文化四年（一八〇七）に下されることになった。この時の神璽も残されていて、これを納めた箱に「正一位瘡守稲荷大明神（蓋銘）」、「文化四丁卯年九月／神祇伯資延王／謹勸遷」とある。瘡守稲荷はこの時から「正一位」を名乗ることになった。神社の鳥居（石造）には「文化五年辰二月吉日」の銘がある。正一位をもらった翌年の二月に建てられたことになるが、恐らく受位を記念して、二月の例祭に合わせたものであろう。鳥居の額には「正一位 瘡守稲荷大明神」とある。奉納旗の多くは「正一位」と書かれているが、最も古い寛政七年（一七九五）の旗には書かれていない。文化四年九月以前には、正一位を名乗っていなかった証拠である。また、この旗の存在は、瘡守稲荷が正一位をもらう以前から信仰されていたことを物語るものでもある。なお、この旗を奉納した常宝院は、白川三城目村、すなわち現在の矢吹町三城目にあった修験であることが、享保九年（一七二四）の「白川保内領霞坊跡帳」で確かめられた。

瘡瘡神信仰

現在、瘡瘡（天然痘）で死ぬ人は殆んどないと思うが、かつては死に至る最も恐ろしい病気の一つであった。日本中で恐れられ、古代にあっては、この病を鎮めることが国の安泰につながるとして、神仏に祈ることが公行事として行われたほどである。

瘡瘡神を祀る社は各地にあるが、岩瀬では、白方神社、守屋神社、柱田神社、八幡神社、石沼神社（石沼と八幡は合祀されて石沼八幡社となる）、梅田の熊野神社、白山比売神社、横宮神社、矢沢神社、八雲神社（矢沢）、愛宕神社（畑田）等の末社（小祠）に

見られる。このうち、矢沢神社境内の祠には「安政五年二月十七日／瘡瘡神」とあり、愛宕神社境内の小祠には「瘡瘡神宮／元治二月十七日」とある。

八雲神社

俗に「てんのうさま」といわれて来た神社。この「てんのう」は、「牛頭天王」の略。牛頭天王は、インド祇園精舎（釈尊とその弟子達のために建てられた僧院）の守護神。明治政府による神仏分離の時、「牛頭天王」の名称は使用禁止となり、牛頭天王を祀る神社は、八雲神社、祇園神社、八坂神社等と名称をかえた。祭神の牛頭天王は、素盞鳴尊で疫病除の神とされる。「八雲」の名は、素盞鳴の歌「八雲立つ、出雲八重垣妻ごみに、矢重垣つくるその八重垣を」に因んでいる。

岩瀬村には、矢沢字竹之内と梅田熊野神社の境内に八雲神社がある他、柱田神社末社の小祠に見られる。守屋神社境内の小祠には八坂宮がある。いずれも祭神は素盞鳴尊である。

矢沢の八雲神社の由来は不明。『社寺明細簿』によると「一村信仰」、「一村持」とあり、矢沢の鎮守的存在。祭日は「七月二五日」とある。

熊野神社境内末社となっている八雲神社には、元禄二年、宝永八年、寛延三年、安永六年、文化一五年、天保七年、弘化三年、明治九年、同三〇年等の棟札がある。このうち、元禄二年（一六九九）の棟札には、

遷宮祭主神道□□神主熊田□

元禄十二□年 諸神力 大原□

奉建立牛頭天王素盞鳴尊氏子繁栄□

三月吉日 稲田姫 大小氏子中

大工□

とある、旧祭日は、七月一四日、キュウリと餅を供える。疫病はらいの信仰という。



写真24 熊野神社内の牛頭宮にあげられた胡瓜

根渡神社・二羽神社

根渡神社は、矢沢字和久にある。祭神は、八意思兼命という。通称をニワトリ権現という。明治期(一〇年〜二年)に白山比咩神社(旧白山妙理大権現)が矢沢神社と改称した折、同社に合祀されたが、元の地でないためだということでは残った。根渡神社の鳥居は矢沢神社に移されているが、これに「享保十二年未十一月吉日／奉寄進石鳥居／願主惣氏子」とある。鳥居の額には「根渡大権現とある。この神社の由来は、享保一二年(一七二七)までは迎れることになる。祭日は一〇月一〇日であったが、現在は一〇月二日という。この神社のご利益は、子供の風邪治しに効くという。特に百日咳にかかった時等、紙等に書いたニワトリの絵と少しの米(一握りくらい)を奉納した。この時他の人の奉納した米を少しもらって来て、ご飯に炊き込んで食べたという。この地方では、百日咳を「トリケ風邪」というが、このトリケ風邪の治る神様として信仰されて来た。神社には、今も、ニワトリの絵を書いた紙が貼られていた。

二羽神社は、梅田の熊野社境内にある。この神社の最も古い棟札には、「宝永七歳庚寅□□奉建立二羽権現同躰日本武命武運長久氏子繁栄／奥州岩瀬郡中井邑神主大原備後守／大小氏中□□」とあった。明治の神仏分離の時、庭渡神社と改称したらしく、

明治五年の棟札には「奉建庭渡神社／祭神伊邪那岐、八意思兼安鎮座／坪中安全氏子攸」とあり裏には「王政一新神社改称」とある。しかし、その後明治九年の棟札には「二羽神社」とあり現在の社名に変わったらしい。この神社もまた宝永七年(一七二〇)まで迎れる歴史をもっていた。やはり子供が風邪をひいた時ニワトリの絵を紙に書いて神社に貼る風習があり、昔はそれが沢山奉



写真25 矢沢根渡神社拜殿内にはられたにわたりの紙絵

納されていたという。

県内には、庭渡、二羽渡、鬼渡、見渡、三輪渡他音読みの似た神社が多く、いずれも百日咳他流行性の風邪の時、ニワトリの絵を紙や板絵馬に描いて奉納する風習がある。岩瀬の根渡神社、二羽神社も同様のご利益で共通するものである。

五 火防の神

愛宕信仰

愛宕信仰は、京都市の北西部にある標高九二四メートルの愛宕山に祀られた、愛宕権現とその分霊に対する信仰。祭神は迦具土命(火産靈神)、本地仏は勝軍地藏である。この信仰は、山伏や愛宕御師の活躍により、江戸時代以前から東北地方に及んでいたと思われるが、信仰の中心は、火の神迦具土に対するもので火防であろう。

本県には愛宕の分霊が多く、岩瀬村でも、畑田の愛宕山、北横田字茄子内の愛宕山、守屋ローレルバレー内の愛宕山、今泉字町内、柱田字梅ノ木、滝字滝原等に愛宕の分霊祠がある。この他、明治一年の『社寺明細帳』によれば、守屋の守屋神社、柱田神社と神明神社、滝の八幡神社と石沼神社の境内末社として愛宕の小祠を記録してある。また、明治二四年の『社寺明細簿』によれば、畑田の白山比売神社の境内末社にも愛宕神社が見られる。このうち、守屋字愛宕山の石祠には「明和八年辛卯九月、連光院」とある。連光院は修験の可能性がある。祭神は殆んど迦具土又は火産靈神とあり、火防信仰で祀られていることがわかる。但し、小祠中には、畑田の愛宕山小祠のように本地仏の地藏(石製)を納める例もある。祭日は、六月二四日又は七月二四日とするものが多く、全国的な事例と一致する。京都の愛宕は、旧暦六月二四日が祭日(滝の八幡・石沼両末社の愛宕は八月三日)で、これに倣ったものであろう。畑田の愛宕様の祭日は七月二四日で、青年が中心になって取り行われたという。

古峰原信仰

古峰信仰は、栃木県鹿沼市の標高約一〇〇〇メートルの高原に祀られた古峰神社とこの分霊に対する信仰。愛宕や秋葉様と同



写真 26 古峰神社代参拝人名簿 (下大久保)



写真 27 古峰神社御札

様、火防に御利益のある神として信仰されているが、信仰の広まりは愛宕や秋葉ほど古くなく、幕末・明治以降である。矢部孝雄家の文書に「明治八歳／村惣代／古峰神社参詣餞別受納帳」があり、明治の初め頃には、古峰原信仰が岩瀬村に及んでい
たらしい。守屋字二本木には、古峰原の分霊を祀る石の小祠がある。下大久保では、毎年代参人が古峰原へ参詣している。代参人は毎年二月八日にくじ引で代表七人(前期四年間)又八人(後期三年間)が決められるという。

六 信仰の山と参詣

妙見山と信仰

妙見山は、郡山市(下守屋)と岩瀬村(守屋)にまたがる、標高七七八メートルの山である。山のほぼ頂上には、飯豊別神社が祀られている。明治三年同社の大河原勇神主が白河県に提出した願書によると『延喜式神名帳』所載安積郡三社のうちの二社であると述べている。『社記家系図』(大河原家蔵)中の棟札写があり、このうち、寛永一三年(一六三六)のものには、「奉建立月曜星妙見同躰飯豊和気神社」とあり、文政一〇年(一八二七)の棟札には、「北辰妙見尊屋 相殿飯豊和気神社」とあり、実は、飯豊別神社と妙見を同体・相殿という形で祀られて来たのである。神社の名称が、「飯豊別神社」と「妙見」の字がなくなったのは、明治の神仏分離の時である。

妙見については、比丘尼(受戒比丘尼)というが相馬から尊躰を背負って来たという伝承がある。妙見は妙見菩薩の事。妙見菩薩は北極星を仏格化したものといわれ、故に北辰菩薩ともいう。本県では、相馬氏の妙見信仰が有名で、相馬氏が下総から移住の折、鎮守妙見も遷した。

ところで、天明六年(一七八六)の『妙見由来書』に妙見飯豊和気神社が「飯森山」にあるとある。しかし、寛文四年(一六六四)の「裁許状絵図」中、守屋のこの山を「みやうけん」と記しており、現在も山名は「妙見山」である。この事は、この山が妙見を祀る山、妙見信仰の山として認識されて来たことを物語るものと思われる。

妙見山即ち、妙見と飯豊和気に対する信仰は恐らく、農業神としての性格が主であったと思われる『妙見由来書』の「年中行事」に

御祭礼 九月廿四日・廿五日両日、御種貸之神事有之候、種柄相頼候産子等へ貸渡シ、翌年同日返上有之候、何種不限色々交り候得共、雑穀にならず、主種と一同ス、是則飯豊和気之神妙ニ而稲霊御種貸ト申、古代より社例ニ御座候、外ニ社例作法無御座座候

とあるが、「御種貸之神事」が神社の代表的な祭礼であつたらしい。いうまでもなく、お

借した種柄は、妙見飯豊和気の神からいただくもので、神の力によって豊穰を願うものである。種柄はツツコに入れて奉納されたが、昭和の初め頃まではツツコがあがっていたという。

この祭礼には、当地域はもちろん、須賀川、田村町、福山、熱海、安達の上川崎等からも参詣に来たという。『社記家系図』に

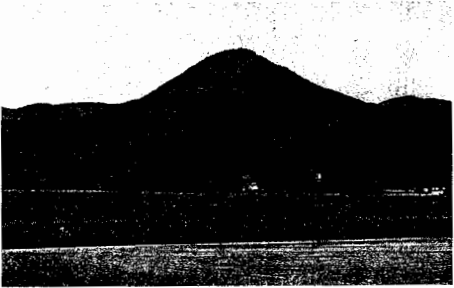


写真 28 妙見山遠望



写真 29 妙見山飯豊和気神社参道と鳥居



写真 30 脇道の参詣に
神手御田
にある御
社と小祠

「此神社ハ五穀守護ノ大神也、秋ノ祭典ニ甘酒ヲ造リ御神酒、桶ノ儘拝殿へ備奉リ、参詣ノ人々ニ頂戴為致来候」
とあり、この日、参詣人には甘酒がふるまわれた。二四日の夜はお籠りで、昔は、籠堂があった百人位は夜を明かしたという。

妙見への登り口は、郡山側にあり、牛道と鎖道があり、途中で一緒になる。頂上よりは少し手前であるが、石の小祠の幕に「御田神社／平成五年四月二四日」とあった。鎖道については実査できなかったが、鎖伝いに登

るような道であれば、単なる登拝の道というより、もう少し「行」的な意味合いを兼ねたものであったかも知れない。
一方、「白河風土記」によると、近世に岩瀬郡の本山派山伏の頭・年行事であった徳善院は、妙見山にあったという。すなわち須賀川本町徳善院についての次の記事である。

徳善院

境内東西二十六間餘
南北六間餘

町ノ中程西側ニ在リ本山修験宗京師聖護院ノ末院ナリ山ヲ上寺山ト云ヒ寺ヲ眞徳寺ト云フ此寺往古ハ同郡守屋村ニ在リ奥妙見山ノ麓ニ在リ養老二年釋道證ノ開基ナリ星霜ヲ經テ二階堂為氏當地在城ノ時応永年中住僧眞榮トテ行法ノ頗ル高キ者アルヲ聞キ城内ニ於テ修法壇ヲ營シ怨敵退散運命延長ノ法ヲ修セシメラル、ニ依リ上寺山ヨリ往來住居シタル故ニ其寓居ノ地ヲ土人自ラ唱ヘテ先達屋敷ト云フ(略)

右の記事によれば、妙見山は修験と関係のあった山ということになり、農業信仰の山に加えて、修験の山という特性をも持っていた可能性がある。妙見山には天狗がいて、町守屋の法念という小僧がいろいろな事を教えてもらったという伝承のあること(「ふるさと昔話」岩瀬村教育委員会)も、妙見山と修験のかかわりを匂わせる。修験と関係のあるところに天狗の伝承があるからである。

妙見山にはまた、上寺山に寺があったという伝承がある。その伝承地には平場がある。その寺が徳善院と重なるかも知れない。その徳善院すなわち上寺山眞徳寺は、養老二年道證という僧が開いたと「白河風土記」は伝える。この記事は信じ難いが、あるいは、他の寺の伝承とも重なっているのかも知れない。上寺山の山号を持っていた真福寺と仙道札所三十二番の観音堂はここから移ったという。

いずれにしても妙見山は、農業の守護繁栄を祈る神の坐す山であり、仏教系の妙見信仰の山であった。さらに、山伏・僧侶の住む山であった可能性もある。寺院があったとしてもそれは早くなくなり、神仏同体の妙見・飯豊別神社の鎮座する山として信仰されて来た。この信仰の広がりには、まだ確認していないが、享保年間に妙見山から勧請したという妙見社が郡山市安積町にある。年寄など、遠路で妙見山に登れない人のために建てられたという。上ノ原の炭焼道で途中湯屋があったという所には、「妙見山 萬延元庚申天九月」と刻まれた碑もある。

白湯山信仰

白湯山信仰は、栃木県的那須岳八合目にある。温泉湧出地白湯山に対するものという。

白湯山参りは、南会津郡の田島町でも行われていたことが知られているが、県内全域の状況は未調査である。岩瀬村では、

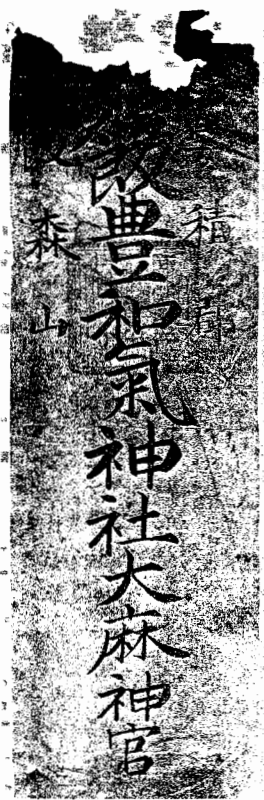


写真 31 飯豊和氣神社御札

「高湯山・湯殿山・飯豊山」と刻まれた碑が、畑田長命寺脇と、大久保鹿島神社境内に確認されており、白湯山信仰の広がりを知る上で貴重な資料である。畑田の碑は天保九年(一八三八)、大久保の碑は弘化四年(一八四七)である。高湯山参りは江戸時代から行われてい



写真 32 高湯山神社御札

たことになる。矢沢字栗ノ内の柳沼家には、明治三四年八月二二日（「旧暦七月九日」とある）の「高湯山御銭別受納帳」があり、これに

同行者

柳沼 貞助 本田喜三郎
柳沼 貢 本田 民平
佐藤 孝一 道山 矯三
佐藤 畔助 道山 清作
佐藤 博 拾人

とある。

この記録によって明治期にも参詣が行われたことがわかるが、昭和四一年に安積疎水が岩瀬村に引かれるまでは良く代参したというから、最近まで続けられたのであろう。参詣の目的、白湯山信仰の目的は雨乞のようである。「那須山は雨の神」とか「お那須山の方にかかる雲は雨を持たらす」といい、水の必要となる田の荒塊の頃、その年の代参人がお参りに出かけたという。日照りで水不足の時は、苗代の一角に注連を張り、ここで水浴びをしてから行った（夜らしい。白湯山では社務所でお札をもらうが、このお札は水の流れるところ（水路、堀等）に篠竹等にはさんで立てたという。ポツポツと少し雨が降っても「ご利益があった」などといったという。

飯豊山信仰

飯豊山は、福島県・山形県・新潟県にまたがる連山の総称であるが、狭義には、本山といわれる標高二一〇五メートルの主峰をさす。飯豊山の開創伝承によると二人の猟師によって開かれたとも、唐（中国）の尊通国師と役行者が開いたともいう。山頂には、一王子、二王子、三王子、四王子、五王子がまつられ、これらを五王子、五社権現という。明治以前、この五王子の本地仏が五大虚空蔵菩薩で、これが飯豊権現の本体である。明治以後は神仏分離により飯豊神社となった。三県から信仰による登拝が行われたが会津では一四、五才位から、成人儀礼としての登拝が盛んであった。一方、豊作祈願があり、これは三県に共通する信仰の中心であったものと思われる。県内の中通りからも登拝者は多く、岩瀬村域にも、明治以降であるが講社が組織された。年不明の「飯豊山講社名簿」（福島県山都町史資料集 第九集「飯豊山信仰」所収）の講社規約によると先導と世話人を一村に一名ずつおいたらしいが、今泉村の木舟鉄弥、佐藤福之助、守屋村の鈴木惣四郎、吉田林松等がその任にあたったらしい。飯豊山への信仰登拝のあったことは、今泉で聞けたが、祖父の代に登ったという事で、詳しい内容はわからなかった。畑田長命寺の脇に「高湯山・湯殿山・飯豊山」と記された天保九年（一八三〇）の碑があり、大久保の鹿島神社境内にも同様に記された弘化四年（一八四七）の碑がある。岩瀬村域の飯豊山信仰は江戸時代からあったことになる。

七 雨 乞

農民にとって水不足は死活を分ける大問題である。古代以来、日照りの時は国家レベルのものをはじめ、村や小地域に至るまで雨乞が行われてきた。

岩瀬村には至る所に溜池がある。このことは、水不足に悩まされて来た地域であることを物語る。溜池は村の地図を見ると特に畑田や矢沢、大久保、今泉等に多いようであるが、この地区に雨乞祈願のための高湯山参りがみられる（高湯山参りの項参照）理由であろうか。柱田の雨降り山で雨乞をしたところ大雨となつて岩が崩れ、日本武尊が現われたので祀ったのが柱田神社だと

いう伝承も、この地区の悩みを反映しているように思われる。実際に雨乞をした様子を聞きとれなかったが、日照りの時は、太鼓を叩いたり、大声で騒ぎ、「雨タンポ、イオウヤ、ザーザートフツテコ」といって雨乞したという。

第二節 家・屋敷の神と信仰

日本のこれまでの家(ここでは建物と敷地を含める)には、農家・商家を問わず複数の神の祀り場があり、様々な神を祀って来た。

例えば、主家・隠居家を含め家内の祀り場には、神棚をはじめ台所(炊事場)、床ノ間、便所等があり、家外の敷地では、氏神の祀り場や水場(井戸・水道、川・池・水路)がある。この他、蔵、便所、納屋・物置にも神は祀られた。

祀るということは、具体的にいうと幣束や注連を飾ることであり、正月に松を飾るのもそうである。幣束や松は神の依代、注連はそれを張りめぐらせた内側が神域であることを意味している。いいかえると、幣束や松、あるいは注連を飾ったところが神の場ということになる。

さてそこで、こうした家・屋敷の神とその祀りについて岩瀬村の状況をみることにする。

一 神の祀り場

幣束や注連の飾られるところが神の祀り場であると述べたが、それを具体的にみてゆくことにする。

表4は、岩瀬村各地区において、幣束をあげるかあげないか、あげる場合何本用意し、どこにあげるか等の質問で、行ったアンケートから作成したものであるが、回答戸数二二五戸のうち、二二二戸は毎年幣束をあげており、あげない家は四戸のみであった。

表4 岩瀬村各戸用意の幣束数 (アンケート戸数 二二五戸)

No	幣束数	戸数	No	幣束数	戸数
一	一本の家	七戸	八	八本の家	三戸
二	二本の家	八戸	九	九本の家	四戸
三	三本の家	四三戸	一〇	一〇本の家	九戸
四	四本の家	三戸	一一	一一本の家	二戸
五	五本の家	六五戸	一二	一二本の家	一戸
六	六本の家	九戸	一三	あげない家	四戸
七	七本の家	四六戸			

表5 幣束をあげる場とその事例 (アンケート戸数 一七六戸)

	場所	件数		場所	件数
一	神棚	一七四	一〇	作業所	一〇
二	床の間	七	一一	車庫	一
三	入口・玄関	二	一二	井戸・川池等	五六
四	台所	六五	一三	ウチガミ	八〇
五	便所	一二	一四	隠居家	一七
六	風呂場	三	一五	会社・店	二
七	牛屋	二	一六	家・屋敷外の神	四
八	蔵	一一	一七	田の神	二
九	納屋・物置	一〇	一八	山林	一

た。岩瀬村では、ほとんどの家で、伝統的な神の祀り方が継続しているのとみて良いであろう。また、幣束をあげる場合は一本という家から一二本という家まであり、中でも三本、五本、七本という家が最も多かった。

それでは、その幣束をどのようなところにあげているのであるのか。これも、アンケート回答のうち、祀り場を記入していただいた一七六軒から見ると表5のごとくであった。

祀り場として多いものから見ると、神棚が一七四で最も多く、殆どの家が神棚に幣束をあげている。中には、幣束の全てを神棚にあげるという家もあった。神棚には二本以上幣束をあげる家も少なくない。神棚には、大神宮をはじめ、複数の神が祀られることと関係するのであろう。

次は神棚の半数弱になるがウチガミの八〇である。ウチガミについては別に詳しく述べるが、屋敷地の大体北西の方向に、石の小祠として祀られているものである。

次は、台所六五、井戸・川・池等が五六と続く。台所というのは少し漠然としているが火を使う所で、火の神とか土間の風呂釜と回答している例もある。要するに火の神に対して幣束をあげているのである。風呂場とあるのも火の神に対するものであろう。井戸・川・

池等にあげているのは、水の神に対するのである。水神と書いたものもある。また、水道の蛇口と書いたものもある。以上、神棚、ウチ神、台所、井戸等に幣束をあげる例が、その他に比べて多いことがわかる。これを言いかえると、神棚の神は家(建物)の神、ウチガミという神は、家敷地にあつて、家敷地とその家を守る神、そして生活に必要な水と火をまつる水の神と火神を祀る例が多いということであろう。その他は、便所、蔵、納屋・物置、作業場等に神を祀る家もあるが数は少ない。それ以下の所々は神祀りの場として一般的ではないとして良いであろう。ただ、家屋敷以外の神社や小祠に幣束をあげる例はもっと多いかと思われるが、回答には示されなかった。隠居家では、神棚と台所に幣束をあげるとするものが多かった。一軒で祀る幣束の本数は前述のとおりである。

幣束は、アンケート回答二一五家中、一一軒で自分の家で作ると答えているが、その他は、いずれも神主、または、神社からもらうとある。幣束を取り替え(きりかえ)る日は、秋祭りの時で、神明神社では九月三〇日、鹿島神社、柱田神社、熊野神社は一〇月一日に出すという。

神明神社では、稲荷の幣束は赤、水神は青、その他は白の紙で作られ、鹿島神社では、稲荷は赤い紙、その他は白紙で作るといふ。

二 ウチガミ

前述したように、幣束をあげる場所としてウチガミは、神棚に次いで二番目に多かった。そのウチガミは、多く石の小祠であるが、本来は、毎年決った月日に、藁などで作るものであった。例えば、大久保の深谷家では鎮守(鹿島神社)の祭り、一〇月一日に藁で作っている。これを「ホウデン」と称している。深谷家でこのホウデンに祀られる神は「イナリ」であるという。

ウチガミというのは、漠然とした表現であるが、これを持つ人の多くが、単に「ウチガミ」と称している。中には、それがどういう神かまで知る人もあり、これをまとめてみると、イナリ、山神、水神、諏訪、熊野、権現、山王、鹿島、金毘羅、蚕、月山・羽黒・湯殿等の他大黒や阿弥陀等もあった。この中イナリは最も多い。矢沢花畑佐藤家のイナリは、先祖が宮城県岩沼の竹



写真 33 ホウデン (大久保下境)

駒稲荷を分霊したものといい、福の神・農家の守り神という。また、大久保下境の深谷家では、五代前に笠間稲荷から請もようして来たという。ウチガミが昔、井戸から出て来たという家もある。こうした勧請の由来を断片的にでも知る人は少ない。

ウチガミには、例えば前述の佐藤家では、春の初午に赤飯を供へ農作を願ひ、秋は餅と稲穂を供へて収穫の礼をするという。今泉の会田家では、正月、鎮守の祭、節分、えびす講、大晦日等に供え物をするという。正月や祭りには、殆んどの家でウチガミに供へ物をしてる。盆や節供、それに家の内祝等に供物する家も多く、中には、毎日新水と果物等をあげる家もある。

このウチガミへの願ひは、家内安全というのが最も多い。具体的に、健康、無病息災、交通安全を願う家、また、五穀豊穡、豊作、商売繁昌を願う家もある。総じては、その家

表 6 ウチガミを祀る方角

一	北	西	四三	九	北	東	二
二	北	西	二二	一〇	北	東	一
三	北	西	二二	一一	南	東	一
四	北	西	七	一二	西	北	一
五	南	東	五	一三	東	北	一
六	東	南	五	一四	西	南	一
七	西	南	三	一五	南	南	一
八	東	南	三	一六	南	南	一
	方角				方角		

全体を守護する神がウチガミということになる。

なお、このウチガミの祀り場、すなわち、小祠やホウデンの置かれる場であるが、アンケート調査の結果、北西に祀る家が最も多く、次いで西、北、西北と表のような順であった。これは方位を正確に計っ



写真 34 ウチガミ様 (今泉字町内)

ての結果ではないが、ウヂガミは北西に置かれ、全体としては、南側よりは北寄に置かれることが多いと言えよう。

第三節 寺院・仏堂と仏信仰

一 村の寺院と仏堂

(一) 寺院

岩瀬村には、現在八カ寺の寺院がある。これを宗派別の寺数で見ると、真言宗三カ寺(畑田長命寺・白山寺・梅田長命寺)、曹洞宗一カ寺(永祿寺・照光寺)、天台宗一カ寺(西蔵寺)、臨済宗一カ寺(瑞巖寺)、日蓮正宗一カ寺(満願寺)となっている。

平成三年に福島県がまとめた『福島県宗教法人名簿』によって岩瀬郡下町村の宗派別寺数を比べると表7のごとくである。岩瀬村には八カ寺あり天栄村の九カ寺に次いで多い。宗派数では長沼町と同じ五宗派あり、郡下では多彩である。五宗派中、真言宗と曹洞宗が多いのは天栄村と同様である。真言宗と曹洞宗寺院の多いのは、県下全体の傾向であるが、岩瀬郡下の町村にもそれが見られるということである。郡全体でも、真言宗が九カ寺、曹洞宗が八カ寺で両派寺院のみで、郡下二十六カ寺の半数以上を占めている。その他では天台宗が、各町村全体に見られ、合計五カ寺あるのが注目される。福島県下全体としては、天台宗寺院が意外に少ないからである。

さて、これら岩瀬村の八カ寺の各宗寺院は、いうまでもなく仏教を中心とした信仰の醸成の場であるが、いつ頃どのような人によって建立されたのであろうか。その開創の概略を述べておく。

永祿寺 今泉字町内にある曹洞宗の寺。本尊は親世音菩薩。同寺十世古湛の記録(明和七年)によると、永祿元年(二五五八)田村月斎建立の寺で、開山は幸門とある。田村月斎は田村頼頼の事、『伊達世臣家譜』中の「田村家譜」に頼頼の記事があり、

「老後入道、嘗有下所開基之寺上、曰永祿寺」とある。また、『社寺明細帳』には、龍台寺五世円宗月真の法弟宗山幸門が永祿七年(一五六四)に開き、天正元年(一五七三)に創立入仏とある。開基は、今泉村今泉城の城主田村月斎とある。龍台寺というのは、古殿町竹貫にある曹洞宗の寺で、永祿寺の本寺である。境内に薬師堂があるが、永祿寺二代方旭が慶長八年(一六〇三)に建立したという。また、今泉境新田の毘沙門堂は、開山幸門が毘沙門天を信仰し、天正一六年(一五八八)に建立したものである。

郡山市安積町の天性寺は、二世方旭が建立した寺といい、同寺は永祿寺の末寺である。

照光寺 柱田字切屋敷にある曹洞宗の寺。本尊は釈迦如来。「寺院明細帳」によると、照光寺は、須賀川長松院第五世浄翁守清により、文祿元年(一五九二)に開かれた寺とある。開基は、須賀川城主二階堂盛義の臣津田康弘という。本堂向かって左端に、もと柱田字道智にあった六角地蔵堂の本尊(地蔵菩薩)と厨子が移されている。地蔵は、岩瀬二十四地蔵中の第七番である。

長命寺 畑田字橋本にある真言宗智山派の寺。本尊は阿弥陀如来。「寺院明細帳」では、開創については不詳とするが、過去帳によると開山は有慶法印。有慶の寂年は元祿八年(一六九五)であるから、長命寺はそれ以前に建立された寺。本寺は、長沼町の長楽寺である。「寺院明細帳」には、境内仏堂として、延命地蔵を本尊とする地蔵堂を記すが、現在境内に地蔵堂はない。

白山寺 矢沢字与藤治にある真言宗智山派の寺。本尊は十一面観音菩薩。白山寺は宝曆二二年(一七六六)、白山寺鏡俊が虫喰の古縁起を写したとある『陸奥国岩瀬郡矢澤村白山妙理大権現縁起』によると、白山妙理権現の加護により戦勝を得た源義家が当地の白山社別当として建立した寺。開山僧には、樺衝村長楽寺の満月上人が招かれたという。永い間、白山社とともに当地の信仰を担ってきたと思われるが、天保元年(一八三〇)(天保九年ともいう)の焼失や、明治はじめの神仏分離令による資料の散逸でその様子を伝える資料は少ない。境内には、歡喜天堂があるので聖天供が行われたのであろう。岩瀬二十四地蔵の二十四番札所というが矢沢字登之内の地蔵堂を受け持つからで

表7 岩瀬郡下町村の宗派別寺数

	岩瀬村	長沼町	天栄村	鏡石町
曹洞宗	2	3	3	1
真言宗	3	1	4	1
天台宗	1	1	2	1
臨済宗	1	1		
浄土宗		1		
日蓮宗	1			

あろう。この他、水子地蔵・ぼっくり・ぼけ封じの地蔵等最近みられる地蔵信仰もある。昭和六三年に、みちのく福島百八地蔵がで、その三十八番札所ともなっている。

長命寺 梅田字岩瀬にある真言宗智山派の寺。本尊は阿弥陀如来。「寺院明細帳」によると、文禄元年（一五九二）祐教の開山創立で、本山は、樺衝長楽寺とある。長命寺は、はじめ高村山に建立されていたが、のち梅田字牛池に移され、火災で本堂・観音堂・愛宕堂等が焼失、さらに現在地へ再建されたという（『岩瀬須賀川寺院めぐり』）。愛宕堂は、牛池移転のとき建てられ、観音堂も寛文十一年（一六七二）に建てられたという。長命寺境内にある現在の観音堂は、明治二六年に再建されたもの。仙道三十三観音中三十一番の札所である。

瑞巖寺 大久保字宮田にある臨済宗の寺。本尊は正観音菩薩。明治二四年の『寺院明細簿』によると開山は中峯国師第三世法孫本禅で、本寺は須賀川普応寺とある。本禅等擇は、須賀川普応寺開山古先印元の弟子で、明徳年間（一三九〇～九三）に瑞巖寺を開いたという（『岩瀬須賀川寺院めぐり』）。足利満直奥方（養寿院殿義山清光大姉）、および二階堂氏の菩提所という。

西蔵寺 守屋字町にある天台宗の寺。「寺院明細帳」によると西蔵寺は、伝教大師より数えて八世の法孫にあたる者が開き、祐明法印が康応三年（一三九一、但し康応三年はなし、明徳二年にあたる）に創建したとある。伝教大師は、天台宗の宗祖最澄のことである。八世の法孫の名は記されていないので不明。康応は二年で終わるが、三年は西暦一三九一年にあたり、時代は南北朝である。

満願寺 守屋字里にある日蓮正宗の寺。本尊は、十界勸請曼荼羅。「寺院明細帳」によると、嘉元元年（一三〇三）日尊の創建で、本山は大石寺とある。また、境内仏堂として垂迹堂をあげ、本尊は、日蓮所図の曼荼羅とある。

(二) 仏堂

仏堂は、寺院とともに、仏教信仰のもう一つの場である。寺院と違い、本尊とされた仏像の名称が建物の名称になる場合が多い。従って、仏堂名を見ることにより、どういう仏像の信仰があったかを知ることができる。

さてそこで岩瀬村にどのようなお堂があるかを、明治十一年の「寺院明細帳」と「仏堂明細帳」を中心にしてまとめたのが表8である。全部で二を確認した。これを種別に分けると、観音堂が九、地藏堂が五、薬師堂が二、そして不動堂、大子堂（大師堂）、毘沙門堂、聖天堂、大休堂、垂迹堂が各一である。前述のごとく仏堂の名は、寺院と違い、その仏堂にまつる本尊を堂の名とする。従って、観音堂の本尊は観音であり、地藏堂の本尊は地藏である。そうすると、岩瀬村では、観音堂が最も多いわけであるから、観音に対する信仰が最も多いことになる。以下同様で、次が地藏、そして薬師という順になる。

実は、福島県全体の統計を取ってみると、表9のごとく一位が観音堂で、以下、地藏・薬師の順である。従って、岩瀬村における仏堂の本尊に対する信仰では、県内全体の傾向と全く一致していたということになる。

この他の仏堂では、表8のごとく県内に数例しかない歓喜天堂、即ち聖天堂のあることはめずらしい。大休堂は、大休という行者をまつった堂で、こういう例も少ないから、特色ある堂ということになる。大子堂は大師堂で本尊は弘法大師である。垂迹堂は、本尊を曼荼羅としてあるので、曼荼羅本尊をまつる堂であろう。

二 寺院の年中行事と檀家

寺院というものの機能・はたらきは多様である。例えば、寺院は、仏・菩薩を安置する建物・殿堂である。また、その仏・菩薩を信仰する僧侶達の修行場であり、仏教を伝導する場である。しかし、寺院は、仏教と、これを信じる僧侶のためにのみあるのではない。殿堂の建立と維持に力を尽くした檀那達の安泰を願う場であり、死してはその葬祭とその後の供養を行う場である。寺は、修行の学問所・道場、あるいは祈禱を専門とする寺を除くならば、むしろこの在俗の人々の葬礼・供養をするというのが、寺の中心的機能となっている。一方、寺は、本尊をはじめ、寺内の仏・菩薩に関する仏まつり、あるいは、釈迦や宗祖・派祖の誕生・忌日に関するまつり場であり、人々の集まる場である。またくりかえすのが、檀家・信者達の安泰、そして檀家・信者達の住む村・町の安泰を祈る場である。そのまつりと祈りの行事を通して、寺と檀家・信者は密接に結びついているのである。そ

表8 岩瀬村の仏堂

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
仏堂銘	観音堂	垂迹堂	地藏堂	不動堂	大休堂	観音堂	〃	〃	毘沙門堂	薬師堂	観音堂	大子堂	観音堂	〃	地藏堂	薬師堂	地藏堂	観音堂	地藏堂	聖天堂	地藏堂	
所在地	守屋字源田原	守屋満願寺内	守屋字里	滝字不動畑	滝字殿曲輪	梅田字岩瀬	梅田字長命寺内	梅田字裏田	今泉字境新田	今泉永禄寺内	今泉字町内	今泉字西作田	柱田字雨降山	柱田字中地	柱田字道智	深渡戸字下	深渡戸字殿山	矢沢字栗之内	矢沢字登ノ内	矢沢白山寺内	畑田長命寺内	
本尊		曼荼羅			十一面観音	馬頭観音	聖観音	毘沙門天	薬師如来	子安観音	弘法大師	千手観音	千手観音	地藏菩薩	薬師如来	地藏菩薩	地藏菩薩	地藏菩薩	地藏菩薩	延命地藏		
縁日	六月二七日	六月二七日	一〇月二日	五月二日		六月一七日		一月寅の日	四月八日								五月一日	九月二〇日	九月二六日	八月一五日		
	正徳六年(七二〇)建立仙道三十一番札所西蔵寺持				仙道三十一番札所長命寺持	通称七ツ石観音	天正十六年(一五八八)建立	慶長八年(一六〇三)永禄寺二世方旭安置	天正十年(一五八二)建立					通称高崎観音	堂は今亡、厨子本尊は照光寺内に在、通称六角地藏							

の様子の一部は寺院の年中行事に見ることができる。

それでは、岩瀬村の寺院ではどのような行事が行われていたのでしょうか。月ごとに行事を見て行くことにする。

(一) 一月の行事

毎年、どの寺においても元旦から三日間は法要が行われる。この法要は、年頭にあたり、檀家や村・町あるいは国全体の平安無事を祈り願うもので、寺院の法要中でも重要な行事の一つである。檀家はこの間、寺への年始参りをするのである。この祈願

表9 明治二年「仏堂明細帳」からみた福島県内の仏堂(但し二例以上)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
仏堂の本尊	観音	地藏	薬師	不動	阿弥陀	虚空蔵	毘沙門	聖徳太子	文珠	弁天	釈迦	日蓮(祖師)	勢至	弘法大師
合計	665	336	261	92	81	51	41	27	24	25	26	27	28	29
仏堂の本尊	十王	妙見	秋葉	鬼子母神	姥	歓喜天	荒神	大六天	馬鳴	白山妙理	羅漢	吒枳尼	三十番神	愛染
合計	9	6	6	6	4	4	3	3	3	3	3	2	2	2

とともに大事なのは、三日間の祈りを込められたお札が、寺から檀家に配られることである。永禄寺では、大般若会を行って札を出し、照光寺は、主に理趣分経をあげて札を出す。札を配るのは四日目で、一般に寺の年始という。

(二) 二月の行事

二月の行事で最も早いのは、三日の節分会であるが、これはほとんど行われていないようである。どの寺でも行って来たのは、涅槃会である。涅槃は死・入滅という意味である。二月一五日は、お釈迦様のなくなった日で、各宗派の寺で涅槃会が行われて来た。この日は、お釈迦様がなくなった時の様子を描いた涅槃絵を掛け供養をするが、恐らくかつては、この日集まって来る檀家の人達に、涅槃の絵を見せて釈迦の徳や教えを説明(絵解)したにちがいない。永禄寺や瑞巖寺ではこの日説教をしたという。各寺に涅槃絵があるが、瑞巖寺には「茲時享和三癸亥四月大祥日、南嶺山瑞巖寺什具、碩璞新添」という銘文があり(箱裏銘)、享和三年(一八〇三)に新しく什物に加えられたものである。梅田長命寺の涅槃絵には「天保六乙未年



写真 35 照光寺御祈禱



写真 36 白山寺正月の御札

春、岡崎家中三國幸三郎平諷之画、當村南世話人山本源藏、高村山長命寺現住玉川代」とある(箱蓋銘)。

涅槃会で、仏前に供えられるものに団子がある。涅槃団子といい、寺側又は、檀家の婦人達が寺に集まって作る習わしである。照光寺では、住職が檀家を一軒ごとにお経をあげて回り、お米をもらい、その米を粉にして団子を作った。団子を作るの

は、檀家の婦人達で三〇人位集まり、紅白の団子を二〇〇個位作るという。永祿寺では梅花講の人達(女性)が作り、瑞巖寺では住職が作ったという。

仏前に供えられた団子は、お参りに来た檀家の人達や子供達が食べたりもらって帰るが、魔除けの団子といい、食べると病気等にかからないとか、取っておいて乾燥した団子を布袋等に入れ、山仕事の時身に着けていると、まむし除けになるといわれている。

西蔵寺の場合は、新仏の出来た家(二月一五日以後に家族が亡くなった家)で団子を作って持って来る。新盆にあたる檀家の家は、この日あんこ団子を沢山作り、親類・友達を呼んで団子を食べたり、あげたりする。また寺には、お鉢に大きな団子を入れる。



写真 37 涅槃會 (町守屋西蔵寺)

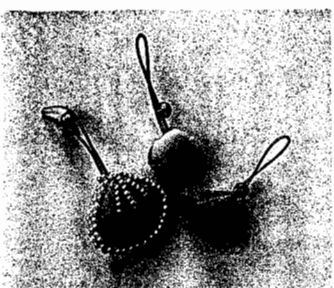


写真 38 魔除けの団子を入れたシジミ貝

親類の人達と一緒に参りしてあげた。寺に供えられた団子は、お参りにきた人達・子供達がもらって帰った。この団子は、乾燥後、袋に入れて腰などに下げていると、虫に刺されないとか、「くそへび」(まむし)に噛まれないといわれている。団子を小さく刻んでは、シジミ貝に入れ、貝を布に包み、包み目をからげて下げる(着物の肩上げの縫糸に下げるといふ人もいる)。

(三) 三月の行事

三月の年中行事中代表的なものに彼岸会があるが、民間ほど行事らしく行われていないらしい。ただ、西蔵寺では、春秋二回の彼岸に、紙塔婆を用意し、檀家回りの時、仏壇の前に下げてくるという。この紙塔婆は、盆の時に用意するものと同じである。

瑞巖寺の縁日 瑞巖寺本堂には千手観音があるが、三月一七日はこの観音のまつりで、特に子年生まれの人が米一升をあげて拜んでもらう。千手観音は子年生まれの守り本尊という。この日お参りの人は、お護符のらくがん(花雁)とお札(千手観音の姿)をいただく。

(四) 四月の行事

四月の行事として、八日の花まつりは各宗に共通であるが、この他、照光寺で地蔵まつりが四月三日、永祿寺では、薬師堂のまつりが花まつりと同じ四月八日、四月二一日には弘法様のまつりがある。

花まつり 四月八日は、お釈迦様の誕生した日で、この日仏教各宗の寺院で祝いのまつりが行われる。誕生会又は灌仏会という。誕生会には、お釈迦様が生まれた時の姿(右手は天を指し、左手は地を指して「天上天下唯我独尊」と言ったというその姿)をあらわした銅製



写真39 瑞巖寺千手観音札

の仏像(誕生仏)を、木製の小さな御堂に水盤を置きその中央に安置し、これを拜む。この御堂は、特に屋根の部分で、時節の花で飾りつめるところから花まつりともいう。この日、寺では甘茶を沸かし、参詣の人々にふるまうが、参詣者は、小さな柄杓で甘茶を汲み、誕生仏にかけ漉ぐ。この意味からか、誕生会を灌仏会



写真40 お釈迦様誕生の図 (今泉永禄寺)

ともいう。甘茶は、子供達が小瓶に入れて持ち帰り、飲んだものという。西蔵寺では、昭和三〇年頃まで花まつりをしたという。御堂の飾り花は、椿・山吹等であったという。永禄寺では造花を飾ったという。瑞巖寺では、昔、露天商が出るほどにぎわったという。甘茶は、これを習字の墨すり水に使うと字が上手になるという話が他では聞かれるが、岩瀬では聞き取れなかった。

照光寺の地藏様 照光寺には、もと字道智にあった地藏(六角地藏・子安地藏)があり、そのまつりが四月三日に行われる。

この日、檀家総代、世話人、梅花講の人達が集まり法要が行われる。檀家のお参りがあり、参詣人には札が出される。

永禄寺の薬師(八旦・弘法様(二二旦) 薬師の縁日には、特に行事らしいものは行っていないという。薬師堂には不動も一緒にまつられており、毎月二八日にお参りにくる人がいる。その参詣者の中には、お酒、玉子等をあげる人がいるという。

昔は、目の悪い人がよく参詣に来たというが、薬師を信仰すると、耳と目の病気が



写真41 花まつり (今泉永禄寺)

に良いというから、薬師への信仰であろうか。しかし、不動尊にも眼病に効くという御利益がある。

(五) 八月の行事

施餓鬼会 餓鬼は仏教用語で、飢えに苦しむ亡者をいう。亡者は、死者の意味であるが、まだ成仏しない者をいう。その、飢えに苦しむ亡者に飲食を施し、経の功德と合わせて供養するのが施餓鬼会である。孟蘭盆会ともいうが一般の盆行事にあたる寺側の行事である。盆は、正月とともに、一般の年中行事中でも、最も重要な行事であるが、寺院においても同様であり、どの宗派の寺においても、本堂に施餓鬼棚を設け、有縁無縁の霊に食を施して供養する。施餓鬼棚は、一般各家の盆棚にあたるものである。岩瀬村の各寺院においても同様で、例えば、西蔵寺の施餓鬼棚は、本尊を背にして設けるといふ。棚の中心には、三界万霊と記した木塔婆、その脇に新霊(仏)の位牌を置く。施しの食(靈膳)としては、団子・油揚げ・切昆布・野菜・果物・菓子・汁等を供える。棚には、旗(施餓鬼旗)を五本立てる。

施餓鬼棚の他、寺では、檀家に渡す紙塔婆を準備する。紙塔婆には「我今普施清浄一切餓鬼」と書く。この塔婆は、法要前に、本堂にある檀家の位牌の前になんて置いておく。

供養の法要は、一三日の朝早く行われる。この日、各檀家の人達が集まったところで法要を行う。法要が終わると、檀家は、位牌の前の紙塔婆をいただいて帰る。この紙塔婆は、篠竹に結ぶが、夕方、仏様迎えの時持って行き、お墓に立て

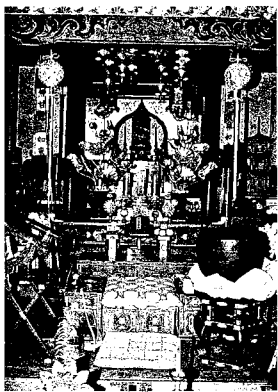


写真42 西蔵寺(町守屋) 施餓鬼棚

紙塔婆 (西蔵寺)

写真43 紙塔婆 (西蔵寺)

るのである。

このような風習は、他の寺院と檀家の間で同じように行われている。

三 村の仏と信仰

(一) 観音信仰・観音講

第一項(村の寺院と仏堂)で述べたように、岩瀬村では観音堂が一番多く、観音信仰が盛んである。その観音を信仰する仲間・観音講も、信仰講中では最も多く、守屋、梅田、今泉、大久保、矢沢、柱田等に認められた。

岩瀬村の観音信仰は、安産・子育てを願うものと馬の安産・子育てを願うものが目立つ。このうち、安産・子育てを願う観音信仰は、最も多かったように思う。その信仰仲間は、観音講、あるいは子安講といわれ、いずれも女性中心に行われて来たものである。同じく女性のみが行って来た十九夜講も観音信仰の一つであろう。十九夜信仰の碑には、如意輪観音像を刻む場合が多い。十九夜講は、定められた特定の日の夜に忌み籠り、月の出を待つという素朴な民間信仰に観音信仰、特に如意輪観音が結びついたものと思う。

馬の安産・子育てを願う信仰は、男性中心の講である。かつて農家が重要な労働力と堆肥源として馬を飼っていた頃は、村内外の観音に、安産・子育て、そして健康を祈願したのである。その信仰の痕跡は、例えば、守屋観音堂(仙道三十二番札所)の祭札(旧六月一六〜一八旦)に、仔馬の生まれた家から紅白の餅が五・六個ずつ奉納されたという話しや、観音堂に掛けられた絵馬等に窺うことができる。梅田字岩瀬の観音堂(仙道三十一番)には、一匹の木馬が奉納されているが、これも馬の安産安全を願って奉納されたものであろう。一方、遠く田村郡小野町の東堂山満福寺観音(堂)に対する信仰も盛んであった。東堂山は、馬守護の観音として知られている。その他、観音信仰のあり方として、特定された三十三カ所の観音を巡拝するという三十三観音信仰がある。岩瀬村域には、仙道三十三観音の札所が二カ所あり、巡拝の様子をみることができる。

さて、以上概略した岩瀬村の観音信仰の具体的な様子は、次のようである。

安産・子育てと観音信仰 岩瀬の観音信仰で最も多く見られたのが、安産と子育てを願う観音信仰である。いずれも女性中心の観音講として行われている。

梅田七ツ石の観音講 講日は一月と七月の一七日で、以前は、七ツ石の観音堂に集まったが、現在は集会場で行われている。講員が輪になって、大きな数珠を三回まわし、子育ての安全、健康などを祈願するという。

今泉町内の観音講 子供を産み育てる年令の女性達が、子育ての願いで集まる講という。二月一七日、順番の宿で行われるが、現在は、近くの温泉に行き一日を楽しく過ごす会となっている。

守屋源田原の観音講 梅田の観音講同様、一月と七月の二回観音堂で行う。七月は、数珠まわし(ずずくり)をするが、一月は観音様に餅を供えて拜んだあと温泉に行つて懇親会という。

大久保のお子安ごもり 宿が順回りや、観音堂・集会場など特定の場所に決まっておらず、お産予定の家が宿となる。年輩の人が、「あそこの嫁さんそろそろでないか」などといって様子を見に行き、先方でも「お願いしたいと思つていたところだ」というような形で宿が決まる。日が決まると、一重持ち寄りで集まり数珠くりをしたという。この集まりをお子安ごもりという。

守屋字里の観音講 俗に子安講ともいう。旧一月一七日が講日であるが、近年は、一月の一七日に近い日曜日に行うことが多い。数え年三三歳の女性(既婚者)が講員である。観音様には、酒とローソク一本をあげ、ローソクが小さくなるまでおこもりをする。出産の近い人は、小さなローソクをいただいて帰るといふ。掛軸は、矢部孝雄家にあるという。同家の文書には、安政二年(一八五五)の「子安観世音入用帳」があり、子安観音は、江戸時代以来続いているのであろう。

矢沢の子安観音講 三月一七日が講日で、宿は回りばん。講員の年令制限はなく、新しく嫁さんが家に来ると、その嫁さんと交替する。宿の床の間には、子安観音の掛軸が掛けられ、その前にローソク一本と大きなし餅と小さな丸餅二個が供えられる。丸餅は、宿の神棚に供えるもちである。掛軸の裏には上と下に次のような銘文がある。上部には、



写真 44 十九夜講掛軸とのし餅 (矢沢)

安産守護
正子安観世音
母子安全
明治七年戊十二月十七日

とあり、下部には一六名の女性名が記されている。当時の講員であろう。現在は一四軒が講員数という。

宿には、餅米五合を持ち寄って餅を搗き、前述のようなのし餅と丸餅をつくり、その他あん餅やとうふ餅等にして食べる。宿では夕食を用意するとい

う。

会食の前に、掛軸を前にして特に唱えことはなく、一同が集まり食事の準備ができたところで会食をするという程度で、夕飯を食べて終りである。昔は屋にしゅうと(姑)をよんだという。講が終わるとのし餅を切り、お護符としてそれぞれ家に持ち帰り皆で食べる。お産のある家では、ローソクを一本借りて行き、陣痛の時そのローソクを神棚にあげ(燈す)、無事の産産を願うという。出産後は、次の講のとき新しいローソクを返すという。

ところで、岩瀬村の石碑を見てみると「十九夜供養」「十九夜講」等と記されたものが多い。例えば、「拾九夜供養仏」□上四十九人／結衆善女人／享保十四酉年(照光寺内)、「十九夜供養佛／施主善女人／享保十四酉末十月十九日」(瑞巖寺内)、「十九夜、施主二十一人、元文二年十一月廿六日」(永祿寺内)、「十九夜供養塔／寛政十一己未天八月日／岡ノ内」(守屋観音堂)、「十九夜／享和元年十二月吉日」(白山寺内)、「十九夜／弘化四丁未歲」(西蔵寺内)等がある。この他にも、長命寺、今泉白方神社他に碑があり、今泉の毘沙門堂の文化一二年の殿鐘にも願主中に「十九夜講中二十二人」とある。十九夜講の主体は、いづれも女性であるが、現在岩瀬村域に見られる女性中心の観音講の中には、十九夜講と重なるものがある。

東堂山の観音信仰 東堂山の観音信仰は、中通り、浜通り、会津と広範囲に及ぶものであった。

岩瀬村では、守屋字町に、元治元年(一八六四)の東堂山碑があり、江戸時代の末には東堂山信仰が及んでいた。矢沢の白山寺には明治四〇年の碑がある。その矢沢下地区の観音講中では、昭和十一年の「観世音講記憶簿」、昭和三九年頃の「東堂山観世音講中帳」を所持し、講を現在も続けている。

従って岩瀬村では、部分的ではあるが、東堂山の観音信仰が、江戸時代の末以来絶えずに続いていたことを確認できる。

東堂山の碑は、大久保や畑田にもある。大久保には、講も二カ所で行われているというが、畑田でも講があったろう。また今泉では、昔、東堂山へ参詣に行ったという話しを聞いた。

恐らく、東堂山信仰は、岩瀬の一部の人というものではなく、馬を飼っていた人に広く行われていたものと思われる。

東堂山信仰は、個人的な例えば、馬がお産する前、あるいは生まれた子馬の健康・安全のため等に参詣するという場合と、講中の形で行われる場合とがあった。このうち講についてそのあり方を、矢沢の例を中心、記録と現在の講の聞き取りから見ることにする。前に示した「観世音講記憶簿」は、昭和十一年に当時の講中のきまりを、簡条書きにしたもので、講日、宿の持ち方と宿の負担、会員の負担である銭の額と米の量、それにその集め方、集会の時刻とあり方、賽銭の扱い、買ひ物の品と数量等が記録されている。これを順に記すと次のようである。

- 一、毎年旧三月十七日ニ行フ事
- 一、当前八順番ニ行フ事
- 一、会費ハ一人当參拾銭内外ノコト



写真 45-a 東堂山(大久保花見堂) 板札と石いぼ観音



写真 45-b 東堂山掛軸

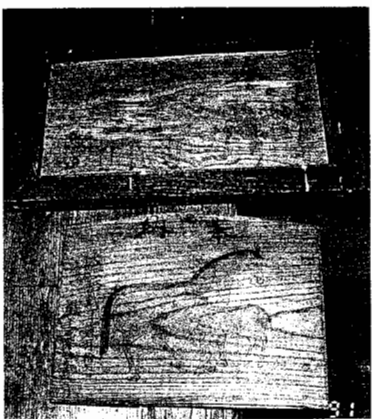


写真 45-c 東堂山 絵馬

- 一、宿ハ糯米一升一汁一菜負擔ノコト
- 一、會員ハ各自糯米七合五勺ノコト
- 一、糯米ハ旧三月十六日午後五時頃各自持寄米洗ヘスルコト
- 一、三月十七日ハ朝食後集會シ中食ト夕食オ会食スルコト
- 一、賽銭ハ明年度ニ繰越スコト
- 一、買立
- 一、御神酒 一本 但シ一升
- 一、黄双砂糖 六百匁
- 一、晒鮎 二本
- 一、菓子 若干

以上の他、一六人の講員名が記されている。

矢沢の観音講は、右のような取り決めで行われて来たが、宿での実際の様子を見ると次のようである。まず集会の部屋であるが、一角に掛軸をかけ、その前には台を置いて、一重の大きな餅と酒一升、それにローソク一本が供えられる。掛軸は、馬頭観音像とその下方に毘沙門天(右)と不動明王(左)を描いた印刷もので、「警城國田村郡東堂山満福寺」とあるから、東堂山から出されたものであろう。掛軸は礼拝の対象として掛けられているのであるが、今は各自お賽銭をあげ、家内安全を祈るもので特に唱えごとはない。かつて、各農家で馬を飼っていた頃とは違い、集會も親睦中心のものになってきているようである。昔は、前日(二六日)、代参者が東堂山にお参りして講員分のお札をうけ、一七日に講員がそのお札をいただくというのが、集會の中心であった。東堂山の祭札は、三月と六月の一六、一七日であった。各地の東堂山観音講も、これに合わせて行われたのであろう。「東堂山観世音講中帳」によると、昭和三九年と四〇年の旧三月一六日、三人の代表が代参しており、「木小札」一七と代参札三をいただいている。一七という数は、当時の講員数と一致する。東堂山では、大札、小札、木守、守札、影、老朱札、二朱札、老歩

札、開運守札の九種の札を出していた(明治七年「御札月々控牒」)が、矢沢の講では、この木札の小札をうけていたらしい。代参札がどのようなものであったかはわからない。この札は、馬屋の入口(トシボロ)に貼っておいたという。矢沢の東堂山の観音講は、本来右のような信仰講で、その形を今も残しているが、実際には、親睦講となっていた。なお、供えた餅は、講終了後、講員で分け、お護符として各家で食べるというので、ここにも、多少信仰的な様子を残している。馬を飼っていた時は、馬にも与えたというが、むしろ馬に与える方が中心であったかも知れない。

馬の供養と馬頭観音 馬が死ぬと大体馬捨て場等に埋葬したのであるが、かつて家畜の中でも家族同様大切にされた馬については、その供養の石碑を立てる人も少なくなかった。その場合碑には、「馬頭観世音」と記される場合が多い。馬の供養を馬頭観音に求めているわけであるが、それは馬の安産・安全を馬頭観音に求めるのと同様の理由によるものであろう。岩瀬村にも、このような馬頭観音碑が多くあると思われるが、このうち滝子北田の碑(天保二年)、畑田字橋本の碑(嘉永七年)

は古い方であろう。その他、白山寺には昭和七年の碑、永祿寺には同一〇年と二年の碑、長命寺には二六年の碑があり、昭和期に建てられたものが多い。なお、梅田の長命寺には、昭和五九年に建てられた「牛頭観世音」の碑がある。

仙道三十三観音札所と巡り 仙道三十三観音の札所は、現在の郡山市、安達郡本宮町、二本松市、田村郡船引町、同郡滝根町、同郡小野町、須賀川市、石川郡玉川村、同郡石川町、同郡古殿町、東白川郡棚倉町、同郡塙町、茨城県久慈郡太子町、西白河郡表郷村、白河市、西白河郡大信村、岩瀬郡鏡石町、同郡岩瀬村にまたがる広い範囲に及ぶものである。その所在地と札所番号は表10の通りであり、岩瀬村には、第三十一番と三十二番の札所がある。今回、この二カ



写真 46 東堂山 御札





写真 47 馬頭観音の碑 (滝字北田)

所の札所を調査し、そこに納められた板や紙の納札から、巡礼の様子を垣間見ることができた。その多くは、昭和以降のものであったが、それ以前の古い納札も含めて、仙道三十三観音巡礼の様子を見ることにする。

さて、仙道三十三観音巡礼関係の資料として最も古いのが、船引町堂山王子神社(仙道第七番札所にあたる)にある、巡礼結願の納札である。これに次のような銘文がある。

當国田村莊船引正覚寺禪心
為道永禪門
為正心禪尼
奥勿千堂三十三度順札結願
維時明應七稔戊午十月吉日

この銘文は、船引正覚寺の禪心という者が、道永と正心という人物(両親か)のため、千堂、つまり仙道三十三観音の巡礼を終えて、明応七年(一四九八)に札を納めたことを示している。しかも三十三度も巡礼を行っていたらしい。

西国三十三所巡礼を行った者の中には、三十三度行者といい、札所巡礼を三十三度行うことを目的とした行者のいたことが知られているが、仙道三十三観音巡礼者中にも、そのような行者がいたことになる。西国札所関係では、石山寺(滋賀県)に、武蔵国の住人道音が西国巡礼を三十三度行った永正三年(一五〇六)の納札が最も古い資料らしい。

いずれにしても、仙道三十三観音札所の開設は、明応七年以前であることは間違いないであろう。

仙道札所に関する中世の資料は、今のところ右の納札のみで、他は江戸時代のものである。その一つは、正徳六年(一七一六)の「陸奥国東山道三十三所順礼案内」(仙道三十三観音札所めぐり)所収で、これに「ふなひき(船引)、志やうがくじ(正覚寺か)、

表 10 仙道三十三観音札所「陸奥国東山道三十三所順禮案内」(正徳六年)による

札所順番	寺名	所	在	札所順番	寺名	所	在
一 番	鎮守山泰平寺	泰平寺は廢寺、現在は郡山市田村町の田村大元神社		一 番	紅雲山龍沢寺	石川郡石川町	現在乗蓮寺
二 番	高岳山如宝寺	郡山市堂前町		二 番	白花山正法寺	石川郡石川町	
三 番	岩作山妙音寺	郡山市富久山町		三 番	松岩山彦根寺	東白河郡古殿町	
四 番	塩田山日輪寺	安達郡本宮町		四 番	金剛山萬福寺	東白河郡棚倉町	
五 番	観法山広音寺	二本松市杉田		五 番	常世山誓願寺	東白河郡城町	
六 番	雲龍山満願寺	田村郡船引町北移		六 番	千勝山神宮寺	東白河郡棚倉町	現在如恵輪寺
七 番	龍頭山東山寺	堂山寺は廢寺、現在は船引町門沢の堂山王子神社		七 番	八溝山日輪寺	茨城県久慈郡太子町	
八 番	寂靜山入水寺	田村郡滝根町		八 番	岩崎山普門寺	西白河郡表郷村	
九 番	東堂山満福寺	田村郡小野町		九 番	成就山満願寺	西白河郡表郷村	
十 番	広沢山甘露寺	須賀川市大字小倉		十 番	高心山神宮寺	白河市鹿島	現在最勝寺
十一 番	小倉山妙福寺	須賀川市大字小倉	現在大慈寺	十一 番	隨雲山龍禪寺	白河市本沼	
十二 番	小寺山東福寺	須賀川市上山小田	現在白山寺	十二 番	中寺山善能寺	西白河郡大信村	
十三 番	白華山上岩寺	石川郡玉川村	現在岩法寺	十三 番	小栗山高福寺		
十四 番	金波山円通寺	石川郡玉川村		十四 番	高村山竹林寺	岩瀬郡岩瀬村	
十五 番	大寺山正福寺	石川郡石川町	現在聖徳寺	十五 番	守屋山真福寺	岩瀬郡岩瀬村	
十六 番	出湯山西福寺	石川郡石川町	現在乗蓮寺	十六 番	羽黒山神宮寺	須賀川市大字江持	
十七 番	白花山法蔵寺	石川郡石川町	現在乗蓮寺	十七 番			

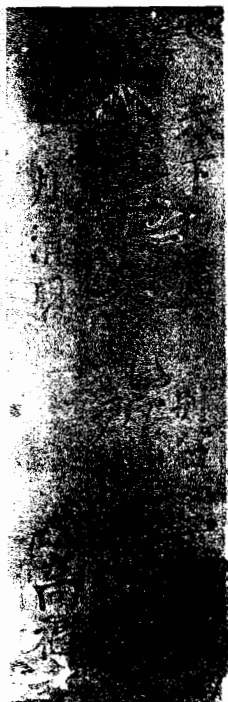


写真 48 仙道三十三
観音御札

中興して志ゆんれい(巡礼)したてまつる」とある。

右によると、正徳六年(一七一六)に、船引正覚寺(か)の住職が、仙道札所を中興したらしい。そうだとすれば、仙道札所巡りは正徳六年頃、中興されるほど行われなくなっていたこと

になる。

しかし、今回岩瀬村守屋の三十二番札所観音堂から、正徳三年(一七一三)の納札が見つかり、銘文により仙道札所巡礼は、全く絶えたのではなく続けられていたし、札所も健在であったことが明らかとなった。

その納札の銘文は、次のとおりである。

一 西国秩父板東為父母菩提白河領石川郡矢吹邑

奉納仙道三拾三所順禮六度成就所

正徳三癸巳天四月吉日 十善了願 俗名大野庄六

この銘文によると、矢吹村の十善了願という人物は、西国・秩父・板東順礼の他、仙道三十三観音札所巡りを六度も行っていた。仙道札所巡りは、中興とされる以前から続けられていたのである。

さて、その後の資料では、仙道二十七番札所であった白河市鹿島の最勝寺(旧神宮寺)に、享保、元文四年(一七三九)、寛保元(一七四一)の巡礼札があり、滝根町菅谷の旧良寛院は、文化三年(一八〇六)「仙道三十三所観音道并所々名所覚記」を書き残している。仙道札所巡りは、江戸時代、絶えずに行われて来たらしい。しかし、その後の様子は、岩瀬村内にある二つの札所の納札から窺うことにする。

表11は、三十一番札所梅田の観音堂、そして三十二番札所守屋の観音堂納札から作成したものである。昭和八年以降の納札であるが、参拝者は、昭和も四〇年代以後に増えているようである。また参拝者の住所を見ると田村と石川が最も多く、次いで須賀川、白河、矢吹以下三春、岩瀬、小野町、滝根町、鏡石である。郡別にみれば田村郡が最も多く、次いで石川郡である。古く



写真 49 納札・矢吹
邑十善了願
の三十二番
札所(守屋)

遡ると明応七年に巡礼を終えた禅心は船引、正徳六年に札所を中興したとする人物も船引であった。正徳三年に六度の巡礼を果たした十善了願は石川郡矢吹村(矢吹は昔石川郡)の人物であった。田村(特に船引)や石川郡は、仙道札所巡拝が昔から盛んであったらしい。

その巡拝は、平成の今日も続いているのである。

四 地藏信仰 地藏講

(一) 六地藏

仏堂の項で述べたように、岩瀬村では観音堂に次いで地藏堂が多い。観音とともに地藏信仰が盛んであったことを物語るものである、その様子は、例えば石造の六地藏にも見ることが出来る。特に、石幢形や灯笼形のものに、六地藏を浮彫したものが

表 11 三十一番札所梅田の観音堂・三十二番札所守屋の観音堂納札による参拝者

No.	紀年	参拝者住所・人数
1	昭和 8.	
2	" 25. 2	石川郡雨田口心講
3	" 44. 8	白河 1人
4	" 52. 春	2人
5	" 52. 11	須賀川 17人
6	" 55. 10	須賀川市上町 8人
7	" 56. 5	石川町 7人
8	" 56. 秋	石川町 4人
9	" 57.	矢吹 1人
10	" 57.	三春 2人
11	" 58.	里守屋 1人
12	" 58. 5	矢吹町同行 2人
13	" 60. 9	小野町 2人
14	" 60. 7	田村移 4人
15	" 60.	石川 5人
16	" 61. 4	石川 4人
17	" 61. 5	船引有志一同
18	" 62. 6	船引 1人
19	" 62. 7	船引 2人
20	" 62. 6	須賀川江持 4人
21	平成 1. 4	滝根町 2人
22	" 1. 5	船引町門沢 1人
23	" 1.	白河 5人, 矢吹 2人, 中島 1人
24	" 3. 3	須賀川 9人
25	" 4. 10	鏡石 2人



写真 50
十所観打ら札
三札寺にけ巡
道一番命つた
仙一(長堂)つた
れ
瑞巖寺の六地藏には「奉寄進六地藏」

を中心にあげると、瑞巖寺、白山寺、梅田長命寺、柱田字道智、同字裏田、北横田字長沢、守屋字源田原、深渡戸字殿山、守屋字北仲田、梅田字右瀬等に見られる。

時貞享四丁卯四月十九日」等の銘があり、白山寺のには「奉造立六地藏念佛諸願成就所」元禄三庚午天七月七日／大願諸衆／施主敬白」とある。また、柱田字道智の六角地藏堂跡のものには「奉造立／願主式拾三人／昔元禄八乙亥五月六日」とある。この他長命寺の地藏は元禄六年、北横田と柱田の地藏は元禄九年、源田原の地藏は元禄一四年、深渡戸の地藏は享保元年、守屋字北仲田のは享保一二年である。これらを見ると元禄前後に六地藏を造立する風が流行したらしい。その六地藏造立の背景に地藏信仰の仲間や地藏講の存在があるように思われる。例えば、深渡戸地藏堂の六地藏には「奉造立六地藏菩薩／享保元丙申十一月吉旦／施主善女五人」とある。また六地藏ではないが、守屋の観音堂にある元文元年（一七三六）の石燈籠には「地藏講結衆中」とある。柱田道智にある元禄八年（二六九五）の六地藏願主として「式拾三人」とある人達も地藏信仰の仲間である可能性がある。滝には、女性のみ地藏信仰仲間があり、毎年二月四日に数珠くりをしている。この数珠は、「南無地藏大菩薩」と唱えて一六回まわすが、このうち六回は六地藏のためにまわすという。かつての六地藏信仰の片鱗かと思う。

(二) 滝の地藏信仰

滝の地藏というのは、字滝原の旧庄屋善方家先祖が笈に入れて背負って来たと称するものである。その先祖というのは、大久とい、彼の像が滝字殿曲輪の大久堂にまつられている。この大久堂にある位牌に「大久栄森居士、湛亮長幸大姉」とある。恐らく夫婦であろう。大久は法名ということになる。このうち大久堂右脇の石碑には、「湛亮長幸大姉、宝曆十三癸未七月廿日」とあり、その夫大久もこの宝歴以前の人物であろう。

ところで、善方家に次のような縁起が伝えられていた。

廻り地藏尊縁起 全

惟るに夫れ地藏菩薩は過去久遠却尔於て廣大の悲願を發し、又嘗て初利天宮に於て大覚世尊の佛勸懲勸の讚歎を蒙り、彌勒出世までの娑婆衆生を付嘱したまへり記、是の故に身を百千万億の世界に分ち、剛強惡世の一切右情を度脱し、苦として抜かざるなし、樂として與へざるなし、然りといへども無縁の衆生は度し難きかゆへに、未來際却を経て種々方便して衆生を度尽なざる、一人も度すへきなきに至て始て正覚を成さんとの誓い、嗚呼憑母舖哉、若し善男善女有て一度供養禮拜勢は、其功德□□何そや、爰に陸奥岩瀬郡長沼の領に滝新田と云ふ村有り、近年廻り地藏尊の象御座して貴賤讚歎供養を営む事有り、立案尺餘にして儀容常の如し、外には高さ三尺餘の笈を成して下に引出し設け佛具などこれに入置きぬ、所謂香品花立等の類なり、笈のうしろに連ん志やくを懸て廻國の修行者の笈に同じ、一村乃裡大小圓家居一日一夜つゝ屋並に止宿し奉里供養するを恰も車輪乃めづるにひとし、供へ物と施主の心に任す、此廻り地藏尊の最初濫觴を尋ね見るに、この里の邑長司善方氏利長と云ふ人有り、其身農業の家に生れて、而も内佛神の敬ひ外民商の事を成せり、去し年、上方一見の為に大和廻り西國順礼等を心掛し尔、和劔郡山辺の去りぬる村に旅宿す、此家の上段を見るに、六部の笈のことき有之、内に地藏尊を安置し、家内の男女是を敬敬す、我國の持佛堂にも異りたれば、定而六十六部なん屋とりしならんと思ひ、主にことのやうす尋ねければ、亭のいへらく、是廻り地藏尊なり、抑此の廻り地藏尊と申は、當國吉野山に往古より有り来り給へり、先年予も大和廻りの折柄、不思議に吉野にて拝し奉り記、何の師何の僧の勸戒と云ふを知らず、帰郷のみげ里具に是を慈父に物語りしき、父の曰、有難き哉此尊の誓願無量無辺也、世尊も千万却の内説き給ふとも尽しと金口志給き、是をうつつて當村に建立し、貴賤老若の結縁にそなへ、一佛因縁の利益を求めんと、享保元年かくのごとくに造立し奉りて大小の家居に廻りめぐらし奉り記、発心ここに熟して童男童女の心なきも鐘を鳴し、名号を唱へき、是の結縁豈それ空らんや、日に添へ日に倍して信心増進して、早くも地藏尊の廻り来り給へん事を待奉る者共多し、程なく遠近の村里有心の僧俗村毎に袖を連ね里、並眉を儲て尊敬志、信仰造立し奉る事今は十ヶ所餘も有りなんと覚ゆ、誠に諸病悉除五穀成就の金言誤り給ふことなきにや、是の廻り地藏尊御座す村にこそ富み人栄へ危病ききんなし、先本尊なき人の所にては追福の節これに向ひ、往生の者有る時にハ臨終佛鉢にたやすかり記、かくの如の功德挙て数へ難しと物語り既におはりぬ、利長誠に有難ことに覺へて、帰國の後是を又此に造立せんと同志の友達彼是に物語りするに、過半得心請合の人有り、然共當時農にまきれ業に倦て未た他の人に語るにいとまなく止に記、爰に知識云へる事有り、夫佛像造立に種々色色有り、其品を見るに多分は名の為め別の為めにして誠至の信に非る

あり、今汝へ廻り地蔵とは、これに異り金銀のちりはむるの造立にもなく、打好鍛工の大佛にも非じ、只々一軀の尊、一ツの笈のミ、何そ其の助力を待んや、若汝一分の情力を□して、然も一村の善根となさは、其功德誰か為ぞや、利長然りとしてついに上京の僧に頼んで尊像を求め奉り記、誠に三世の福田利益多般にして擁護などが無からん、帰依衆生信仰の万民臨終生念往生極楽何の疑をか成さん、今年予此村に止宿すること月餘、利長廻り地蔵の因由予をして書しめんとなん、予謂く此尊の功德金口さへ尽難し、没愚才短知の凡者、何そこれに當らん、然りといへども童蒙の信心を挑げ、報恩謝徳の爲にと思ひ、聊か九牛か一毛を宣て以て需に応ずる者也、殆と下俚の言語をばつと云ふことなり

干時元文三年八月六日 釈杜竜敬白

南無敎命頂禮六道能化地蔵大菩薩

(現在の原本は不明で、郡山田中正能氏撮影の写真によっておこした)

この縁起によると、滝の廻り地蔵は、善方利長が西国順礼に出かけた折、大和郡山(奈良)辺の泊り家で廻り地蔵とその由来や功德を見聞きし、帰国後これに倣って始めたことがわかる。大久というのは、この利長のことであろう。しかし、地蔵は伝承のように大久が背負って来たものではなかったことになる。

利長が宿泊した家の廻り地蔵は、その家の主人が吉野で行われていたものを、享保元年(一七二六)に始めたものという。そして利長が杜竜という旅僧にこの縁起を書いてもらったのが元文三年(一七三八)である。とすると滝の廻り地蔵は、享保元年以降元文三年以前に始められたことになる。

さて、地蔵は大久が背負って来たという筈にあるが、滝原の各戸(四八戸)を時計まわりに順々に廻されている。一軒に三日くらい止まるが、中には、一週間ないし一〇日の家もある。地蔵は、床の間に安置され、その家で食べるのと同じ食事が、朝夕供えられる。次の家へ送るときは、ぼたもちとか赤飯を供える。この時、笈に付けた賽銭箱に賽銭を入れる決まりである。

この地蔵廻しは、戦後まもなくの頃の食料不足の時、大久堂に納めたことがあったが、何人もの子供が亡くなったので、また廻すようになったという。この地蔵を子守り地蔵ともいうが、子供を守ってくれる地蔵という。具体的には、笈に下げられてい

る、「シシ」という布で三角に作ったものご利益に見ることができる。このシシは、地蔵が自分の家に回って来た時に作って笈に下げるのであるが、特に子供がいたり、生まれたりする家では、下げてるものをいただいて、子供に背に縫い付けておく。シシを付けておくと、子供が危険な目に合うような時、地蔵が助けてくれるのだという。子供だけでなく戦争中は、無事帰るようにと新しい布でシシを作り出征兵に付けてやったという。お借りしたシシは、三倍にして返すという。

年に一度、二月四日に、宿に集まって地蔵をまつり、数珠くりをした、昭和五四年から集会所でしているが、以前は二月四日に地蔵が止まっている家が宿になったという。宿では「あした地蔵様だから来て下さい」と前もって知らせ、昼前には一同が集まったという。その日の料理は宿でつくるが、その費用は、笈の賽銭箱の賽銭と会費(今は一〇〇〇円位)でまかされた。昔は米五合位を宿に持ち寄ったという。

数珠くりは、昼食を食べたあとにしたらしい。全部で一六回、「南無地蔵大菩薩」と唱えながらまわす。数珠の房のところがまわってくると一回で、鉦を一回叩き、折った箸を右から左に一本置き、回数を数える。一六回まわすうち、はじめの六回は六地蔵のためで、後の一〇回は、個人が思い思いに家内安全や病氣、災難除けを願ってまわすという。数珠まわしが終わると、数珠を束ね、肩や腰他調子が悪いという人の患部あたりを、軽く叩くようにしている。これも、地蔵や数珠のご利益をあらわすものであるが、このようなことは、数珠まわし一般に見られるものである。

(三) 岩瀬二十四番地蔵札所と巡り

岩瀬二十四番地蔵札所は、現在の須賀川市、長沼町、岩瀬村、天栄村、即ち旧岩瀬郡域に定められている。この札所については、武藤昌義氏の『岩瀬郡二十四番順礼地蔵尊他三尊由来記』、『矢沢の地蔵堂調査資料』等で紹介されているので、これらを頼りとする。

まずこの札所の所在場所と順番を、天保十一年(一八四〇)の「奉納二十四カ所地蔵尊御詠歌」(「矢沢の地蔵堂調査資料」による)から見ると次のようである。

- | | | | |
|-----|--------------|------|--------------|
| 一番 | 牛袋村(須賀川市) | 十三番 | 深渡戸(岩瀬村) |
| 二番 | 北作地藏尊(長沼町) | 十四番 | 大久保(岩瀬村) |
| 三番 | 南横田護真寺(長沼町) | 十五番 | 木の崎岩崎(長沼町) |
| 四番 | 長沼浄性庵(長沼町) | 十六番 | 袋田村長徳寺(須賀川市) |
| 五番 | 須賀川玉岑庵(須賀川市) | 十七番 | 梓衝村長楽寺(長沼町) |
| 六番 | 仁井田福寿寺(須賀川市) | 十八番 | 上江花(長沼町) |
| 七番 | 柱田六角堂(岩瀬村) | 十九番 | 里守屋(岩瀬村) |
| 八番 | 牧の内二つ堂(天栄村) | 二十番 | 関下(須賀川市) |
| 九番 | 今泉(岩瀬村) | 二十一番 | 畑田長命寺(岩瀬村) |
| 十番 | 保土原子安堂(須賀川市) | 二十二番 | 松塚(須賀川市) |
| 十一番 | 大里(天栄村) | 二十三番 | 館が岡里(須賀川市) |
| 十二番 | 須賀川諏訪前(須賀川市) | 二十四番 | 矢沢唱内(岩瀬村) |

この札所の設定は、「岩瀬郡二十四番順礼地藏尊略縁起」「岩瀬郡二十四ヵ所地藏尊和歌之事」によると、梓衝村長楽寺住職(祐勝という)が靈夢を得たことから企てられたものという。各札所の詠歌は、長楽寺住職と庄屋安藤孫右エ門栄信の二人が、延享四年(一七四七)に上京(京都)し、八条大納言に願ったものという。また、札所の順番は寛延二年(一七四九)、長楽寺においてくじ引きで決めたという。

さて、この二十四地藏札所のうち、岩瀬村域には、七番の柱田六角堂、九番の今泉、十三番の深渡戸、十四番の大久保、十九番の里守屋、二十一番の畑田長命寺、二十四番の矢沢唱内(登之内)と七ヵ所ある。六角堂は、もと柱田字道智にあった六角地藏堂で、今は、厨子と本尊が、柱田字切屋敷照光寺内に移されている。この他七番札所の詠歌額があり、表には

七番柱田六角堂 八条大納言

六道に、満よへハすくに六つのかと、み可き堂てなは、丸きは志ら田
発願主 畠田 沙門 勝智(花押)

と陰刻がある。裏には墨書で「寛延二巳季ノ帰空即幻體露信女靈位ノ」ノ寛延未二月納當所住施主高橋半右衛門」とある。また、本尊の半伽地藏を模したと思われる土製の像が二軀(内一軀は首から上を欠く)あり、背部に「奥羽磐瀬郡畑田邑ノ日本六十六ヵ国之土作佛ノ長命之住密行沙門勝智作」とある。

九番の今泉の地藏は、廃寺になった白方神社別当龍泉寺かという(由来記)。十三番の深渡戸の地藏は、当地の旧家小山家の守本尊という(由来記)。十四番の大久保の地藏は、当地小栗山家で守護している地藏堂という(由来記)。十九番の里守屋の地藏は、大字守屋字里にある地藏堂という(由来記)。二十四番の矢沢唱内(登之内)の地藏は、この地の地藏堂である。この地藏堂には額が掲げてあり、これに「二十四番地藏堂ノ(詠歌略)ノ開発行者、畠田村秘密傳燈大阿金剛乘、勝智(花押)ノ施主矢澤村、柳沼氏利右衛門」とある。また、堂内には、一番から二十四番、それに番外の詠歌を記した横長の詠歌奉納板がある。これには、詠歌の最初に「奉納二十四ヵ所地藏尊御詠歌」とあり、後には「天保十二辛丑年六月吉祥日」の紀年の他「御連中」として十二・三人の名が記されている。

岩瀬の札所では、照光寺の地藏と矢沢の地藏堂を見たが、近年に札所巡礼が行われた様子は認められなかった。札所も、その所在場所が既にわからなくなりつつあるところもあり、巡拝が行われなくなって久しいのであろう。

ところで、この二十四地藏札所の順番は、地理的にみて順序がばらばらであるのが特徴的である。これは、その順番をくじ引きで決めたからであるが、実際に巡拝するには不便である。巡拝は、どのような順序でもよかったのであろうが、年不明の「岩瀬寺拾四番地藏菩薩札所」とある、札所の略図(郡山八代家文書)によると、五番の須賀川普応寺(玉岑庵地藏)から始まって、次が十二番諏訪の地藏以下同様に一番牛袋―十番保土原―十一番大里―八番牧ノ内―十八番上江花―四番長沼―十九番里守屋―



写真 51 六角堂（弥之内光寺）

九番今泉一七番柱田一二十一番島田長命寺一十三番深渡戸一三番横田護真寺一十五番木崎岩崎一十七番榊衝長楽寺一二十番北作一十四番大久保一二十一番松塚一十六番袋田一二十四番矢沢唱内一二十三番館カ岡里一六番仁井田真言宗福寿寺一二十番北関下村となっている。このような廻り方もあったのであろう。この図には「山中知之助方」が写す、尤不分明成ル所も御座候得共、写本之通写申候、干時申ノ正月十八日、九拜書、南無大慈悲地藏菩薩」とあり、図の由来が記されている。もとの図は、山中卯之助という人物が持っていたらしいが、どこのどういう人かはわからない。図を写した申の年も不明である。

なお二十四所地藏札所の開設者についてであるが、「岩瀬郡二十四カ所地藏尊和歌の事」によると、榊衝村長楽寺住職と、庄屋安藤孫右エ門両者によるらしい。しかし、六角地藏への詠歌奉納額に「発願主 島田 沙門勝智」、矢沢地藏堂の額に「開発行者、島田村(略)勝智」とあるのが気になる。勝智は、照光寺の土製地藏銘に、「長命之住」とあるから、畑田の真言宗長命寺の僧であろうが、この長命寺僧勝智が、札所の開発者ではなかったのかとも思う。

五 阿弥陀信仰 念仏講

阿弥陀如来に対する信仰は、念仏、すなわち南無阿弥陀仏を唱えることに帰する。その念仏は、特に鎌倉時代以降、宗派を越えて日本中に広まり、念仏する人々の姿は各所に見ることができる。



写真 52 地藏堂（矢沢字登之内）

岩瀬村では、例えば、大久保瑞嚴寺の石造仏(如来)銘文に見られる。

念佛同行二十三人
全善女人二十四人

施主敬白
時住持秀山

貞享五戊辰天
十月十日

とあるのがその銘文である。貞享四年(一六八七)頃の久保には、男女両方に念仏する人々の仲間があった。今泉の永祿寺にある享保七年(一七二二)の六字名号(南無阿弥陀仏の六字のこと)碑には、「惣連衆」とあるが、この人達も念仏信仰の仲間である。また、柱田照光寺にある文化三年(一八〇六)の殿鐘には「願主下柱田村念佛講中」とあり、一八名の男性名が刻まれている。右により文化三年頃の柱田に、男性を中心とした念佛講があったことがわかる。今泉字日中内(今泉新田)毘沙門堂の文化一二年(一八一四)の殿鐘銘にも「念佛講中十八人」とあり、同じ頃今泉字境新田にも念佛講があった。

この他、守屋日向の観音堂(仙道三十二番)境内にある碑文には、「念佛供養塔/安永四乙未曆十月十日/講中十四人」とある。安永四年(一七七五)にこの念佛供養塔を建てた十四人の講中は、恐らく念佛講の人達であろう。同じく守屋字坂ノ下には、「念佛供養塔/安政二年十一月吉辰」、「念佛供養/文久元酉天四月吉祥日、講中」とある二つの石碑がある。これらも念佛する人々の建てたものである。

このように金石文に念仏する人々の足跡を追えば、岩瀬村だけでも相当数見つかるであろう。

これらの念佛講のあり方がどのようなものであったかわからないが、多くは、仲間が、寺院や仏堂、あるいは宿に集まって数珠まわしをしながら念仏するという形のものではなかったかと思う。その伝統を伝える例の一つが、大久保字尼ヶ作で行われて



写真 53 数珠入箱 (大久保字尼ヶ作)

いる数珠くりではないかと思う。ここでは、魔除けとか病気にならないなどといい、毎年初午に行われているが、この数珠を入れる木箱には「御数珠入箱／宝曆九／己ノ二月十日／雨ノ作□」とある。尼ヶ作の数珠くりは、少なくとも宝曆九年（一七五九）頃から続けられていたと見てよいであろう。同じ箱には「文政十一年子七月十五日糸さ志加い」とある。文政十一年（一八一八）に数珠の糸を取り替えたらしい。糸を替えた月日が七月十五日であるところを見ると、盆中である。なお数

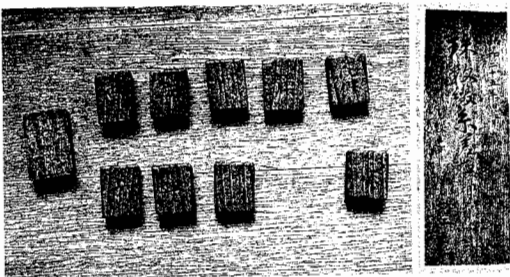


写真 54 百万遍につかわれる札



写真 55 百万遍

珠まわしには、何回まわったかわかるように札が用意されているが、この札の各札には、**南無阿弥陀佛**と六字名号が書かれている。また、札の一枚には「南無阿弥陀佛／昭和二十五年□□／尼ヶ作屋敷連中」とある。

一体に数珠まわしには、本来の仏教とは無縁な病気除けとか、魔除けなど、素朴な信仰が結び付いているが、尼ヶ作の数珠まわしもそのような信仰がもとにある。滝のまわり地蔵で行われる数珠まわしにも、終了後、その数珠で身体が悪いところを軽く叩くようにするが、これも同様の意味である。

六 薬師信仰

薬師は、薬師瓔珞光如来の略。病を治す仏として古代から信仰されてきた。諸仏・諸菩薩の中でも観音や地蔵とともに最も広く信仰されており、福島県内でも薬師信仰は多く見られる。

岩瀬地域では今泉の永祿寺境内に薬師堂が、矢沢字木曾には木製の小祠がある。

永祿寺の薬師堂は、慶長八年（一六〇三）正月、永祿寺の二世方旭和尚が奉安したという（「寺院明細帳」）。永祿寺の裏山を薬師山といい、もとそこに薬師があったという。縁日は四月八日であったが、今は本尊左に安置されている不動と一緒に、毎月二十八日をお参り日としている。以前薬師堂には、目の悪い人がよく拌みにきていたというから、目の病気に利益があったらしい。矢沢の薬師は、森合家の守護仏で、「氏神」的な存在であるらしい。やはり眼病にご利益があり、「目の神様」ともいう。目を突いた人が、郡山で拌んでもらったところ、屋敷の薬師に旗か手拭きをあげるといわれ、米一升と旗を奉納したという話がある。この薬師の前にある一対の石燈籠は、一方が元禄一〇年（一六九七）、一方は宝永五年（一七〇八）四月八日の年号がある。四月八日は、一般的に薬師の縁日であるから、この石燈籠は、この薬師に奉納されたものであろう。木曾の薬師は、元禄一〇年頃既にあったことになる。

七 毘沙門天信仰

毘沙門天は多聞天とも称し、仏教を守護する四天王（持国天、広目天、増長天、多聞天）中、北方の守り仏とされている。一方、毘沙門天功德経では、毘沙門天を信仰する者には福德が得られると説かれるが、日本では七福神の一つに加えられ、民間では福神としての信仰が強い。

岩瀬には今泉字梅田に毘沙門天をまつる毘沙門堂がある。由緒（「岩瀬郡仏堂明細帳」）によると、永祿寺開山の宗山幸門和尚が

毘沙門天に帰依し、天正一六年（一五八八）に堂を建立したという。毘沙門堂には、文化十一年（一八一四）三月一四日紀年の殿鐘があるが、これにも同様の由緒を刻んである。

正月初寅が縁日で、夜籠りし参詣者には札を出している。「仏堂明細帳」には、縦三間、横四間半の籠堂を記録しており、かつてはこの籠堂でおこもりをしたのである。毘沙門様にお参りしたその帰りに福を得た人の話しが伝えられ、この毘沙門にも福徳利益の信仰を認められるが、お札には家内安全の他交通安全の利益も加えられている。最近では昔より参詣者が多くにぎやかになったという。

なお、この毘沙門の親は生駒山信貴山の毘沙門で兄は須賀川長松院の毘沙門という話がある。

八 弁天信仰

大久保字竹の花に弁天池と称する池があり弁才天を祀る石の小祠がある。この池には、池の鴨を鉄砲で撃った獵師が、池の大蛇に追いまとわれた時、弁才天が現われ、祠の屋根を葺き替えよとお告げを受けたという話がある。弁才天はインドで河の神であったというが、日本でも一体に海・川・沼・池他水に関係する所に祀られる。水の使いとされる蛇と弁才天は、水の精、水の神という所で結び付き、弁天様の使いは蛇であるということになって行く。大久保弁天池の話にもそうした背景を読みとれる。

なお、經典では琵琶を持つ弁天の姿が表わされているが、これから芸能の神とされ、一方、七福神の一つに加えられているように、財福をもたらす神としての信仰がある。弁財天の名は、福神を強調した名であろう。

第四節 神仏信仰と講

一 講について

講というのは、本来、講義・講釈の講であり、仏教の書物を講義・研究する僧達の集まりが講であった。それが民間にも浸透し、神仏を信仰する一般の人々の集まりにも、講の字が付けられるようになった。例えば信仰する神仏の名を講名とするもの（観音講・念仏講・山神講等）、神仏を祀る寺院や神社あるいはその寺社の所在地を講名とするもの（成田山講・湯殿山講・伊勢講・春日講等）、經典名を講名するもの（法華講等）、集会の日や干支を講名とするもの（十九夜講・二十三夜講・庚申講・巳待講等）等である。

これらは、いずれも信仰に関係する講であるが、信仰以外の集まりにも講の名を付ける場合がある。例えば、クワガラ（楸柄）講は、葬式に必要な人手と食料・金銭の相互扶助を目的にした講であり、無尽講や頼母子講は、金銭や物品の相互扶助を目的にした講である。

講を目的別に見るならば、大方は信仰を目的にした講と、人手・金銭・物品の融通・助け合いを目的にした講に分けられる。

二 岩瀬村に見られる講

さて、岩瀬村にはどのような講が見られるであろうか。

充分調査した結果ではないが、岩瀬村には次のような講が確認される。まず信仰に関する講では、山神講、熊野講（熊野権現講・権現講）、成田山講、竹駒講、古峰原講（古峰講）、伊勢講、念仏講、観音講、地藏講、毘沙門講、法華講、梅花講、庚申講、十九夜講、二十三夜講、巳待講、子待講、獅子講、ダイシ講、エビス講等、助け合いの講では、楸柄講、無尽講等が確認された。

以上のうち、山神講は、年中行事として行っているものと、西会津の山神(大山祇神社)を信仰するものが見られた。念仏講は、百万遍念仏系のもので、特に地藏信仰と結び付いたものが見られた。「念仏講」という講名ではなく、単に「ジュズクリ」と称しているが、内容は、百万遍念仏の数珠回しを簡略化したもので、仲間が宿で行う講形式のものである。観音講には、如意輪観音を拝む、十九夜講や、馬の安全を祈る東堂山信仰の観音講を含んでいる。地藏講は、享保五年(一七二〇)の碑文(守屋字原田)にのみみられるものである。梅花講は、曹洞宗の寺院で、檀家を中心に御詠歌をあげることを目的につくられた講である。従って寺院中心の講である。法華講も日蓮宗の寺で行われる講。獅子講は、里守屋・梅田に見られ、三匹獅子の奉納を行事の主目的としているところから名付けられている講。ダイシ講、エビス講は、年中行事として行われている講。特に、講仲間を結成している講ではない。

岩瀬地域にみられた講のうち、成田山講、竹駒講、古峰原講、伊勢講、地藏講、庚申講、二十三夜講、巳待講、子待講等は、既に絶えるか、行っている地区があっても、それは僅かである。また、講の集まりがあっても、信仰よりは、娯楽、親睦を目的にしたものになっているのが現状である。その娯楽的要素は強いものの、観音講、山神講、ジュズクリ、地藏信仰の子安講、鍬柄講は、岩瀬地域では、まだしっかり行われている講である。

以上、岩瀬地域の講を概略したが、これら信仰講の大部分は、神仏信仰の中に含めるべきもので、多くはそちらに譲り、ここでは庚申講と二十三夜講のみを述べる。

庚申信仰・庚申講 干支の庚申(こうしん)かのえさる)の日は、六〇日ごとに巡って来るが、中国道教の教にもとづいてこの日を特別の日とする習わしがある。この日の夜、人が寝ると体内にいる三尸の虫が抜け出し、天の神にその人の罪過を告げられる。そうすると早死にするというので、身を慎み寝ない夜を明かすのである。日本では平安時代初期には一般化し、室町時代には全国的な広がりをもせたというが、県内で確認される庚申信仰は、殆んど江戸時代以降のものである。現在でも庚申講と称し、仲間が宿に集まって飲食するところもあるが、岩瀬村では今回確認されず、庚申の供養碑にその痕跡を見られるだけである。そ

の庚申の供養碑は、文字で「庚申供養塔」等と記されたものと、庚申を仏教的に解釈して生れたという青面金剛像(多く浮彫)で表わされたものが確認された。青面金剛の碑は柱田の照光寺(元禄一三年)、大久保字寺田(正徳四年)、今泉字日中内(正徳五年)、柱田字切屋敷、永祿寺等にある。「庚申」という文字の碑は、矢沢の白山寺境内、今泉梅田の毘沙門堂、守屋字坂ノ下等であり、前者には「庚申供養塔/宝曆八寅十月吉日」の他、「講中」として法印祐盛他渡部・古河・村上・道山・影山・本田姓の男性九名の名が刻まれている。毘沙門堂の碑には「庚申供養塔/干時寛政五庚丑天十月吉日」とあり、「庚申供養/享和二戊年二月吉辰」とある。これらの碑によると、岩瀬地域では、元禄年間には庚申信仰が及んでおり、その後も引続き行われていたことがわかる。庚申信仰の仲間は、多く講を結成していたが、白山寺の碑文で岩瀬地域でも同様であったことがわかる。かつて盛んな時期もあったかと思うが、いつ頃まで行っていたかは確認されなかった。大久保や守屋では、もと庚申講があったと記憶している人もいるが、直接経験はないという。

二十三夜講 毎月又は正月、五月、九月、十一月の二三日(陰曆)の夜、月の出を待つ風習があり、これを二十三夜待という。仲間どうしが宿に集まって行うが、この集りを二十三夜講という。略して三夜講・三夜様などと通称されることが多い。庚申待(講)の日待信仰の逆で月待の信仰である。この夜身をつつしんで月の出を待つと願いが叶うともいうが、本来はもっと原始的な月への信仰がもとではなからうか。三夜の三を蚕・産にかけたものか、養蚕信仰、安産信仰と結び付いているところがある。岩瀬地域では、養蚕や安産祈願に結び付いた例を確認できなかったが、この夜(三日)月の出を見る人は金持ちになれるという話が伝えられている。かつては、二十三夜待(講)が盛んであったらしく、供養碑が守屋字鎧田に寛政三年(一七九二)の「廿三夜供養塔」、柱田照光寺に寛政六年(一七九四)の「二十三夜供養」碑、深渡戸字清水石に享和二年(一八〇二)の「廿三夜」碑、柱田字中井に文化二年(一八〇五)の「廿三夜」碑、梅田字関場に文政五年(一八二二)の「廿三夜」碑、梅田字岩瀬に天保十一年(一八四〇)の「二十三夜」碑、守屋字縁光寺に天保十五年(一八四四)の「廿三夜」碑、深渡戸字清水石に弘化四年(一八四七)の「廿三夜」碑、守屋字二本木に嘉永二年(一八四九)の「廿三夜」碑、畑田字橋本に嘉永五年(一八五二)の「廿三夜」碑がある。こ

の他守屋字源田原、柱田字道智、下大久保にも「廿三夜」の碑があり、今泉字境新田毘沙門堂には、昭和六〇年九月に建立された碑もある。

第五節 おしんめ様・御師・淡島様

一 おしんめ様

おしんめ様というのは、一対一組で、二〇センチメートル前後に切った竹や細い木の棒先に、裂き布を何重にもかぶせたものである。木の場合には、一方を男神、一方を女神（いずれも顔のみ）に彫ったものもある。一種の神体である。

これを扱うのは、主として女性で、この神体を両手に持ち、神下ろしをしたり、身体の悪いところをなでるようにしてはらったりした。

岩瀬では、西蔵寺と柱田の神明神社におしんめ様が確認された。

西蔵寺のは、近くでこれを扱っていた人がなくなり、寺へ納められたものという。男神と女神の一対で、女神の棒の部分に「元治元甲子七月、里」、同じく男神には「信之助」と陰刻されている。江戸時代の末につくられたものである。このおしんめ様は、高さ四六センチメートルの厨子に入れられている。前は観音開きで、その反対側には背負紐が付けてある。おしんめ様を、この厨子に入れ、背負って歩いたのであろう。その人は、右手に男神、左手に女神を持ち、上下に振りながら、伊勢神明天照皇大神宮様をはじめ、全国都々浦々の神々様、オンソワカ、オンソワカ、オンソワカ、オンソワカ、オンコロコロ、オンコロコロ、アピランケン、オンコロコロオンコロコロ、アピランケン、アピランケン、アピランケンソワカと唱え、病人の場合はおしんめ様でその患部を軽くたたき、占いや口寄せの場合は、おしんめ様を上下に振りながら神意を伝

えたという（横山裏石氏報告）。

おしんめ様は、例えば、「けんべきはったから、おぶってもろかな」などといって頼んだという。

西蔵寺にはこの他にも一対おしんめ様がある。やはり男神と女神であるが、衣が着せられていない。これにも銘があり、男神にも、「寛政陸戌寅年」、女神には「寛政六戌寅年」と墨書されている。

神明神社のものは、やはり男神と女神の一対で、両神がちょうど入る大きさの木箱に入れられている。由来については不明である。なお同社にはこの他、おしんめ様を大形にしたもの（男神と女神）がある。衣は着せられておらず、棒の部分を、板の台にあけた穴に押し込んで立ててある。おしんめ様として扱われたのかどうか不明であるが、一応ここに紹介しておく。

二 岩瀬を訪れていた御師

御師というのは、例えば伊勢とか熊野など大社に所属し、信者への守札配付や祈願受付あるいは宿所（宿坊）提供等を行っていた下位の宗教者である。伊勢のような大社になると御師の数は相当数にのぼった。彼らは、それぞれ全国各地に檀那を持っていて（その檀那の範囲が縄張）、毎年、富山の葉売りのように檀那回りをし、札を配って歩いた。御師は、各檀那から札料を集め、

所属の神社に納めたのである。

岩瀬にも様々な御師が来たと思うが、確認できたのは伊勢御師と津嶋御師である。

伊勢御師では、岡田善九大夫が岩瀬郡下の多くを檀那場としていたが、岩瀬地域では、今泉と里守屋が善九大夫の檀那場であった（出羽・陸奥壇那場所并旅宿名前帳）。従ってこの地には、毎年善九大夫の代理（本人が回るとは殆んどなく、手代や代官が来た）が訪れ守札と土産を配ったはずである。大久保安藤家には、三日市大夫次郎の札があり、三日市大夫次郎御師も岩瀬に檀那を持っていたらしい。



写真 56 神明神社のおしんめ様

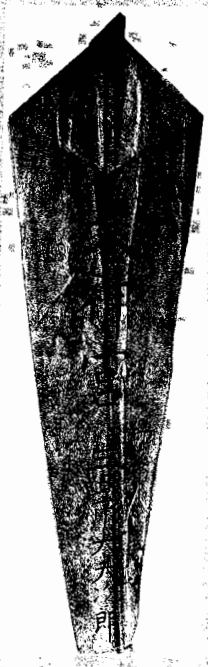


写真 57 御師のお札



写真 58 淡島様のお札

津島御師については、矢部孝雄家に

御師堀田右馬大夫

津島御初穂神納帳

名代山田崑内

と表題のある文書がある。津島は、愛知県津島市の津島神社で、この御師堀田右馬大夫が岩瀬村内に壇那場を持っていたことになる。山田崑内という人物が、堀田御師の名代として壇那まわりをしたのであろう。その初穂料の取りまとめは、かつて庄屋であった矢部家で行ったものと思われる。

三 淡 島 様

淡島様というのは、和歌山県和歌山市の加太神社が代表である。婦人病等にご利益があるとされるが、その利益を語り札等を配って歩いた女性をも淡島様という。

岩瀬では、大正頃に淡島様(女性)を見たという人がいる。お宮のようなものを持ち、それには、ボロきれが下がっていたという。ものもらいのように、女の人達が米をあげていたという。淡島様の札には「安産」とあるので、婦人病のみでなく、安産の御利益もあった。

第八章 交通・運搬・通信・交易

村史民俗編執筆者一覧

第一章 衣・食・住

第一節 食とくらし

第二節 衣とくらし

第三節 民家

一 民家の調査方法

二 岩瀬村の民家

三 建築儀礼

四 調査民家

第二章 生業生産と生活

第三章 諸職

第四章 社会生活

第五章 人の一生

第六章 年中行事

第七章 神と仏の信仰

第八章 交通・運搬・通信・交易

第九章 民俗芸能

第一節 獅子舞

第二節 神楽

第三節 民謡

第四節 わらべ歌

第十章 口承文芸

村川友彦

村川友彦

小沢弘道

小沢弘道

小沢弘道

村川友彦

小沢弘道

村川友彦

村川友彦

阿部俊夫

小沢弘道

菊池健策

藤田定興

阿部俊夫

菊池健策

菊池健策

小沢弘道

小沢弘道

小沢弘道

田村敬喜

小沢弘道

田村敬喜

田村敬喜

村史編纂民俗調査協力者一覽 (順不同・敬称略)

町守屋

五十嵐 清	古宇田 房吉	小関 新治	吉田 義勝	赤羽 ミツ
渡邊 定春	関根 イシ	増子 政勝	吉田 憲平	増子 タミ
石沢 一芳	増子 武	関根 正博	鈴木 豊晴	高坂 進
佐藤 春子	赤羽 達夫	関根 利夫	増子 勇	高坂 正治
池田 一治	渡邊 敏夫	増子 精一	渡邊 芳明	渡邊 可人
増子 織	渡邊 信治	吉田 政之	増子 博孝	五十嵐 イネ
矢部 キミ	渡邊 ヒサヨ	高坂 シツ子	関根 春男	渡邊 サト
渡邊 マサノ	関青木 ヨシ子	深沢 テルヨ	関根 竹	吉田 修治
関根 正利	吉田 ソヨ	諸橋 ツルヨ	赤羽 ミサヲ	渡邊 スイ
増子 マキ	佐藤 正治	関根 正雄	吉田 正	吉田 三郎
青木 富男	高坂 一	鈴木 スイ	横山 眞石	吉田 義道
関根 ハツエ	小野 五月	深沢 千衛	横山 孝	横山 ユキ
高坂 二三四	佐藤 正治	関根 トモエ	増子 範之	
里守屋				
鈴木 甲子雄	矢部 典相	熊田 慶子	熊田 三男	矢部 恒幸

源田原

新田

熊田 礼子	鈴木 正英	半澤 豊	半澤 喜芳	鈴木 光雄
矢部 孝志	矢部 幸雄	善方 春夫	矢部 照夫	矢部 昌稔
佐藤 ミチエ	矢部 典郎	中野 君子	藤根 豊子	熊田 俊子
鈴木 スミ子	川田 好子	清野 武彦	辻 春男	熊田 美子
矢部 七郎	吉田 サダ子	矢部 信雄	矢部 守正	矢部 孝雄
矢部 致由	矢部 イト	五十嵐 強	川田 好徳	五十嵐 キクノ
矢部 徳英	熊田 八重子	矢部 民雄	佐藤 ヨシノ	清野 三枝
矢部 豊				
矢吹 正孝	高坂 喜男	國分 トミヨ	高坂 照孝	高坂 実
高坂 和三	矢吹 一郎	草野 正喜	桑名 省吾	國分 一二
勝安 男	矢吹 勝弥	桑名 新治	高坂 ヨシ子	桑名 博
桑名 ハル	高坂 馨介			
佐藤 富美子	古田 トメ	安齊 キヌ子	関根 光司	坂本 義明
青木 正	青木 正子	安田 安次	大友 大二	會田 勝雄
伊藤 久夫	水沼 義雄	會田 照子	會田 善栄	上妻 恵子
清野 紀美子	坂本 富美子	大原 基義	小原 アイ子	青木 美代子
坂本 和子	桑名 清明	高橋 収司	佐藤 和恵	関根 義夫

坂本けい子 佐藤正喜 渡邊實 坂本喜一郎 安齊達雄
 安齊ウノ 坂本宏 関根義一 坂本喜一郎 安齊達雄
 今泉 影山昭子 吉田博子 佐々木郁郎 三浦里吉 中山晴美
 古川千代 善方みのり 川田善衛 深澤峯子 安藤博
 和田重信 堀江芳 戸島友孝 作間みち子 川田クニ
 川田保秀 菅野正 青木賢伍 伊藤ハルヨ 中路健一
 吉田正芳 菅野壬申 古川ミヤ 淵柳定春 吉田之豊
 中路二郎 阿部光吉 中原利八郎 高橋トミ 中山アキノ
 木船光家 阿部光吉 阿木村直枝 深澤イチ 吉田敬儀
 古川賢良 吉田性作 阿部タキ 三浦義正 川田キミエ
 木船一 深澤キミ 川田キクノ 川田キヨ 中路アサノ
 川田正光 安達寿男 木船金次 阿部ミヤコ 深澤ミツノ
 吉田ナツ子

下柱田

二瓶秀豊 二瓶寛子 中山定 二瓶喜真 吉田一
 二瓶泰広 戸島弘子 吉田好範 二瓶修一 二瓶幹子
 有賀喜秋 吉田孝子 渡邊春雄 二瓶カツ子 國分光
 木船レン 深谷正夫 猪越義朋 吉成カツ子 有賀善秋

弥六内

國分健吉 國分良一 國分章子 國分宣昭 國分泰明
 古川久一郎 佐藤重幸 古川三良 深谷美智子 國分正一
 國分美代子 國分ヨシ子

上柱田

上妻ハツ 添田一也 佐藤三國 熊田マキ 熊田イト子
 上妻孝義 佐藤禎一 熊田ハル 佐藤トミ 佐藤芳子
 添田正志

東部

橋本智 関川晃一 渡邊正子 橋本照子 飯橋本守
 飯田ゆみ子 矢部仁一 矢部豊昭 橋本豊作 佐々木ツギ
 橋本美彌 神原健一 神枝一三 橋本栄子 二瓶チエノ
 伊藤ミサヲ 伊藤マシ 橋本榮之 會田信子 高市ハル
 小川篤 會田ミヨ子 遠藤孝 佐藤祐一 小川忠士
 増子博秋 佐々木定男 矢部ヨシエ 熊田タミ子 熊田ハル子
 橋本明 円谷マス 矢部一吉 橋本明夫 矢部豊彦

梅 関根貞雄 小川康男 矢部ノブヨ 小川ウン 矢部周蔵
矢部とし子 二瓶芳男 熊田昭二 小川嘉内 藤根常司
伊藤富士彌 橋本常子 石川芳時 半澤春夫 矢部正門
木村博志 山本ナヨ 山本正高 森岡貞雄 大原秀晃
渡邊信夫 藤根和秀 山本与宇 山本貞子 大原秀子
渡邊一夫 山本武 山本カツミ 渡邊隆 加藤康雄
倣田中臣二 橋本ヒロ 藤根重吉 山本行子 山本久夫
倣山本光男 二瓶ヨシエ 矢部孝慈 山本行子 山本久夫
赤間清 渡邊タマ 矢部孝慈 山本行子 山本久夫
熊田栄子 渡邊ハルヨ 善方弘中 善方フミノ 善方留女與

滝 泉田昌司 善方リヨ 善方一男 善方直一 善方ハツエ
善方ミサオ 渡邊ハルヨ 安田ミエ 善方敏明 善方留女與
安田守 渡辺 勲 善方弘中 善方フミノ 善方留女與

上大久保 相樂オハル 安藤フミ子 小栗山春子 濱尾キヨ 相樂弘巳
相樂ユキ 二瓶勝巳 相樂幸男 相樂トシ 相樂ナカ
阿保光三 安藤正一 相樂賢一 相樂トシ 阿部武弘

二瓶勝秋 二瓶盛市 相樂源蔵 倣二瓶トク 浜尾キン
小栗山金一 安藤茂 安藤キヌ子 安藤昭二 浜尾清明
濱尾秀子 古川クラ 古川榮傳 田村敏子 田村元
古川文夫 古川一郎 安藤治雄 安藤廣一 相樂秋子
相樂安造 相樂甲一郎 相樂豊治 相樂義一 相樂修一
相樂あけみ 相樂正一 相樂定雄 相樂健雄 相樂榮太郎
水野友吉 相樂一郎 深谷俊一 川田時雄 深谷喜美代
深谷元樹 深谷良吉 深谷征一 田村正夫 田村信篤
田村忠祐 深谷太一 安藤義三 小栗山一雄 内山久
相樂仙太郎 相樂サツ 深谷榮身 安藤ヨシ 相樂昭
古川キミヨ 相樂與一 深谷キヨ 相樂義徳 深谷良助
倣相樂六郎 深谷栄一 深谷おね 田村長市 深谷貞夫
深谷俊子 相樂勝重 相樂春雄 田村長市 深谷貞夫
滑沢 轡田倉治 相樂君江 相樂次司 深谷武 深谷文厚
古川道子 相樂精勇 相樂喜一郎 遠田たみ子 能登清士 小栗山清美

下大久保

二瓶勝秋 二瓶盛市 相樂源蔵 倣二瓶トク 浜尾キン
小栗山金一 安藤茂 安藤キヌ子 安藤昭二 浜尾清明
濱尾秀子 古川クラ 古川榮傳 田村敏子 田村元
古川文夫 古川一郎 安藤治雄 安藤廣一 相樂秋子
相樂安造 相樂甲一郎 相樂豊治 相樂義一 相樂修一
相樂あけみ 相樂正一 相樂定雄 相樂健雄 相樂榮太郎
水野友吉 相樂一郎 深谷俊一 川田時雄 深谷喜美代
深谷元樹 深谷良吉 深谷征一 田村正夫 田村信篤
田村忠祐 深谷太一 安藤義三 小栗山一雄 内山久
相樂仙太郎 相樂サツ 深谷榮身 安藤ヨシ 相樂昭
古川キミヨ 相樂與一 深谷キヨ 相樂義徳 深谷良助
倣相樂六郎 深谷栄一 深谷おね 田村長市 深谷貞夫
深谷俊子 相樂勝重 相樂春雄 田村長市 深谷貞夫
滑沢 轡田倉治 相樂君江 相樂次司 深谷武 深谷文厚
古川道子 相樂精勇 相樂喜一郎 遠田たみ子 能登清士 小栗山清美

渡邊 一明	柳沼 トモ	古川 源一	柳沼 利一	柳沼 一豊	増子 一美	佐藤 敏正	樽川 正男	柳沼 吉男	堀江 秀行	佐藤 正夫	道山 久信	佐藤 一	沢 和	金敷 和一	増子 公夫	川西 國男	相樂 洋	本田 久雄
糸井 伊勢次	柳沼 貞男	鈴木 淳	柳沼 正一	柳沼 所一	森岡 アキ	佐藤 貞雄	岩本 啓志	柳沼 敬三	柳沼 健一	森田 昌	柳沼 健吉	柳沼 健吉	鈴木 マツノ	鈴木 マツノ	降矢 未壽	相樂 次郎	田辺 俊三	鈴木 貞夫
糸井 一郎	森合 盛重	佐藤 一良	柳沼 ヤス子	柳沼 英夫	三島木 夫	本田 吉男	鈴木 廣幸	柳沼 正明	柳沼 千恵子	本田 光代	道山 喜市	佐藤 キヨ子	相樂 準	相樂 準	仲島 英治	二瓶 一男	仲西 保	小野寺 モト
本田 トメ子	渡邊 太郎	古川 竹二	本田 隆	伊藤 正男	本田 勇雄	宇野 行夫	増子 あゆみ	柳沼 ハツエ	柳沼 稔夫	桑名 タミ子	佐藤 克雄	赤塚 清二	赤塚 清二	濱尾 啓一	佐藤 直政	國分 義信	二瓶 文弥	二瓶 文弥
本田 民夫	糸井 三郎	本田 幸作	本田 タミ	N・H (本田)	川田 享	本田 政雄	柳沼 有	柳沼 向	佐藤 良儀	柳沼 智徳	本田 茂夫	小林 勝則	小林 勝則	善方 タキ	熊田 セツ子	相樂 弘二	相樂 弘二	相樂 弘二

大河原 大三	須田 チウ	上妻 トクイ	藤原 キミ	佐藤 文助	磯海 カツ	磯海 新一	渡邊 喜代重	磯齊 ハル	小針 源喜	渡邊 博	黒津 善一	磯海 俊郎	小針 源夫	石井 正十	大賀 啓	磯海 利雄	畑 田
上妻 徳栄	小林 ハル	大塚 正弘	小林 靖一	佐藤 シメ	小針 武夫	磯海 ミツヨ	古川 文雄	渡邊 一	小針 哲雄	小針 主水	古川 一男	磯海 元一	赤塚 二郎	石井 功	石井 政知	小針 友一	畑 田
大河原 修	佐藤 勝雄	大塚 千代子	上妻 一雄	佐藤 マツヨ	小針 太郎	渡邊 トミ	渡邊 久一	渡邊 トヨノ	小針 久	小針 イチ	古川 弘光	添田 正和	小針 イツ子	齊藤 ヤス子	石井 静子	伊藤 義徳	畑 田
須田 俊彌	佐藤 リキ	小林 三男	大塚 シケ	大塚 シケ	田村 アキノ	渡邊 サイ	渡邊 四郎	渡邊 敬喜	兼子 千鶴伊	磯海 イツミ	渡邊 吉春	渡邊 伊子	小針 イチ子	渡邊 正治	真島 貞一	小針 正夫	畑 田
上妻 昭夫	須田 功英	佐藤 一郎	上妻 喜文	上妻 喜文	添田 ハル	石井 榮一郎	渡邊 シツイ	渡邊 イチ	小針 イチ	小針 宗雄	渡邊 利男	小針 平主	鈴木 勝雄	石井 艶子	兼子 俊	兼子 俊	畑 田

深渡戸

常松 英雄	岡部 恒雄	舟橋 實	赤塚 和治	赤塚 三郎
舟橋 晴保	渡辺 浩一	舟橋 邦男	赤塚 金四郎	渡邊 松重
渡辺 武	渡邊 正俊	小山 健吉	渡邊 正邦	小林 榮一
菅野 欣弥	岡部 義弘	菅井 忠男	小山 マサ	岡部 富一
岡部 キクヨ	渡邊 梅	渡邊 峰子	赤塚 美恵子	
みどりヶ丘				
及川 隆美	小林 博行	二瓶 広秋	佐藤 明彦	樽川 勝成
安田 弘	高坂 光	樽川 四郎	小針 守	山口 弘典
柳沼 主	八木橋 正春	渡邊 精昭	田邊 勝美	兼子 明美
佐藤 幸一	渡邊 明美	佐浦 りえ	安藤 晃	貴島 千津子
酒井 敦男				

村外協力者

郡山市 大河原 司 (下守屋・飯豊和氣神社)
 矢吹 亀重 (守山・田村大元神社氏子総代)
 柳沼 武志 (守山・田村大元神社氏子総代)
 柳沼 繁 (守山・田村大元神社氏子総代)
 伊藤 常男
 小針 美喜子 (挿画)

須賀川市 渡辺 力 (江持・羽黒山神宮寺総代)

長沼町 鈴木 良辰

鈴木 元吉

江連 栄

資料提供者

県文化センター／須賀川市立博物館／長沼町史編纂室／岩瀬村農業協同組合／西蔵寺／永祿寺／照光寺
 長命寺(梅田)／瑞巖寺／白山寺／長命寺(畑田)／守屋神社／白方神社／神明神社／柱田神社／熊野神社
 石沼八幡神社／鹿島神社(大久保)／矢沢神社／白山比賣神社／鹿島神社(深渡戸)／諏訪神社／村内各講中

村史編纂関係者名簿(順不同・敬称略)

岩瀬村史編纂委員

監修者 幽鈴木 敬治(福島大学名誉教授)

誉田 宏(福島県文化センター歴史資料課長)

委員長 常松 忠勝(村長)

副委員長 川西 国男(教育長)

副委員長 佐藤 隆(村史編纂専門委員会委員長)

編纂委員 伊藤 儀人(助役)

安田 守(収入役)

深谷 直一(村議会議長)

- 佐藤 正治(村議会文教厚生常任委員会委員長)
 深澤 慶一(村文化財保護審議会委員)
 戸田 有二(村史編纂専門委員会副委員長)
 二瓶 勇治(村教育委員会委員長)
 小針 良昭(岩瀬村農業協同組合代表理事組合長)
 相楽 安治(岩瀬村商工会長)
 佐藤 萬吉(総務課長)
 吉田 憲一(教育次長)
- 前編纂委員
 星野 保勝(元村議会議長)
 伊藤富士弥(前村議会議長)
 轡田 倉治(元村議会文教厚生常任委員会委員長)
 三浦 里吉(前村議会文教厚生常任委員会委員長)
 二瓶 芳男(前教育長)
 上妻 弘一(前村文化財保護審議会委員)
- 岩瀬村史編纂専門委員
 監修者 鈴木 敬治(福島大学名誉教授)
 菅田 宏(福島県文化センター歴史資料課長)
 委員長 佐藤 隆(元白河高校教諭)
 副委員長 戸田 有二(国士館大学・日本考古学協会会員)

- 専門委員
 藤田 定興(福島県文化センター歴史資料課長補佐兼学芸員)
 村川 友彦(福島県文化センター歴史資料課主任主査兼学芸員)
 阿部 俊夫(福島県文化センター歴史資料課主査)
 菊池 健策(福島県立博物館主任学芸員)
 小沢 弘道(山都町公民館係長)
 田村 敬喜(元村収入役)
 阿部健一郎(安積女子高校教諭)
 根本 文彦(白河高校教諭)
 渡辺 明(福島大学助教授)
 矢島 俊雄(栃木県佐野市教育委員会文化財保護係長)
 伊藤 博幸(岩手県水沢市埋蔵文化財調査センター副所長)
 矢部 豊(前村文化財保護審議会委員)
 松澤 和彦(元国士館大学図書館事務長)
 深澤 慶一(村文化財保護審議会委員)
 横山 真石(前村文化財保護審議会委員)
 上妻 弘一(前村文化財保護審議会委員)
 江藤 吉雄(元須賀川高校教諭)
 戸石 清一(元須賀川高校教諭)
 磯辺 武雄(国士館大学教授)

村史編纂室

本田 民夫(前村文化財保護審議会委員)

室長 深沢 和夫

主査兼社会
教育主事 橋本 公夫

嘱託専門員 遠藤 孝子(平成二年八月)

小針 喜夫(平成七年四月)

佐々木郁美(平成六年四月～平成七年三月)

高井 剛(平成四年六月三〇日退職)

臨時職員 中野 洋子

岩瀬村史 第5巻 民俗編

平成七年九月発行

編集 岩瀬村史編纂委員会
発行 岩瀬村

福島県岩瀬郡岩瀬村大字柱田字中地前二二
電話 〇二四八―六五―二二一代

印刷 有限会社平電子印刷所
福島県いわき市平北白土字西ノ内十三